学位論文（二〇一七年三月）

芥川龍之介の中国体験

――その〈中国〉表象から浮かび上がる〈日本〉――

岡山大学大学院社会文化科学研究科
宋　武全

芥川龍之介の中国体験
——その〈中国〉表象から浮かび上がる〈日本〉——

【目次】

序章　芥川龍之介の中国体験に関する先行研究と本論文の着眼点
第一節　芥川の中国体験に関する先行研究・・・・・・・・・・・・・四
第二節　本論文の着眼点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七

第一章　「上海游記」に見られる日本へのまなざし
——『大阪毎日新聞』の対中国言説のスタンスとの関わり——
第一節　芥川の上海体験と「上海游記」・・・・・・・・・・・・・一三
第二節　「上海游記」における在中日本人について・・・・・・・・一五
第三節　「私」のアイデンティティの構築・・・・・・・・・・・・二六
第四節　「上海游記」に見られる「私」の〈中国〉表象・・・・・・二七
第五節　「上海游記」に見られる〈中国〉表象と『大阪毎日新聞』・・・・・二七

第二章　「江南游記」に見られる日本へのまなざし
——大阪毎日新聞社の要請との関わり——
第一節　芥川の江南体験と「江南游記」・・・・・・・・・・・・・三四
第二節　「江南游記」の語り方について・・・・・・・・・・・・・三四
第三節　芥川による「江南游記」の創作・・・・・・・・・・・・・三六
第四節　「江南游記」に見られる「私」の追求するテーマ・・・・・三九
第五節　大阪毎日新聞社の要請と「私」の追求するテーマ・・・・・四〇
第六節　大阪毎日新聞社の要請に応える「私」の〈中国〉表象・・・四六
第七節　詩を作れない「私」と詩を作れる芥川・・・・・・・・・・五三

第三章　「長江」に見られる日本へのまなざし
——関東大震災に繋がる『女性』の編集方針との関わり——
第一節　芥川の長江体験と「長江」・・・・・・・・・・・・・・・五八
第二節　〈小説〉として掲載された「長江」・・・・・・・・・・・五九
第三節　「長江」が〈小説〉として掲載された原因と『女性』の編集方針・・・・・六一
第四節　関東大震災による芥川の芸術への再考と「長江」・・・・・六四
第五節　「長江」と関東大震災・・・・・・・・・・・・・・・・・六六

第四章　「北京日記抄」に見られる日本へのまなざし
——中国の社会運動に対する『改造』のスタンスとの関わり——
第一節　芥川の北京体験と「北京日記抄」・・・・・・・・・・・・七五
第二節　芥川の北京の印象に関する先行研究・・・・・・・・・・・七六
第三節　「北京日記抄」に見られる〈中国〉表象・・・・・・・・・七七

第四節　〈中国〉表象と「北京日記抄」のモチーフとの関連性・・・・・・・・・八四
第五節　「北京日記抄」と中国の社会運動・・・・・・・・・・・・・・・・・八五
第六節　中国の社会運動に対する日本のメディアの反応・・・・・・・・・・・八六
第七節　中国の社会運動に対する『改造』のスタンス・・・・・・・・・・・・八八
第五章　『支那游記』に見られる日本へのまなざし
　　――『改造』の読者意識との関わり――
第一節　芥川の中国体験と『支那游記』・・・・・・・・・・・・・・・・・・九六
第二節　「自序」に見られる改造社の読者意識・・・・・・・・・・・・・・・九六
第三節　『支那游記』にまとめられたテクスト・・・・・・・・・・・・・・・九九
第四節　「雑信一束」に見られる改造社の読者意識・・・・・・・・・・・・一〇一
第五節　『支那游記』に見られる〈中国〉表象と〈日本〉との関わり・・・・一〇六
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一〇九
謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一一六

【凡例】

○本論文中に引用した「上海游記」は、『大阪毎日新聞』（一九二一年八月一七日～九月一二日）に拠った。「江南游記」は『大阪毎日新聞』（一九二二年一月一日～二月一三日）に拠った。「長江」は『女性』（一九二四年九月号）に拠った。「北京日記抄」は『改造』（一九二五年六月号）に拠った。「自序」と「雑信一束」は、『支那游記』（改造社　一九二五年一〇月）に拠った。

○芥川龍之介の他の文章は、『芥川龍之介全集』（全二四巻　岩波書店　一九九五年一一月～一九九八年三月）に拠った。その中で、メモの本文は「手帳　七」は『芥川龍之介全集』第二三巻（岩波書店　一九九八年一月）に拠った。

○本稿での言説の引用に際し、旧字は適宜新字に改め、圏点・ルビ等は省略した。引用文に付した傍線はすべて稿者による。

○論文・評論・新聞記事等のタイトル、書籍中の作品名は「」で、書名及び雑誌、新聞名は『』でそれぞれ表記する。

序章　芥川龍之介の中国体験に関する先行研究と本論文の着眼点

第一節　芥川の中国体験に関する先行研究

一九二一年三月下旬から七月中旬にかけて、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の特派員として中国東部の都市、「上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等」（注１）を遍歴した。帰国後、「上海游記」（一九二一年八月一七日～九月一二日『大阪毎日新聞』朝刊及び『東京日日新聞』に連載）、「江南游記」（一九二二年一月一日～二月一三日『大阪毎日新聞』朝刊に連載）、「長江」（『女性』一九二四年九月号、後に「長江游記」として『支那游記』に収載）、「北京日記抄」（『改造』一九二五年六月号）を次々と発表した。その後、「自序」と「雑信一束」を添えて、『支那游記』（改造社　一九二五年一〇月）と題する単行本を刊行した。こうした芥川の中国体験とその関連テクストについては、先行研究によって様々な角度から論じられている。

まず、芥川の上海の旅と「上海游記」に関する先行研究を概観しよう。戸田民子（注２）は一九二〇年代初頭の上海の里見病院について考察している。西田禎元（注３）は芥川における上海見物、中国文人訪問、京劇体験について調査している。吉岡由紀彦（注４）と和田博文（注５）は当時上海の地理や政情について論考している。王書瑋（注６）は「上海游記」に記された「徐家匯」に関わる基督教受容史の変遷について述べている。姚紅（注７）は芥川の書簡に収録された上海日本語新聞の切り抜きの内容を確認し、芥川と上海の日本語新聞との関わりについて論を立てている。単援朝（注８）は芥川と李人傑との触れ合いについて論述している。村田好哉（注９）、秦剛（注10）、管美燕（注11）、徐暁純（注12）は、芥川の上海体験と横光利一、谷崎潤一郎、劉吶鴎、村松梢風等の上海体験との接点について論じている。

次に、芥川の江南の旅と「江南游記」に関する先行研究を概観すると、現段階では施小煒（注13）、呉佳佳（注14）、林姵君（注15）三研究者の論文しか見られない。三者はいずれも、芥川の中国古典の書物からえた江南像と現実の江南との引き裂かれた関係について考察している。

それから、芥川の長江体験と「長江」（「長江游記」）を中心とする研究については、管見の限りまだ現れていないようである。

さらに、芥川の北京体験と「北京日記抄」に関する先行研究を概観すると、飯倉照平（注16）と単援朝（注17）は、芥川と胡適、及び魯迅との触れ合いについて考察している。張明傑（注18）は芥川と辜鴻銘との交流を確認した他、芥川の雍和宮、万里の長城、紫禁城への探訪、胡適との会見、胡蝶夢の観劇体験などについても述べている。秦剛（注19）は芥川の北京訪問における名所見学、書画探訪、戯曲観賞について考察している。単援朝（注20）と王書瑋（注21）は、芥川の北京への郷愁や憧れを指摘している。

最後に、芥川の中国体験と『支那游記』をマクロ的な視点から論じた先行研究について概観しよう。青柳達雄（注22）、松澤信祐（注23）、林嵐（注24）、魏大海（注25）は、芥

川と、李人傑、魯迅、巴金、章炳麟との関わりについて考察している。施小煒（注26）は芥川の中国旅行経路や一九二〇年代初期の上海についての情報を調査している。小澤保博（注27）は一九二〇年代における中国の時局や上海などの江南地方の都市状況について考察している。白井啓介（注28）は一九二〇年代上海と北京の都市状況の差異について分析している。陳玫君（注29）と秦剛（注30）は谷崎潤一郎と芥川龍之介における〈中国〉表象の相違について比較している。秦剛（注31）と西山康一（注32）は、『支那游記』に見られる文芸的側面や芥川の自己相対化・滑稽化の手法を提示している。施小煒（注33）と姚紅（注34）は、芥川の観劇体験について考察している。単援朝（注35）と顔淑蘭（注36）は『支那游記』の抄訳としての夏丏尊「中国遊記」の中国における評価や受容について述べている。吉田精一（注37）、祝振媛（注38）、関口安義（注39）等は芥川の〈中国〉表象について論じている。

以上をまとめると、先行研究は主に芥川が訪れた都市・名勝、中国知識人との交流、日本文化人の中国訪問との比較、観劇体験、芥川の〈中国〉表象について論を立てているように見える。こうしたいくつかの側面の中で、稿者は特に芥川の〈中国〉表象について注目したい。

芥川の〈中国〉表象について、先行研究は往々にして『支那游記』を考察の対象としてきた。早くも一九三〇年代から、『支那游記』に示された芥川の〈中国〉表象が取り上げられ、批判的な検討が行われてきている。巴金は『支那游記』を批判し、「形式以外、彼（稿者注：芥川龍之介）の作品には何の中身もないのではないか。彼の全作品は空虚という一言で批判できる」（巴金「幾段不恭敬的話」『太白』（一（八）　一九三五年一月　日本語訳は稿者による）と酷評している。吉田精一は「つまらない読物ではないが、要するに小説家の見た中国であって、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかもしれぬような、支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない」（吉田精一『芥川龍之介』　三省堂　一九四二年一二月）と述べている。武田泰淳は、「いたずらに研ぎ澄まされた感覚の断片を走らせたばかりで、ついに大陸国民の苦悩を自己の問題として取り上げ得なかった」（武田泰淳「中国の小説と日本の小説」『文学』（一八）一九五〇年一〇月）と捉えている。宮本顕治は、『支那游記』を「敗北の文学」（宮本顕治「敗北の文学」（『文芸』（一一（一五））一九五四年一二月）と断言している。猪野謙二は、芥川が「中国人の生活に密着した状態では見て」いない、上海の「植民地的雰囲気、一種のエキゾチシズムを見ている」（猪野謙二「〈座談会・近代日本文学史〉（一三）　明治から大正へ」『文学』（二九）一九六一年九月）と主張している。神田由美子は、「芥川は「中華民国十年」という当時の激動する政治的状況を故意に無視し、中国の著名政治家、運動家との会見にも深い政治的興味は抱かず、現代になお残存する「支那風俗」や「支那美人」の面影に自己の中国像を重ねて、強い関心を見せている」（神田由美子「中国旅行」　菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』明治書院　一九八五年一二月）と評している。以上からみると、従来の評価として、『支那游記』に示された芥川の〈中国〉表象を批判的にとらえる見方が一般的であったこ

とが分かる。

一方、一九九〇年代以降は、『支那游記』に示された芥川の〈中国〉表象を見直し、再評価する動きが目立つようになっている。その中で単援朝は、「近代史の転換点ともいうべき五・四運動以来の中国の現状のなかで、最も注目されるべき部分を共産党の代表者李人傑との会見を通して捉え、メモ風の文語体による記事でさりげなく伝えるところに、芥川の「ジャアナリスト的才能」を認めなければならない」（単援朝「上海の芥川龍之介――共産党の代表者李人傑との接触――」（『日本の文学』（八）一九九〇年一二月）と主張している。青柳達雄は、『支那游記』に散見される中国に対する「悪口」を「一概に芥川の「支那」否定の意思と受け取るのも早計にすぎる」（青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（畢）」（『関東学園大学紀要』（一八）一九九一年三月）と論じている。関口安義は「芥川の中国へのまなざしは自己の日本人としての好悪感情をベースにしながらも、それを冷徹に突き放し客観的に事実を事実として伝えるジャーナリストのまなざしとなっている」（関口安義『特派員芥川龍之介　中国で何を見たのか』　毎日新聞社　一九九七年二月）と評している。松澤信祐は「中国で体験した中国民族運動の高揚が芥川の意識を新たにさせ、なお、李人傑を始め新しい知識人との面会により、ある程度帰国後の芥川がプロレタリア文学に抱く好意的積極的関心を促した」（松澤信祐「芥川龍之介―中国旅行後の創作意識」『民主文学』（三八七）一九九八年一月）と論じている。こういった再評価は、芥川の中国体験を中国に対する「悪口」に拘った従来の評価から解放し、『支那游記』に示された〈中国〉表象に一定の評価を与えるようになったことによるものである。

二〇〇〇年以降は、芥川の〈中国〉表象を再評価する試みが加速し、『支那游記』をより前向きに捉える研究成果が次々と発表されている。その新たな試みの中で、秦剛は「もう少しで黄禍論（注40）に賛成してしまふ所だつた」と述べた芥川の立場について、「紛れもなく「排日」的なもの」と受け止めている。すなわち、「ここでの「黄禍」とは、日本帝国主義が中国に与える禍害を指していて、それは中国的な立場からの、日本の満州進出に対する冷ややかな批判である」とし、最終的に「『支那游記』は自意識の中で「日本人」である自己を客体化するところから始まり、また外部的な視点から現下の「日本」を批判的に捉えることで終わるテクストになっている」（秦剛「『支那游記』―日本へのまなざし」（『国文学　解釈と鑑賞』（七二（九））二〇〇七年九月）と結論付けている。関口安義は、『支那游記』が、当時日本の「検閲というきびしい言論事情」による表現の自由の制限に影響されたと論じ、検閲に「気づかない、あるいはそれを軽視した論文が、芥川を断罪し」（「『支那游記』の再発見――芥川特派員の成果検討」（関口安義『芥川龍之介研究』（二）二〇〇八年八月））たのであるとした。その上で、関口は「いまや『支那游記』を語らずして芥川龍之介の全貌は捉えられない時代にさしかかっている」（関口安義『芥川龍之介新論』翰林書房　二〇一二年五月）と『支那游記』の意味を強調している。陳生保と張青平は『支那游記』の「知識性、趣味性、可読性」を認めながら、その「高い歴史的価値」を評価している。さらに、「芥川が中国を愛し、特に日本帝国主義の中国侵略に反対していた」（「芥川

龍之介『中国游記』導読」　陳生保・張青平訳『中国游記』　北京十月文芸　二〇〇六年一月　翻訳は稿者より）とまで主張し、『支那游記』における所謂中国に対する「悪口」という従来の評価を徹底的に覆し、中国を愛したという論点を打ち出している。以上の先行研究からは、『支那游記』一巻を通じて、芥川の〈中国〉表象を探ろうとする傾向がはっきりと見て取れる。

第二節　本論文の着眼点

稿者は、芥川の中国体験と彼の中国認識を位置づけるには、『支那游記』に収められた六つのテクスト、すなわち、「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」（「長江」）、「北京日記抄」、「自序」、「雑信一束」を慎重に検討する余地があると考える。というのは、これらのテクストが、いずれも一九二一年の中国体験を記したものにもかかわらず、「上海游記」の発表から「雑信一束」の完成まで、すでに四年の歳月が経過していたからである。こうした長い執筆期間において、中国体験そのものに対する芥川自身の捉え方に、認識の変化が生じたかどうかについて、テクストごとに詳しく検証する必要があるだろう。こうした検討を行うにあたり、これらテクストの初出メディア発表時のオリジナルのあり方を研究の視野に入れなければならない。具体的には、「上海游記」と「江南游記」は、『大阪毎日新聞』に連載され、「長江」（「長江游記」）は『女性』に、「北京日記抄」は『改造』に掲載され、それらを収録した単行本としての『支那游記』は改造社によって発行された。このように、初出メディアが錯綜する中で、各テクストが発表された当初、初出メディアによって、どのような編集方針で紙（誌）上に位置づけられていたのか、特に各テクストに映し出された芥川の〈中国〉表象と初出メディアとの関係は、看過できない重要な問題であろう。

近年、芥川の中国体験に関連するテクストと初出メディアとの関わりについて、研究の動きが始まり、すでに二篇の研究論文が発表されている。篠崎美生子は、「上海游記」が『大阪毎日新聞』に連載された当時の、「『大毎』は（中略）日本が優先的に領有してしかるべき「支那」という場に他国が進出していることを報じて危機感を煽ろうともする」（篠崎美生子「「上海游記」を囲む時間と空間」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園大学平和文化研究所　二〇一五年三月）『大阪毎日新聞』の対中国の報道スタンスについて、考察している。秦剛は、「北京日記抄」と『改造』に掲載された五・三〇事件の関連報道との関わり（秦剛「改造社による中国言説の構築――『支那游記』から『大魯迅全集』の刊行に至るまで」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園大学平和文化研究所　二〇一五年三月）について指摘している。両者の研究は、芥川の中国体験についての新たな研究の方向性を提示しているといえるだろう。ところが、「上海游記」と「北京日記抄」に示された芥川の〈中国〉表象と初出メディア（『大阪毎日新聞』と『改造』）との関連性については、まだ詳しい考察が行われておらず、さらなる考察が必要となるだろう。

それに加え、前述の通り、「江南游記」についての先行研究は極めて数少なく、「長江」（「長

江游記」）を中心に論じる先行研究は未だ現われていないようである。したがって、「江南游記」と「長江」（「長江游記」）に示された芥川の〈中国〉表象と初出メディア（『大阪毎日新聞』と『女性』）との関連性についての研究は、まったくの空白状態と言わざるをえない。

これらの問題を念頭に置いて、稿者は長い執筆期間にわたって発表された六つのテクストを、『支那游記』の束縛から、初出メディアの紙（誌）面に復元させた上で、これらのテクストに示された芥川の〈中国〉表象と初出メディアとの関係を明らかにしたい。

本論は五章から成り立っている。

第一章では芥川の上海体験と「上海游記」を取り上げる。「上海游記」において、中国旅行を実現した「私」は異境である中国を舞台に、在中日本人と触れ合ったことによって、日本人としてのアイデンティティが構築されていったことが確認できた。いわゆる、芥川が中国を愛し、日本の帝国主義を批判するという近年における先行研究の見解は、「上海游記」では確認できなかった。日本人を優先し、日本の国益を重んずる「上海游記」にみられる芥川の〈中国〉表象は、「「日本」の利益を偏重」（篠崎美生子「「上海游記」を囲む時間と空間」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園大学平和文化研究所二〇一五年三月）する『大阪毎日新聞』の対中国のスタンスと繋がっているようである。この文脈で捉えていくと、「上海游記」は、『大阪毎日新聞』の対〈中国〉言説スタンスの近くに位置したテクストと考えられる。

第二章では芥川の江南体験と「江南游記」を取り上げる。「江南游記」において、「私」は中国における三種の風景に対し、見下したり、揶揄したり、感傷を漏らしたりする態度を示している。こうした芥川の〈中国〉表象は、啓蒙者目線で「古き支那」を批判した上で、「新しき支那」のプラスの一面を観察してほしいという『大阪毎日新聞』の要請に対する応答と見て取れる。

第三章では芥川の長江体験と「長江」（「長江游記」）を取り上げる。「長江」において、「私」の〈中国〉表象は三年前の中国に対する痛烈な批判から、好意的なそれへと変化していったことが確認できる。こうした好意的な〈中国〉表象が導かれた背景には、「情緒の琴線を鳴らしてゐる」「文学」を以て、「大震大火災の記念日が近づく」「不安と焦燥と恐怖との夏」を、救おうとする『女性』の編集方針が浮かび上がる。

第四章では芥川の北京体験と「北京日記抄」を取り上げる。「北京日記抄」において、「私」の負の〈中国〉表象が確認できる。こうした〈中国〉表象は、「北京日記抄」が発表された当時の、中国の社会運動（後に五・三〇事件までに発展）に対する『改造』の編集方針が関係していた可能性がある。

第五章では改造社発行の『支那游記』に収録された「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」（「長江」）、「北京日記抄」を概観した上で、『支那游記』に新たに添えられた「自序」と「雑信一束」を取り上げる。この「自序」と「雑信一束」から、第四章で触れた中国の社会運動によって高まった日本読者の中国への関心に応えようとする改造社の狙いが窺え

る。

本論文の最終目標として、芥川の中国体験の関連テクストに示された芥川の〈中国〉表象と初出メディアとの関係を明らかにしたい。その上で、芥川の〈中国〉表象という鏡に映ってくる〈日本〉を提示したい。

注

1 「自序」（芥川龍之介『支那游記』（改造社　一九二五年一〇月））　一頁。
2 戸田民子「芥川龍之介「上海游記」――里見病院のことなど」（『論究日本文学』（四六）一九八三年五月）。
3 西田禎元「芥川龍之介と上海」（『創大アジア研究』（一七）　一九九六年三月）。
4 吉岡由紀彦「「上海游記」」（関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　旅とふるさと』　至文堂　二〇〇一年一月）。
5 和田博文「芥川の上海体験」（『国文学　解釈と教材の研究』（四六（一一））　二〇〇一年九月）。
6 王書瑋「「上海遊記」の「徐家匯」――基督教受容史に芥川の見出した「近代」」（『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』（一二〇）　二〇〇五年三月）。
7 姚紅「芥川龍之介と上海における日本語新聞――書簡に収蔵された新聞切り抜きをめぐって」（『文学研究論集』（二八）二〇一〇年二月）。
8 単援朝「上海の芥川龍之介――共産党の代表者李人傑との接触――」（『日本の文学』（八）一九九〇年一二月）。
9 村田好哉「横光と芥川――上海を巡って」（『解釈』（四四（五））　一九九八年五月）。
10 秦剛「上海小新聞の一記事から中日文壇交渉を探る――谷崎潤一郎・芥川龍之介の上海体験の一齣」（『日本近代文学』（七五）二〇〇六年一一月）。
11 管美燕「上海の位相――芥川「上海游記」と劉吶鷗の上海」（『国文学　解釈と教材の研究』（五三（三））二〇〇八年二月）。
12 徐暁純「日本人作家の見た一九二〇年代の上海――芥川龍之介と村松梢風との比較」（『千里山文学論集』（八二）二〇〇九年九月）。
13 施小煒「芥川龍之介における「江南」」（『江南文化と日本――資料・人的交流の再発掘――』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月）。
14 呉佳佳「芥川の中国体験――「支那遊記」を中心に」（『札幌大学総合論叢』（三六）二〇一三年一二月）。
15 林姵君「芥川龍之介は中国旅行をどう語ったか――「上海游記」から「江南游記」への屈折――」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園和平文化研究所　二〇一五年三月）。
16 飯倉照平「北京の芥川龍之介――胡適、魯迅とのかかわり」（『文学』（四九）一九八一年七月）。
17 単援朝「芥川龍之介と胡適――北京体験の一側面――」（『言語と文芸』（一〇七）一九九一年八月）。
18 張明傑「芥川龍之介と辜鴻銘」（『明海大学教養論文集』（一二）二〇〇〇年一二月、張明傑「底知れぬ京都――芥川龍之介と北京――」（明海大学教養論文集（一四）二〇〇二年一二月、張明傑「底知れぬ京都――芥川龍之介と北京――（続）」（明海大学教養論文集

（一五）二〇〇三年一二月）。
19 秦剛「芥川龍之介が観た一九二一年・郷愁の北京」（『人民中国』（六五一）　二〇〇七年九月）。
20 単援朝「芥川龍之介・癒しの東洋（一）――北京への「郷愁」を中心に――」（『崇城大学研究報告』（二九（一））　二〇〇四年三月）。
21 王書瑋「芥川が中国旅行に求めたもの―「北京日記抄」―」（『千葉大学社会文化科学研究』（一一）　二〇〇五年九月）。
22 青柳達雄「李人傑について――芥川龍之介「支那游記」中の人物」（『言語と文芸』（一〇三）　一九八八年九月）、青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説」（『関東学園大学紀要』（一四）　一九八八年一二月）、青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学園大学紀要』（一六）　一九八九年一二月）、青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（畢）」（『関東学園大学紀要』（一八）　一九九一年三月）。
23 松澤信祐『新時代の芥川龍之介』（洋々社　一九九九年一一月）。
24 林嵐「芥川『支那游記』における〈英雄〉・〈豪傑〉」（『語学教育研究論叢』（二三）　二〇〇六年二月）。
25 魏大海「芥川龍之介の『支那遊記』――章炳麟とのギャップを中心に」（『異文化としての日本――内外の視点――』（国際日本学研究叢書（一一）　法政大学国際日本学研究センター　二〇一〇年三月）。
26 施小煒「中国――芥川龍之介…来て見て書いた」（関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　旅とふるさと』至文堂　二〇〇一年一月）。
27 小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（上）」（『琉球大学教育学部紀要』（七五）二〇〇九年八月）、小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（中）」（『琉球大学教育学部紀要』（七七）二〇一〇年八月）、小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（下）」（『琉球大学教育学部紀要』（七八）　二〇一一年二月）。
28 白井啓介「中国――『支那游記』と一九二一年上海・北京との不等号」（関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　その知的空間』至文堂　二〇〇四年一月）。
29 陳玫君「谷崎潤一郎と芥川龍之介による「支那」の表象――紀行文を中心に――」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部』（五二）二〇〇四年三月）。
30 秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象――〈支那趣味〉言説を批判する『支那游記』――」（『国語と国文学』（八三（一一））　二〇〇六年一一月）。
31 秦剛「『支那游記』―日本へのまなざし」（『国文学　解釈と鑑賞』（七二（九））　二〇〇七年九月）、秦剛「『支那游記』における「私」――「文芸的」紀行文の成立と記述者の表現意識をめぐって」（『芥川龍之介研究』（二）　二〇〇八年八月）。
32 西山康一〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」（『時代の中の異文化交流』　岡山大学文学部　二〇一一年三月）。
33 施小煒「芥川龍之介の観た京劇」（『文芸と批評』（七（八））　一九九三年一〇月）。

34 姚紅「芥川龍之介と中国の伝統演劇――同時代中国の知識人との比較を通して――」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』(一一)　二〇一一年三月)。

35 単援朝「同時代の中国における芥川龍之介『支那游記』」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』(六)　二〇〇一年一二月)、単援朝「中国における芥川龍之介――同時代の視点から――」(『崇城大学研究報告』(二六(一))　二〇〇一年三月)。

36 顔淑蘭「「声」の転用 ―― 夏丏尊による『支那游記』抄訳の問題系――」(『文学・語学』(二〇六)二〇一三年七月)、顔淑蘭「芥川龍之介『支那游記』と夏丏尊訳「中国遊記」の問題系」(『日本文学』(六三(六))　二〇一四年六月)。

37 吉田精一『芥川龍之介』(三省堂　一九四二年一二月)。

38 祝振媛「支那遊記」(『国文学解釈と鑑賞』(六〇(一一))　一九九九年一一月)。

39 関口安義「『支那游記』の再発見――芥川特派員の成果検討」(『芥川龍之介研究』(二)二〇〇八年八月)、関口安義『芥川龍之介新論』(翰林書房　二〇一二年五月)。

40 「黄禍論」は一八九〇年代に端を発した日清戦争において勝利した日本を対象に、白人に及ぼす黄色人種の禍害を説いた論である。ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が同戦争における日本の勝利に警戒心を抱き、黄禍論の普及に大きな役割を果たした(ハインツ・ゴルヴィツァー著・瀬野文教訳『黄禍論とは何か』(草思社　一九九九年八月)、『岩波講座近代日本文化史(五)　編成されるナショナリズム』(岩波書店　二〇〇二年三月)参照)。

第一章　『上海游記』に見られる日本へのまなざし
――『大阪毎日新聞』の対中国言説のスタンスとの関わり――

第一節　芥川の上海体験と「上海游記」

「第一次世界大戦後、日本はヨーロッパやアジア諸国とのかかわりがいっそう繋くなり、新聞社では海外通信欄の充実につとめていた。また、新聞社では作家を特派員として海外に出張させ、紀行文を書かせるようにもな」（注１）った。『大阪毎日新聞』はその中の新聞社の一つである。

芥川龍之介の中国訪問は、『大阪毎日新聞』と深く関わっているといえる。芥川が中国の古典や書画等に関心を持ち、「以前から、中国に行きたがって」（注２）いたことは周知の通りである。一九一八年二月、芥川は「大阪毎日新聞と正式に社友契約を結」（注３）んだことをきっかけに、中国旅行が現実味を帯び始めた。同年の「一一月二〇日付の、西村貞吉という中国にいる友人に宛てた書簡の中で芥川は、「僕も支那に行きたい」というようなことを語って」（注４）いる。芥川の「大阪毎日新聞への入社」（注５）が決まった一九一九年とその翌年の一九二〇年に、芥川は『大阪毎日新聞』の文芸部長を務めていた「薄田泣菫や南部修太郎に実際に中国旅行の計画を手紙で書き送っている」（注６）。

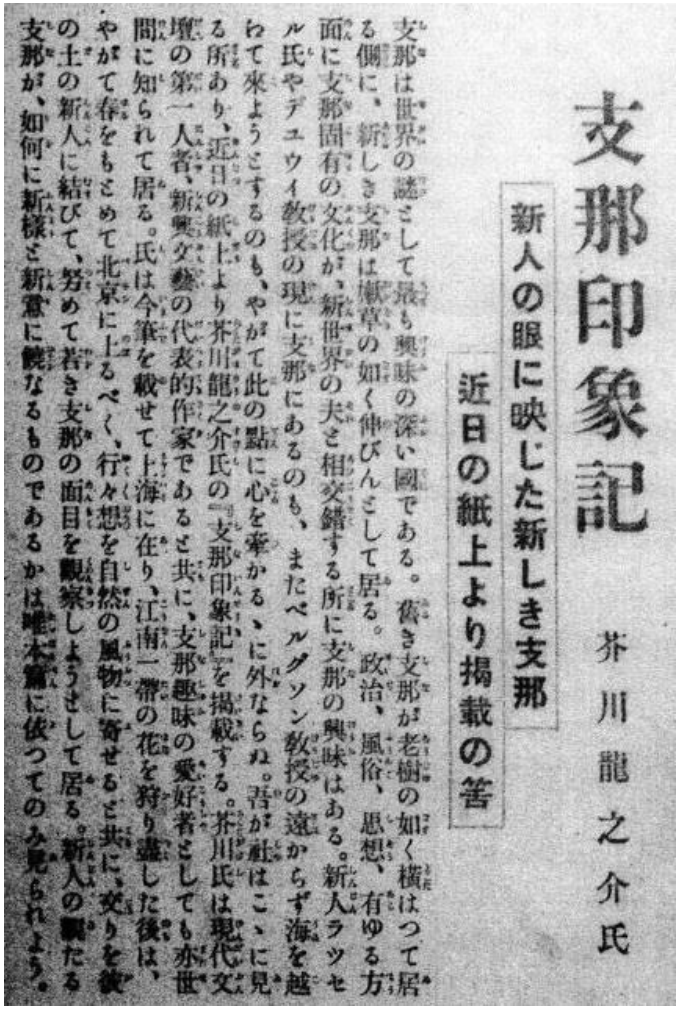
一九二一年に、芥川はついに中国旅行を実現する日を迎えることとなる。まず、「二月一〇日ごろ、海外特派員として中国に主張しないかとの打診があ」（注７）り、続く二月二一日、芥川は「大阪毎日新聞社で、海外特派員として中国に赴くための打ち合わせをする。（中略）その場で、中国視察旅行を正式に了承し、通信文を『大阪毎日新聞』へ寄せることを約束」（注８）した。

一九二一年三月一九日午後、芥川は「東京駅発の夜行列車に乗って」、「中国の旅に赴いた」。二一日「門司港から熊野丸に乗船、上海へ向かう予定であった。ところが、汽車の中で発熱、三九度にも及んだ」。やむをえず、「旅程を変更」し、「二〇日、大阪で途中下車する」。「かくて門司に直行できず、薄田淳介（稿者注：薄田泣菫のこと）の世話によって、大阪毎日新聞近くの北川旅館で静養することになる」。以降の一週間ほど芥川は「北浜のホテル、北川旅館で過ごす」。このように、「高熱のため大阪で足留めをくった」芥川は、「二五日発の近江丸に切り替えた。が、健康はすぐに回復しなかったので、結局、二八日発の築後丸に乗船することになるものの、大阪を経ち、下関の宿に泊まった二七日、再び高熱に襲われる」。「が、とにかく薬で押さえ、翌二八日」、芥川は「客船築後丸の乗客として上海へ向かったのである」。一九二一年三月三〇日午後、芥川を「載せる築後丸は、中国の上海港に到着する」。「翌日三一日から彼は病で床に就き、一日置いた四月一日に、乾性肋膜炎の診断で上海の日本人経営の病院、里見病院に急遽入院することになる」。「入院は四月二三日までの約三週間で終わった」。「病気から解放された」芥川は、「さっそく上海の町の見物に出かける」（注９）。

上述の一連の紆余曲折を経た芥川は、このように中国上海の旅を迎えた。この訪問につ

いて、一九二一年三月三一日付の『大阪毎日新聞』は、関連記事として「支那印象記　新人の眼に映じた新しき支那　近日の紙上より掲載の筈」（注10）を掲載した。

図一『大阪毎日新聞』に掲載された関連記事



支那印象記

芥川龍之介氏

新人の眼に映じた新しき支那

近日の紙上より掲載の筈

支那は世界の謎として最も興味の深い國である。舊き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラツセル氏やデユウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越わて來ようとするのも、やがて此の點に心を牽かるゝに外ならぬ。吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文藝の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帶の花を狩り盡した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を觀察しようとして居る。新人の觀たる支那が、如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本篇に依つてのみ見られよう。

支那は世界の謎として最も興味の深い国である。古き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラツセル氏やデユウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越えて来ようとするのも、やがて此の点に心を牽かるるに外ならぬ。吾が社はここに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯花を狩り尽した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の観たる支那が如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本編に依つてのみ見られよう。

本章は芥川の上海体験を記述する「上海游記」（一九二一年八月一七日～九月一二日『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に連載）を取りあげ、初めて中国の土を踏んだ芥川と、中国在住の日本人との触れ合いを糸口にしながら、近代中国における日本人のメンタリティーに触れることで醸成された芥川の、自国日本に対する認識及び芥川自身に対する自己認識を探りたい。同時に、その鏡としての中国に対する芥川の認識を抉り出すことを目指

す。その上で、「上海游記」と初出メディアとしての『大阪毎日新聞』との関わりを明らかにしたい。

第二節　「上海游記」における在中日本人について

（一）　村田

在中日本人について語ると、まず村田のことを取り上げなければならない。村田とは村田孜郎のことで、「烏江」を号とし、芥川龍之介が上海を訪問した際、大阪毎日新聞社の上海支局長として、芥川の世話役をつとめていた人物である。支局長の後、村田は東京日日新聞の東亜課長、読売新聞の東亜部長を歴任し、一九四五年に上海で死去した（注11）。

彼は、『支那劇と梅蘭芳』（玄文社　一九一九年五月）、『解説北支に関する日支関係条約』（学芸社　一九三五年九月）、『支那女人譚』（古今荘書房　一九三七年一一月）など、中国に関する著書を数多く残している。その他、『百千万民衆に訴ふ』（蔣介石著・村田孜郎訳　河出書房　一九三七年六月）、『抗戦の首都重慶』（呉済生著・村田孜郎訳　大東出版社　一九四〇年七月）などの訳書もあることから、村田は中国の伝統文化、芸術、政治など、幅広い分野で中国に精通していた人物と捉えてよいだろう。

「上海游記」においての村田も、まず中国に詳しいといえる人物である。馬車を利用した後、「何文だか銭」をやった馭者の、「不足」そうな顔をして、「何かまくし立ててゐる」様子に対し、村田が「知らん顔」をして「ずんずん玄関へ上つて行く」。「私」と芝居を観た場合、勘定は「何時でも」中国式で奢ってくれる。さらに、「突然地面へころがつて」いる馬を見て、わけが分からない「私」に「あれは背中が掻いんだよ」と「疑念」を晴らしてくれるのである。

この村田は、「私」の世話をしてくれる存在であったのだ。しかし一方では、「私」に違和感を感じさせる存在でもあった。中国の芝居を観た際、「私」は鳴物の「騒々しさ」に対して、「両手に耳を押へない限り、とても坐つてはゐられなかつた。が、わが村田烏江君などになると、この鳴物が穏やかな時は物足りない気持がするさうである」という。しかも、「あの騒々しい所がよかもんなあ」とまで言ってしまうのである。こうした村田に対して「私」は、「一体君は正気かどうか、それさへ怪しいやうな心もちがした」というように、村田とはっきり線引きをしようとしていたのである。

この場面についての先行研究として、和田博文は「日本人が初めて支那劇を観て銅羅の音が喧しく甲高い声が耳障りとなつて半時も座に居堪らぬことがあるのは全く脚本の筋を弁へずその騒々しい処ばかりを見るからである」（村田烏江『支那劇と梅蘭芳』　玄文社　一九一九年五月）という村田の見解を踏まえた上で、「初心者の姿を芥川は見せている」（注12）と指摘している。西山康一は「「私」には「耳を押さえない限り、とても座つてはゐられない中国の芝居に対し、平気で「あの騒々しい所がよかもんなあ」という……自分と同じように身体的拒否反応を示さない彼らに対して、「正気かどうか、それさへ怪しい」と言って」（注13）いる点に着目した上で、そこに「私」に「中国への溶け込めなさ・身体的拒絶感」

があったことを指摘している。以上の指摘にあるように、中国芝居の「騒々しさ」に対する「坐つてはゐられなかつた」「私」の、初心者としての反応を強調することにより、「私」と村田との間の隔たりを技巧的に表現していたと思う。

「私」が役者の「緑牡丹」（稿者注：「白牡丹」の誤り）を訪問した時も同様だろう。「私」が村田に連れられ、楽屋へ緑牡丹を訪ね、「蒜臭い」においに満ちたところから、「薄ぎたない役者たち」のいる「恐るべき埃」に溢れる「通り路」を抜け、やっと緑牡丹に会った時の情景は以下のようであった。

私は彼に、玉堂春（稿者注：「緑牡丹」を主役とする芝居名）は面白かつたと云ふ意味を伝へた。すると彼は意外にも、「アリガト」と云ふ日本語を使つた。さうして――さうして彼が何をしたか。私は彼自身の為にも又わが村田烏江君の為にも、こんな事は公然書きたくない。が、これを書かなければ、折角彼を紹介した所が、むざむざ真を逸してしまふ。それでは読者に対しても、甚済まない次第である。その為に敢然正筆を使ふと、彼は横を向くが早いか、真紅に銀輪の繍をした、美しい袖を翻して、見事に床の上へ手洟をかんだ。

（十　戯台（下）　「上海游記」）

ここでは、「私は彼自身の為にも又わが村田烏江君の為にも、こんな事は公然書きたくない」という一文を吟味する必要がある。「私」は、恐らく「蒜臭い」におい、「恐るべき埃」に満ちた楽屋に反感を持ち始め、ひいては「見事」に「手洟をかんだ」「緑牡丹」でなければ「夜も日も明けない」とする村田を、理解し難いのだろう。だから「わが村田烏江君」という諧謔的な言い方で村田を嘲ったのだろう。

料理屋で中国の芸者と談笑した際、芸者たちは相ついで「私」を含む日本人を前にして中国の伝統曲を披露した。芸者の萍郷が歌った後、「村田君が突然立ち上りながら「八月十五、月光明」と、「西皮調の武家坡の唄をうたひ始め」ることで、皆を感服させる。すると、「私」が「尤もこの位器用でなければ、君程複雑な支那生活の表裏に通暁する事は出来ないかも知れない」と村田の中国の生活ぶりを評している。この指摘の通り、中国人でさえ、必ずしも伝統の「西皮調」に「通暁」しているとは限らない。しかし、村田は中国語のみならず、中国の伝統戯曲にも「通暁」していた。

ここでは、「尤もこの位器用でなければ、君程複雑な支那生活の表裏に通暁する事は出来ないかも知れない」という一文において、一貫した村田を指す「村田君」の代わりに、「君」が使われていることが注目される。この話法によって、「私」という語り手が、談笑シーンの現場に戻って、村田を聴き手とし、直接にコメントを出すような言語環境が、「私」自らの語りによって作られているのである。つまり、「私」がまるで村田に対面したような環境の下で、村田の「複雑な支那生活の表裏に通暁する」ことを認めながら、中国人っぽい彼を話し相手の「君」として、直接に皮肉めいたニュアンスを漏らしているのである。なお、

同様の「君」を用いる表現は、前述した中国の芝居の鳴物に対して、「あの騒々しい所がよかもんなあ」という村田に、「私は君がさう云ふ度に、一体君は正気かどうか、それさへ怪しいやうな心もちがした」というシーンにも表れている。この場面でも同じように、「村田君」を「君」とすることから、村田に対する皮肉を含む表現が付与されている。ちなみに、「君」と村田を指す表現は「上海游記」全篇において、この二か所のみである。

さらに、続くエピソードで次のように語られる。

我我は二三人の芸者と一しよに、西瓜の種を撮んだり、御先煙草をふかしたりしながら、少時の間無駄話をした。尤も無駄話をしたと云つても、私は唖に変りはない。波多君が私を指さしながら、悪戯さうな子供の芸者に、「あれは東洋人（稿者注：近代中国語で日本は東洋で、東洋人は日本人を指す）ぢやないぜ。広東人だぜ」とか何とか云ふ。芸者が村田君に、本当かと云ふ。村田君も「さうだ。さうだ」と云ふ。

（十七　南国の美人（下）「上海游記」）

ここでは、波多が「私」を「あれは東洋人ぢやないぜ。広東人だぜ」と言い、それを聞いた「芸者」が村田君に確認する場面が注目される。中国人の「芸者」が、日本人客の話の真偽を確認するには、常識としては同じ中国人同士の客に聞くのが自然だろう。この席にも中国人の常連客、案内役としての「余氏」（稿者注：余洵のこと）がいる。

ところが、「余氏」に聞くことなく、村田に聞くのは、恐らく中国人「芸者」の直感として、村田に対して身体的な違和感や拒絶感がなく、むしろ村田に親近感を持ったために、確認した可能性がある。つまり、ここでは「私」の視線だけでなく、「芸者」という〈第三者〉の視線が、いわば村田を中国人的な存在と見なすものとして提示されているのではないだろうか。

したがって、単なる中国に詳しい人物を超えた、中国に溶け込んだ村田の人物像が前述した一連のエピソードによって立体化し、浮き彫りになっているのである。この中国的な村田は日本人の「私」にとって、ある種の〈他者〉（注14）なのではないかと考えられる。

（二）小島

上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行つた時、氏の社宅の前の庭に、小さな桜が植わつてゐた。すると同行の四十起氏（稿者注：島津四十起のこと）が、「御覧なさい。桜が咲いてゐます。」と云つた。その又言ひ方には不思議な程、嬉しさうな調子がこもつてゐた。玄関に出てゐた小島氏も、もし大袈裟に形容すれば、亜米利加帰りのコロムブスが、土産でも見せるやうな顔色だつた。その癖桜は痩せ枯れた枝に、乏しい花しかつけてゐなかつた。私はこの時両先生が、何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。しかし上海に一月程ゐると、これは両氏ばかりぢやない、誰で

もさうだと云ふ事を知つた。日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、櫻の花さへ見る事が出来れば、忽幸福になる人種である。

（十九　日本人　「上海游記」）

上海紡績は前身が綿花商店興泰号（稿者注：一九〇二年四月から興泰紗廠の名で経営）で、後に、三井物産等の出資によって買収されたことをきっかけに、日本在華紡の中国の資本輸出の嚆矢となっている（注15）。上海紡績を含む在華紡は中国で巨額の利益を獲得したのと同時に、「深夜業労働」（長時間・低賃銀）（注16）などの管理方式を用いた。一九一八年から一九二二年にかけて、在華紡の労働者による大規模なストライキが一七件も発生し、中国全土の紡績工場のストライキの半分以上を占めている（注17）。そして、一九二三年の旅大回収運動（後述で詳しく触れる）において、在華紡製品は日貨排斥の主な対象とされる。一九二五年の五・三〇事件（五月三〇日に上海に起こった反帝国主義運動。中国で五卅惨案という。第四章で詳述）も上海在華紡のストライキが発端となった。一九二〇年代の在華紡の中国進出について、「純然たる民間資本の進出であるとともに過剰資本輸出という独占段階に本来的な性格を持っており、その意味で、先行する帝国主義的進出にいわばその本来的な裏付けを与えることになった」（注18）とする研究が一般的である。

芥川は「在華紡の創設ラッシュ期」（注19）の一九二一年に上海を訪れた。こういった情勢が不安定な時期に上海の土に踏み入れた「私」は、日貨排斥運動や反日デモの雰囲気を肌で感じたはずである。

小島という人物について、「江南游記」は「小島梶郎」として名前を明かすものの、「小島氏から、高洲氏（稿者注：揚州在住の日本人、塩務官を努める高洲太吉のこと）へ紹介状を貰つて来た」（注20）という記述に留まっている。彼を特定する先行研究は現段階で見られないが、稿者は彼を「上海紡績」の責任者の一人と想定する。

テクストにおいて、日本資本の中国進出を代表する上海紡績の社宅の庭園に、日本を喚起する表象記号の「桜」が「植わつてゐ」た。「四十起氏」に「桜が咲いてゐます」と言われると、「乏しい花しかつけてゐなかつた」にもかかわらず、「小島氏」は「亜米利加帰りのコロムブスが、土産でも見せるやうな顔色」を見せた。周知のように、コロムブスの航海により、アメリカ新大陸の存在が西欧社会に広く知られることによって、その後の欧州のアメリカ新大陸への植民地政策にも影響している。このエピソードは、「亜米利加帰りのコロムブス」を、アメリカ新大陸を「土産」として欧州列強に齎した先駆者的な存在と見なし、彼を借りて、上海紡績の中国進出の隠喩としているかどうかは判然としない。が、「上海紡績」の小島は、日本資本の中国進出の実践者と見なしても問題ないだろう。このように、日本資本による中国進出の担い手として小島の人物像が提供されると共に、日本資本の中国進出の一斑もさりげなく点描されている。

「私」は「桜」を見た小島と「四十起氏」のことを、皮肉めいた言い方で「両先生」と

呼び、「私はこの時両先生が、何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた」と、両氏の反応を「大袈裟」と揶揄しているのであろう。なお、ここでは「日本人はどう云ふ人種か」という新たな問題が「私」によって提起される。

(三)　「私」

同文書院を見に行つた時、寄宿舎の二階を歩いてゐると、廊下のつき当りの窓の外に、青い穂麦の海が見えた。その穂麦の処処に、平凡な菜の花の群つたのが見えた。最後にそれ等のずつと向うに、低い屋根が続いた上に、大きな鯉幟のあるのが見えた。鯉は風に吹かれながら、鮮かに空へ翻つてゐた。この一本の鯉幟は、忽風景を変化させた。私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだと云ふ気になつた。しかしその窓の側へ行つたら、すぐ目の下の麦畑に、支那の百姓が働いてゐた。それが何だか私には、怪しからんやうな気を起させた。私も遠い上海の空に、日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だつたのである。桜の事なぞは笑へないかも知れない。

（十九　日本人　「上海游記」）

同文書院は、いうまでもなく東亜同文書院のことであるが、その経営母体の東亜同文会は一八九八年一一月、東亜会と同文会とが合併したもので、初代会長は近衛篤麿である（注21）。東亜同文会は、その綱領として「支那を保全す」、「支那及び朝鮮の改善を助成す」、「支那及び朝鮮の時事を討究し実行を期す」、「国論を喚起す」（注22）を掲げている。この時期は日本近代史において、「日本は欧米との協調という明治初年以来の方針から離れて、門戸開放を否定し、日満支提携へ、さらに東亜新秩序へ、そして大東亜共栄圏へと進んでいく」（注23）という流れの中で、「日満支提携」へと進んでいこうとする段階に属すべきものと思われる。

東亜同文書院は一九〇〇年五月に南京において、「南京同文書院」という名で開設される。「同年八月、義和団事件の影響を受けて上海に移転し、翌一九〇一年八月に東亜同文書院として、本格的に出発した。以降日本敗戦（一九四五年）までの四十余年間、四千数百名の青年がこの学校で学んだ」（注24）。「同文書院の使命は「支那保全論」「日中の共存共栄」の立場から学生を教育し、政治・経済等の面における実務的中国エキスパートを養成することにあった。しかし、日露戦争後、日本のアジア政策が帝国主義的傾向を強め始めるのにしたがい、同文書院出身者はしばしば日本の国策の手先のように見られるようになった」（注25）。一九三〇年代に勃発した日中戦争に至って、「書院は従軍翻訳、学徒出陣という形」（注26）で日本軍に直接に協力した。同文書院については、「日本帝国主義の尖兵」、「中国侵略に加担した」、「中国侵略のための文化機関」（注27）や「日本の中国侵略の幇助役」（注28）、「書院の歴史は日本の中国侵略歴史に属すべき」（注29）という評価で捉える研究が多い。

一九二一年に芥川が訪問した「同文書院」は、上海に移設した東亜同文書院であろう。そして、一九二一年は中国のナショナリズムに基づく反日運動の勃発期といえる。周知のように一九一九年、パリ講和会議で、日本の対華二十一か条要求が承認されたことに端を発した反日運動である「五・四運動」が中国で起こっている。さらに一九二三年には、中華民国政府は国民の反日感情を配慮し、租借期限を迎えた旅順、大連をロシアから、租借しようとする日本の要求を無視し、旅大回収の通告を発したが、日本政府はそれを拒否している。それを機に、単なる日貨排斥のみではなく、日本と一切の経済的、社会的関係を断絶するという大規模な反日運動、所謂「旅大回収運動」が発生し、対日攻勢が先鋭化している。

こうした背景の下に、日本政府としては「これまでのように露骨な利権獲得的対華政策がとりにくくなり、むしろこれにかえて教育文化面からのアプローチによって日中両国民相互間の感情融和、あるいは相互理解を着実に図っていくほうが、今後の日本の中国進出にとって得策だとする認識」（注30）が生じてきた。言うまでもなく、東亜同文書院はこういった歴史的使命を負う立場にあったはずだと思われる。

反日運動の勃発期の一九二一年に、中国を訪問した芥川は、彼なりの筆致で、その反日運動や日貨排斥を匂わせる記述を随所に記しているのである。

「上海游記」に示される通り、こういった日中近代史を背景として、中国に進出した同文書院を訪れる日本人の「私」には、麦畑の処処にある中国の「菜の花」が「平凡」に見えた。が、向こうの屋根の上に一本しかない「日本の鯉幟」を見ると、「忽風景を変化させた」とあるように態度を一変させている。そして、「遠い上海の空に、日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だったのである」と受け止めている。これに対して、麦畑で「働いてゐた支那の百姓」に眼を投じると、「怪しからんやうな気を起させた」のである。

「菜の花」は、南北を問わず、中国全土にわたって、幅広く植わっている普遍的な存在で、「支那の百姓」とともに、いうまでもなく「私」にとっては中国の象徴記号としての〈他者〉にほかならない。それらを「平凡」や「怪しからんやうな気を起させた」ものと捉えている。一方で、「鯉幟」を眺めることは「愉快」だと語られている。それは「私」にとって〈仲間〉であるといえるだろう。ここでは、日本人の「私」が、中国で、中国を代表する「菜の花」という〈他者〉と、日本を喚起させる「鯉幟」という〈仲間〉を対照的に捉えている。そして両者は「私」の中で協調されることができず、衝突していたと読み取れるだろう。このように、「中国」＝〈他者〉、「日本」＝〈仲間〉という対立的な構図が現れている。

ちなみに、東亜同文書院については、「二十　徐家匯」でも触れている。その章では、中国における天主教の受容史を戯曲の形で、三つのエピソードから描かれている。まとめると、天主教の中国進出は「明の万暦年間」、「徐公」（稿者注：徐定公のこと。本名は徐光啓、明朝の高官。宣教師マテオ＝リッチから洗礼をうけ、畢生天主教の中国の発展に尽力）によって、著しく発展した。が、「清の雍正年間」に至って、禁教とされる。そして、「中華民国十年」になると、荒廃した徐光啓の墓の前に、「日本人五人」、「その一人は同文書院の

学生」の姿が現れ、記念写真を撮影した―と示された通り、中国への文化進出を巡って、西洋の当初の圧倒的優位が失われ、日本が台頭してきたことを暗示するほか、西洋と日本の競争関係もここに窺わせる。この西洋と日本の関係図式は、芥川の中国訪問の三年前の一九一八年七月に、東亜同文会が日本外務省に提出した「事業再拡張補助申請書」（注31）にも反映されている。

支那内地ノ各重要地ニ学校ヲ興シ支那人子弟ヲ教育スルハ今日ノ急務ニシテ本会カ今後大ニ力ヲ注カント欲スル処タリ現在欧米各国カ支那内地ニ開設セル学校数ハ驚クヘキ多数ニ上リ就中米国ノ如キ其最タルモノニシテ基督教会ノ手ヲ経テ設立セル専門学校及大学十五、中学校及女学校百三十八、師範学校五十六、小学校二千九百九校ニ上リ学生ノ総数十万ヲ超ユルニ至レリ然ルニ支那ノ開発ヲ以テ自任セル我日本ノ設立セルモノハ満州ヲ除キ支那本部ニ於テハ殆ント一ノ見ルヘキモノナシ依テ本会ハ北京、漢口、広東、成都、南京、長沙ノ六個所ニ此種ノ学校ヲ開キ以テ支那ノ文化に貢献シ併セテ日本留学の予備タラシメント欲スルナリ（後略）

ここにみられるように、中国の文化進出を巡る、日本が西洋をライバルとし、争おうとする姿勢とその当時の情勢は、「二十　徐家匯」において戯曲形式で見事に演出されている。日本が台頭するにつれて日本の文化機関「同文書院」の「学生」が、中国の舞台に現れ、荒廃した奉教閣老徐光啓の墓前に存在感を見せる。だから、日本人一行は、天主教の「十字架の前に立」ち、写真撮影を求められると、当然「不自然なる数秒の沈黙」を余儀なくされているのだろう。

「二十　徐家匯」の創作目的について、王書瑋は大阪毎日新聞社の芥川の中国旅行の予告記事を踏まえ、「新様と新意」の「若き支那の面目」、いわば「近代的な中国を見て来てほしいという旨」を、芥川の中国訪問目的と捉えた上で、「キリスト教を近代の印の一つとして、既に日本で経験済みの芥川は、中国におけるキリスト教受容の問題に興味を感じ、「若き支那の面目」の一つとして描いたと推測できる」（注32）と述べている。そして、王氏は「二十　徐家匯」を中国のキリスト教の受容史の流れに置き、「二十　徐家匯」における三つの時代のエピソードが、その受容史に照らし合わせ、合致するかどうかについて考察している。さらに、最後のエピソードについて、「この節には民国（稿者注：中華民国のこと）のキリスト教状況についての言及がほとんどない。荒廃している徐光啓の墓地と、日本人の見学者という描写、それから、十字架の前で写真を撮る行為などが羅列されているだけである。これらの描写は、当時の上海におけるキリスト教の状況を推測しにくい」（注33）と述べ、「芥川の本節についての描写の不明確さも理解しやすいように思われる」（注34）と結論している。が、稿者は「二十　徐家匯」の意味は、前述したように、戯曲形式で、上海での天主教伝道の歴史的変遷を点描するのみならず、中国進出を巡る欧米、日本の競争関係と近代中国の複雑な社会背景を提示する意味もあったと考える。

テクストに戻ると、初めて中国旅行を実現した「私」は、中国という異境で、〈他者〉と〈仲間〉を見出し、そして、中国に溶け込む〈他者性〉への皮肉と日本への求心力（＝いわゆる日本人としての愛国心）を有する〈仲間性〉への評価によって、「私」の日本人としてのアイデンティティが構築されたといえるだろう。

前述した「上海紡績」の小島と島津を「両先生」と嘲って、線引きしようとした「私」自身が、結局小島と同じ人間だということに、「私」は思い至った。それ故、「桜の事なぞは笑へないかも知れない」という内省的な言葉で、「私」の、日本人としてのアイデンティティが構築された以上、「私」の日本への求心力（＝いわゆる日本人としての愛国心）が働くことになると提示している。

（四）　或奥さん

上海の日本婦人倶楽部に、招待を受けた事がある。場所は確か佛蘭西租界の、松本夫人の邸宅だつた。白い布をかけた円卓子。その上のシネラリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウイツチと。卓子を囲んだ奥さん達は、私が予想してゐたよりも、皆温良貞淑さうだつた。私はさう云ふ奥さん達と、小説や戯曲の話をした。すると或奥さんが、かう私に話しかけた。

「今月中央公論に御出しになつた「鴉」と云ふ小説は、大へん面白うございました。」

「いえ、あれは悪作です。」

私は謙遜な返事をしながら、「鴉」の作者宇野浩二に、この問答を聞かせてやりたいと思つた。

（十九　日本人　「上海游記」）

まず租界について、「租界は不平等条約の産物であり、近代以来外国列強と帝国主義の中国侵略、略奪、植民統治の基地である。租界は中国政府の行政管轄から完全に独立され、税収、刑務、市政の権利を持ち、「国中の国」の存在」（注35）とあるように、租界は中国の植民地としての象徴といっても過言ではないだろう。

「上海」、「佛蘭西租界」、「日本婦人倶楽部」という意味深な組み合わせで、いわゆる上海の〈国際都市〉のイメージが描かれるのと同時に、そこに進出した欧米、日本という列強の支配的な姿勢と、進出された中国の被支配的な姿との対照的な位置づけも明らかになる。続いて、邸宅の「圓卓子」の上に「シネラリアの鉢」、「紅茶」、「菓子」、「サンドウイツチ」が揃っている場面について、検討していく。

シネラリア（注36）とサンドイッチ（注37）は西洋起源のものとして知られている。紅茶は西洋列強の力により、世界に広まって、「世界的飲料」（注38）となったのである。菓子について、「明治以降は西洋から、チョコレート、ビスケット、シュークリーム、ケーキなど多くの菓子が入ってくるようになり、「西洋菓子」と呼ばれたが、日本独自の製法も発

達し、やがて、「洋菓子」というようになる。それに対して「和菓子」という言葉も生まれた」（注39）とあるように、西洋の世界進出にかかわったものとして提示されている。

こうして、上海にもわたっていた「シネラリア」、「紅茶」、「菓子」、「サンドウイツチ」は、西洋を想起するものとして、「上海游記」に登場する。それらの載せてある「卓子を囲んだ奥さん達」は一層西洋的に見える。「私」がその西洋的な物質に囲まれた奥さん達と「小説や戯曲の話」をすると、或奥さんは、「今月中央公論に御出しになつた「鴉」と云ふ小説は、大へん面白うございました」と褒めるのであった。

ところが、「鴉」という小説は、芥川の作品ではなく、作家宇野浩二の小説なのである。或奥さんが誤ったのは、一九二一年四月一日発行の『中央公論』に掲載された宇野浩二の「鴉」と、その後ろに置かれた芥川の「奇遇」とを勘違いしたためであろう。このエピソードに関して、芥川の実在の経験談に基づき作られて、「芥川は各種の団体から講演を依頼されながらも、自分の作品を間違われた失望を漏らしていた」（注40）とする研究がある。稿者は「シネラリア」、「紅茶」、「菓子」、「サンドウイツチ」に表される西洋の物質文明に耽る或奥さんは、日本の事情への曖昧さが示されている人物として読み取れるとも思う。したがって、西洋かぶれの彼女の、日本人らしさの薄まった姿も感じさせる。それ故「私」は、「あれは悪作です」とわざといって、作者を間違えている或奥さんに対して、皮肉な態度をとっているのであろう。

（五）竹内

南陽丸の船長竹内氏の話に、漢口のバンドを歩いてゐたら、篠懸の並木の下のベンチに、英吉利だか亜米利加だかの船乗が、日本の女と坐つてゐた。その女は一と目見ても、職業がすぐにわかるものだつた。竹内氏はそれを見た時に、不快な気もちがしたさうである。私はその話を聞いた後、北四川路を歩いてゐると、向うへ来かかつた自動車の中に、三人か四人の日本の芸者が、一人の西洋人を擁しながら、頻にはしやいでゐるのを見た。が、別段竹内氏のやうに、不快な気もちにはならなかつた。が、不快な気もちになるのも、まんざら理解に苦しむ訣ぢやない。いや、寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである。この場合は不快な気持だけだが、もしこれを大にすれば、愛国的義憤に違ひないぢやないか？

（十九　日本人　「上海游記」）

竹内が憤慨した「日本の女」は芸者と推測できる。その「日本の女」は、恐らく「私」が見た「日本の芸者」と同じように、中国で西洋人と「はしやいでゐ」たのだろう。この挿絵的な風景は、「日本の女」（「日本の芸者」）と西洋人の戯れ合いを表す他、「三人か四人の日本の芸者」が従属的立場から「一人の西洋人」に迎合していたことも示唆している。これはまさしく、中国進出を果たした日本と欧米列強の相互関係の隠喩であろう。いわば

中国進出をめぐって、日本と欧米列強は、協力関係を維持するための親密なパートナシップを演出している。とはいうものの、第一次世界大戦終結後、「日本は大国クラブの末席に座るようになったが、それは所詮末席であ」(注41)ったといわれるように、欧米列強と対等の政治的発言力は持っていなかったことを暗示しているのであろう。

だから、竹内が漢口でその「日本の女」と欧米人の「船乗」がベンチに座るのを見ると、「不快な気もちがした」と反発を示している。その後「私」が、「三人か四人の「日本の芸者」が、一人の西洋人を擁しながら、頻にはしやいでゐるの」を目撃したが、「別段竹内氏のやうに、不快な気もちにはならなかつた」とした一方で、「不快な気もちになるのも、まんざら理解に苦しむ訣ぢやない」と、竹内氏に対して、やや同情を示し、「理解」する態度を見せている。「私」はここで竹内を〈仲間〉と認めた上で、西洋への反発を示した彼に同情と理解を示したのである。西洋人は勿論「私」にとって〈他者〉としての存在といえるだろう。このように、竹内を〈仲間〉と認め、彼を理解することと、西洋人を〈他者〉と捉え、距離を置くことによって、「私」の日本人としてのアイデンティティが構築されているのである。

ところで、ここで「私」が「いや、寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである」と、新たなことに気が付く。そして、「この場合は不快な気持だけだが、もしこれを大にすれば、愛国的義憤に違ひないぢやないか?」といった竹内に同情する「私」の言葉は、日本人としての「身体的な自動作用」(注42)、いわば無自覚なまま日本に偏る日本人としての本能が働いていることを示していると言えよう。

「私」は、自分自身の日本人としてのアイデンティティを確認し、「不快な気持ち」が大になれば「愛国的義憤」にまで及ぶのではないかという懸念を示す。この懸念が、「私」の中国旅行後の一九三〇年代に端を発した日中戦争に多くの日本人が巻き込まれることに繋がっているかどうかは判断できない。だが、言い切れるのは、そういった懸念を持った「私」は、中国を愛する立場に立ったというより、むしろ日本人を憂慮する日本人の立場に立ったということである。

(六) X

何でもXと云ふ日本人があつた。Xは上海に二十年住んでゐた。結婚したのも上海である。子が出来たのも上海である。金がたまつたのも上海である。その為かXは上海に熱烈な愛着を持つてゐた。たまに日本から客が来ると、何時も上海の自慢話をした。建築、道路、料理、娯楽、――いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪してゐるより、一日も早く上海に来給へ。――さう客を促しさへした。そのXが死んだ時、遺言状を出して見ると、意外な事が書いてあつた。

――「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」

私は或日ホテルの窓に、火のついたハヴアナを啣へながら、こんな話を想像した。

Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである。

（十九　日本人　「上海游記」）

ここで注目したいのは、上海に二十年在住し、「上海に熱烈な愛着を持つてゐた」「Xと云ふ日本人」の自慢話、つまり「建築、道路、料理、娯楽、――いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である」という話である。

ところが、建築にせよ、道路にせよ、料理にせよ、娯楽にせよ、いずれも一時的に物欲を満足させるものとなるかもしれないが、メンタリティーの面においては、決して人間の心を癒し、慰めるものではない。このような物質的な上海はいくら西洋と「同然」であり、日本人にとっては、「二十年住」むことができるとしても、決して精神的な源泉（故郷）ではない。だから、Xという日本人は「上海に熱烈な愛着」を一生抱いていたにもかかわらず、世を去る前に、結局「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」という本音を残さなければならなかったのだろう。これに対し、「Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである」というふうに、「私」もXと同じく、結局帰巣本能を持つ日本人であることが提示される。

ここで、「上海も西洋と同然である」というXのセリフに着目したい。そのセリフを理由にXは日本人の「客」を上海へ「促し」たのである。いわば、Xは上海＝西洋という構図を作り、上海という「西洋」にいる自己の充実感を果たしたことを日本人の「客」にアピールするのであるが、結局それは、「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」というXの最後の言葉で、いやおうなしに否定される。つまり、Xは結局自己＝日本、自己≠西洋（上海）というアイデンティティを見せたのである。「私」は、「Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである」と述べて、自分自身が結局のところ、Xと同じ人間だと認識を示しているのである。

まとめると、「私」は、いわゆる愛国的な南陽丸の船長「竹内」と帰巣本能を持つ在中日本人Xに共感して、自ら彼らを〈仲間〉とした。それに対して、西洋かぶれの「或奥さん」、「日本の芸者」を擁した「西洋人」、と「西洋（上海）」を〈他者〉と捉えている。そして、日本に属する〈仲間〉を評価することと、西洋に属する〈他者〉と距離を置くこととによって、「私」の日本人としてのアイデンティティが構築されていったといえるだろう。

（七）他の在中日本人二、三人

「上海游記」には前述した日本人の他、長野草風や石黒政吉のような人の名も取り上げられているが、主要人物とされていないため、詳しく論じることは控える。ここで補足として、島津四十起と上海の「どこかのカッフェ」の「日本の給仕女」を取り上げる。島津四十起は村田のような中国的な一面がある。「八　城内（下）」で、「私」は島津と「大きな茶館を通り抜けた」時、「天井の梁」に、「ぶら下つてゐる」「一面」の「鳥籠」から、「あ

りとあらゆる小鳥の声が、目に見えない驟雨か何かのやうに、一度に私の耳を襲つた」ことで、「私は殆逃げるやうに、四十起氏を促し立てながら、この金切声に充満した、恐るべき茶館を飛び出した」のである。それに対して、島津は「少し待つて下さい。鳥を一つ買つて来ますから」と「私」を困らせるのであった。—とあるように、村田と同様に、「私」を困惑させる人物である。しかし、島津は到底村田と違う。先述した「上海紡績」の小島の社宅で、島津は開花した桜を見て、「乏しい」にもかかわらず、小島と「大喜び」の顔色を見せたことから、結局島津は「日本人」という「人種」として語られる。島津は中国的な〈他者〉と誤解されるようであるが、実は日本への思いやりのある〈仲間〉としての存在と確認できる。もう一人、「三　第一瞥（中）」の、日本に「帰りたいわ」と抑えきれない「日本の給仕女」に至っては、先述した帰巣への憧れを持つ在中日本人Xの範疇に属する人物と見なすべきと思われる。

第三節　「私」のアイデンティティの構築

「私」と在中日本人との触れ合いをより適切に理解するために、「鏡に映った自我」（注43）という社会学の説に触れたい。

> 人は自分の顔を自分で見ることができない。自分の顔を知るためには、鏡を見る必要があり、鏡を見れば自分の顔が「美しい」のか、「若々しい」のか、「チャーミング」なのかを知ることができる。それと同様に人間の自我も自分ではわからず、他者を通じて知ることができる。
>
> （前略）人間は他の人間の鏡として、鏡としての他者を通じてはじめて自分を知ることになる。すなわち、人間の自我は「鏡に映った自我」として現れる。他者を通じて自分の認識が可能とされる。

こうした考え方を今まで見てきた「上海游記」の「私」に当てはめてみるならば、初めて中国旅行を現実のものにした日本人の「私」は、中国という異境で、異国在住の日本人と触れ合うチャンスを迎えた。彼らも「私」にとって鏡のような〈他者〉となり、彼らの〈他者性〉を通じて、自分が何者か知るようになる。

「私」の対中国の認識においては、中国的な村田を〈他者〉、日本資本の中国進出の実践者としての小島を〈仲間〉と見なしている。そして、前者への皮肉と後者への共感によって、「私」の日本人としてのアイデンティティが構築される。

一方、「私」の対西洋の認識においては、西洋的な或奥さんを〈他者〉と見なし、西洋への反発を見せた、いわゆる愛国的な竹内と帰巣本能を持つXを〈仲間〉と見なしている。そして、前者と距離を置くことと、後者を認めることによって、「私」の日本人としてのアイデンティティが構築される。

「私」の日本人としてのアイデンティティは上述したように、対中国の認識と対西洋の

認識から形成され、構築される。そしてこれは、繰り返し喚起されるのである。

第四節　「上海游記」に見られる「私」の〈中国〉表象

「上海游記」において、中国旅行を実現した「私」は日本人として、異境である中国を舞台に、在中日本人と触れ合った。彼らに対して、「私」は違和感を覚えた。その一方で、私が共感し、認める人もいた。こうした異境で、「海外に出」た日本人とぶつかったことを契機に、「私」は、（今まで考えたことのない、考えようともしなかった問題、つまり）「日本人はどう云ふ人種か」という問題を考えることになったのである。この問いは、とりもなおさず、「私」自身が何者かということも提起する。この意味でいうと、上海の旅は「私」にとって、自己に迷い、そして自己を探し、さらに自己を発見する旅と位置付けることができるだろう。このように考えることで、「上海游記」は、描写対象が中国でありながら、日本へのまなざしを持つテクストといえる。

日本人としてのアイデンティティが構築されたことによって、「私」の、中国を進出した日本への求心力が働くことが確認できる。こういった中国進出を果たした日本への求心力と、日本人が帰巣すべきという考えとが、両方「私」に存在し、交錯しながら、「私」を悩ませているといえるであろう。

「私」が日本の中国進出に対する懸念を持っていたとしても、それは、日本人としてのアイデンティティによるもので、中国を愛する立場に立ち、日本への批判（反日本帝国主義・反植民地政策）によるものとしては読み取れない。

したがって、芥川は中国を愛する立場にあり、日本を批判（反日本帝国主義・反植民地政策）していたという序章に示された先行研究における見解は、稿者には首肯しがたく感じられるのである。次は、「上海游記」と初出メディア『大阪毎日新聞』との関わりについて確認しよう。

第五節　「上海游記」に見られる〈中国〉表象と『大阪毎日新聞』

（一）『大阪毎日新聞』の性格について

『大阪毎日新聞』の前身は、一八七六年二月二〇日に創刊された『大阪日報』である。『大阪日報』は、明治初頭における大阪の大新聞であったが、新聞社各社の競争によって社内の混乱を重ねた結果、日本立憲政党に買収され、一八八二年一月、休刊を余儀なくされた。一八八二年二月一日には、改名して、『日本立憲政党新聞』という政党新聞になるが、その後、財政難に直面し、再び休刊を繰り返すことになる。一八八五年には再び『大阪日報』として『浪華新聞』と合併し、隔日発行となる。一八八七年に兼松房治郎等に買収されたことをきっかけに、一八八八年一一月二〇日、『大阪毎日新聞』と改名される。これによって、政治的な紙面作りから実業的なそれへと変更された。

こののち、日清戦争に際し、『大阪毎日新聞』は速報性によって評価を上げ、経営状況も大きく改善した。一八九七年に社長に就任した本山彦一の経営の下、発行部数を伸ばし、

大きな飛躍を遂げる。一九〇四年の日露戦争に際しては、速報性は他社を圧倒し、更に躍進する。一九〇六年一二月には、東京で『毎日電報』を創刊し、東西呼応して勢力を拡大する。さらに一九〇九年二月には、東京日日新聞日報社を買収し、毎日電報社と合併して、『東京日日新聞』を発行した。

さらに大阪毎日新聞社は、一九一五年一〇月一〇日から夕刊を発行することとなり、一九一九年三月には合資組織から株式会社へと発展し、社員洋行の規程を定め、留学生を募集して英才を海外に派遣し、国際的な通信網の建設に力を入れることによって、多大な成功を遂げた（注44）。

こうして一九二〇年代に至ると、大阪毎日新聞社は「世界屈指の大新聞社」となり、「日本に来遊する人の総ては必ず一度はこの社を訪問する、そして何れもその規模の広大にして設備の完成せるを見て驚嘆するのである」（注45）と言われるまでになった。

（二）『大阪毎日新聞』の対中国の報道スタンス

「上海游記」が『大阪毎日新聞』に連載された一九二〇年代における、『大阪毎日新聞』の対中国報道のスタンスについて、篠崎美生子は「上海游記」が連載された一九二一年は、「二十一ヵ条の要求から六年目、五・四運動から二年目にあたる年で、当時の日華関係は極めて悪かった」としながら、『大毎』は「支那」を恫喝しつつ読者の危機感を煽る記事を掲載し続けたメディア」という認識を示した上で、「上海游記」連載前後の『大阪毎日新聞』もまた、「日本」の利益を偏重し、「支那」を侮る言葉に満ちた空間であった」（注46）と捉えている。さらに、篠崎は『大阪毎日新聞』の対中国の報道姿勢について次（注47）のように認識を示す。

> その姿勢は、例えば、ベルサイユ講和会議で山東問題が論議されたプロセスを報ずる記事にも見て取れる。一九一九年五月四日夕刊の記事によれば、当初ウイルソン米大統領が、日本軍の山東占領を「支那の主権を侵害するものなりと極論」、「理想論に固執」したものの、日本代表との論戦、ロイド・ジョージ英首相の仲裁を経て「大体は日本の主張通り」「試験の採点なら九十八点は確実といふ近来の出来栄」になったとのこと、記事からは権力監視の意識は全く見られない。また二日後の五月六日には、この講和会議をきっかけに北京で五・四運動が起ったことが報じられているが、その記事も「智識階級の暴挙だからむやみなことはやるまい」と、扱いが小さい。さらに、「山東問題が種々の誤解を絡んだ」「学力の進んだものは山東問題を能く理解してゐる」など、日本政府にとって都合のよいコメントが並び、事件の重大性から目を背けようとする紙面構成に貢献している。
>
> （中略）
>
> 「上海游記」連載期間中の『大毎』が連日「支那」関連のニュースを大きく取り上げていることも興味深い。「上海游記」第一回（一　海上）が掲載された八月一七日朝

刊第一面には、この年の開催予定のワシントン会議において、再び山東問題が取り上げられ、アメリカが「支那を国際管理に付せんとするが如き提議を」するかもしれないとの憶測が飛び交っている様子が報じられている。また、八月一九日朝刊には、ワシントン会議に陸軍代表として出席する田中国重中将のコメントが掲載されている。

帝国は支那の独立を確保し隣邦相援くるが両国の為利益であるから成るべく英国とも謀り支那を援くる方針であるが支那側がヴェルサイユ会議に於ける如き態度を採るならば之に対応する方策を採る事になつたとの事である

「支那」の主権の尊重を表向きとしながら、武力を背景に恫喝してはばからない軍の態度は、『大毎』自身の方針でもある。八月二四日朝刊第一面には、中国の全国学生総会が「華盛頓会議に支那から提出すべき問題案を討議」し、二十一箇条の廃棄や山東半島からの日本軍撤退ほか全九項目をまとめたほか、学生たち自身の「日貨排斥」を決議したことが報じられているが、その見出しには、「何処まで虫がよいのか　底の知れぬ支那学生総会　例に依つて日貨排斥も決議」とある。

『大毎』はこうして、読者の「支那人」に対する敵意を煽るとともに、日本が優先的に領有してしかるべき「支那」という場に他国が進出していることを報じて危機感を煽ろうともする。八月二三日朝刊では、「生糸市場の不振と海外への売行不良」を報じる一方で、アメリカが「上海へ生糸輸出検査所を置いて日本生糸を抑へつけ様としてゐる」と語っている。「支那」を欲望の対象としてのみ語る言説が、『大毎』を支配しているのだ。

こうして篠崎は、さらに『大阪毎日新聞』と「上海游記」との関係について、次（注48）のように捉える。

そして「上海游記」は、（中略）これら『大毎』の記事と関連し合い、むしろその一部として存在するものなのである。八月二二日朝刊、「上海游記」の「六　城内（上）」には、湖心亭に望む池水に小便をする辮髪の男について、このような記述がある。

陳樹藩が反旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英続盟が持ち上がらうが、そんな事は全然この男には、問題にならないに相違ない。

北京政府（安徽派）の軍人であった陳樹藩が陝西督軍（将軍）を免ぜられたのは一九二一年五月二五日のこと、新督軍の閻相文と武力対決の後敗走したのが同年六月から七月初旬、芥川が既に上海を離れたあとの出来事である。（中略）白話詩の流行の詳しい状況については調査が及ばなかったが、日英同盟の存続はワシントン会議の懸案

事項であり、「今更日本を見捨てるやうな不徳は出来ぬと日英同盟継続を説く英国首相」（八月二〇日夕刊）の見出しにもあるように、「上海游記」連載時の関心事であった。つまり「上海游記」というテクストは、決して一九二一年の芥川の上海体験を再現するものではなく、八～九月の紙面と連動する性格を持っているのだ。

篠崎が指摘する通り、「上海游記」における、『大阪毎日新聞』の「紙面と連動する性格」を看過してはならないだろう。前述したように、「上海游記」において、中国旅行を実現した「私」は異境である中国を舞台に、在中日本人と触れ合うことによって、日本人としてのアイデンティティを構築した。したがって、日本人を優先し、日本の国益を重んずる「私」の〈中国〉表象が確認できた。こういった〈中国〉表象は、上述の篠崎の述べた、「「日本」の利益を偏重」する『大阪毎日新聞』の対中国のスタンスを反映したものと考えられる。もっとも、篠崎が指摘した「「支那」を恫喝しつつ読者の危機感を煽る」という『大阪毎日新聞』の対中国報道のスタンスは、本章が考察した「上海游記」からは確認できなかったようである。

注

1 関口安義『特派員　芥川龍之介――中国でなにを視たのか――』（毎日新聞社　一九九七年二月）六八頁。

2 西山康一〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」（『時代の中の異文化交流』岡山大学文学部二〇一一年三月）一一頁。

3 前掲注1同書　六〇頁。

4 前掲注2同書　一一頁。

5 前掲注1同書　六六頁。

6 鷺只雄編著『年表作家読本　芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月）一〇七頁。

7 前掲注1同書　六九頁。

8 前掲注1同書　六九頁。

9 上述は前掲注1同書（八二～一一二頁）からの参照。

10 「支那印象記　新人の眼に映じた新しき支那　近日紙上より掲載の筈」（『大阪毎日新聞』一九二一年三月三一日）。

11 『日本人名大辞典』（講談社　二〇〇一年一二月）　一八八七頁。

12 和田博文「芥川の上海体験」（『国文学　解釈と教材の研究・特集芥川龍之介―モダン=現代とは何か』（四六（一一））　二〇〇一年九月）　一一五頁。

13 前掲注2同書（一二二頁）からの参照。西山氏は講演で、「私」（稿者注：「上海游記」の一人称としての語り手）にとって、「最初のうち「驚きだったの」は、「中国人あるいは中国のあり方だけではなく、在中日本人までもその中国に完全に溶け込んでいること」であるが、「上海滞在の最後になって、語り手の「私」は自分と違って、一見、完全に中国に溶け込んでいるかのように見えた在中の日本人ですら、本能的に「日本」というものがしっかり刻み込まれていることを発見するわけ」だと指摘した。本論文は在中日本人にふれた西山氏の講演に啓発され、在中日本人を切り口として研究を進めていく方向性を得る。この場で、西山氏にお礼を申し上げる。

14 〈他者〉は社会学の概念として知られているが、文学の分野にも影響を及んでいる。本論文は『自我の社会学』（船津衛『自我の社会学』　放送大学教育振興会　二〇〇五年三月）が分類する「親密な他者」と「疎遠な他者」という概念を用いる。「他者には（中略）二種類が存在する。父、母、兄弟姉妹、友達などの親しい人間と敵やストレンジャーのように、自分と対立したり、疎遠であるような存在である。他者は「親密性」、と「疎遠性」の二つからなる」（四九頁）という。本稿は「親密な他者」を〈仲間〉、「疎遠な他者」を〈他者〉と称し、詳しくは後述する。

15 高村直助『近代日本綿業と中国』（東京大学出版会　一九八二年六月）　七五～七六頁。

16 西川博史『日本帝国主義と綿業』（ミネルヴァ書房　一九八一年一月）　二〇六頁。

17 小野和子「旧中国における『女工哀史』」（『京都大学東方学報』（第五〇冊）　一九七八年二月）　二九五頁。

18 高村直助『近代日本綿業と中国』（東京大学出版会　一九八二年六月）　一三二頁。
19 厳中平『中国綿紡織史稿』（商務印書館　二〇一一年一二月）では、「在華紡の創設ラッシュ期」は一九二一年～一九二二年とされる。日本語訳は稿者。
20 『芥川龍之介全集』（第八巻）（岩波書店　一九九六年六月）　二七九頁。
21 翟新『東亜同文会と中国』（慶應義塾大学出版会　二〇〇一年一月）。
22 「東亜同文会主意書」（『東亜時論』（一）　一八九八年一二月）一頁。
23 北岡伸一「日本のアイデンティティは何か。その意味するもの。」（伊藤憲一監修　『日本のアイデンティティ』　日本国際フォーラム／フォレスト出版　一九九二年二月）二三三頁。
24 栗田尚弥『上海東亜同文書院』（新人物往来社　一九九三年一二月）　一三頁。
25 前掲注24同書　一三頁。
26 武井義和「中国における東亜同文書院研究」（『愛知大学国際問題研究所紀要』（一三二）二〇〇八年九月）　二〇七頁。
27 前掲注26同書　二〇七頁。
28 周徳喜「東亜同文書院始末」（『蘭州大学学報（社会科学版）』（三二（三））　二〇〇四年五月　七四頁）　日本語訳は稿者。
29 趙文遠「上海東亜同文書院与近代日本侵華活動」（『史学月刊』（二〇〇二年第九期）五七頁）日本語訳は稿者。
30 阿部洋「東亜同文会の中国人教育事業」（阿部洋編『日中関係と文化摩擦』厳南堂書店一九八二年一月）一二～一三頁。
31 前掲注30同書　一二頁。
32 王書瑋「「上海遊記」の「徐家匯」―基督教受容史に芥川の見出した「近代」」（『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』（一二〇）　二〇〇五年三月）二三頁。
33 前掲注32同書　二九頁。
34 前掲注32同書　二九頁。
35 上海租界志編纂委員会編『上海租界志』（上海社会科学院出版社　二〇〇一年一一月　一頁）　日本語訳は稿者。
36 『園芸植物大事典』（三）（小学館　一九八九年二月）　七五頁。
37 サンドウイッチについて、「十八世紀、イギリスのカードゲーム好きだったサンドウイッチ伯爵（the Earl of Sandwich）が食事の時間を惜しんで、ゲームをしながら食事のできるものを考え、白いパンにローストビーフを挟んで食べたものが最初であり、これが世の中に広まり、発案者である伯爵の名前で呼ばれるようになったものだ」とある。『百菓辞典』第四版（東京堂出版　一九九九年八月）　一一六頁。
38 『茶大百科』（一）（農山漁村文化協会　二〇〇八年三月）　三七頁。
39 『日本国語大辞典』第二版（第三巻）（小学館　二〇〇二年一月）　五七五頁。
40 姚紅「芥川龍之介と上海における日本語新聞」―書簡に収蔵された新開切り抜きをめぐ

って―(『筑波大学比較・理論文学会文学研究論集』(二八)二〇一〇年二月)　九一頁。

41 前掲注23同書　二三二頁。

42 西山康一(〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」(『時代の中の異文化交流』岡山大学文学部二〇一一年三月)は、「私」の中国の中に溶け込めない拒絶感を、「身体的な自動作用」として捉えているが、本章ではそうした拒絶感だけでなく、日本人としてのナショナリズム的な仲間意識にも広げて、「身体的な自動作用」という言葉を用いている。

43 井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』(有斐閣　二〇〇五年一二月)　五～六頁。

44 上述は、島屋政一『大阪毎日新聞社大観』(大阪出版社　一九二四年一一月)と『毎日新聞百年史』(毎日新聞社　一九七二年二月)からの参照。

45 島屋政一『大阪毎日新聞社大観』(大阪出版社　一九二四年一一月)　二～三頁。

46 篠崎美生子「「上海游記」を囲む時間と空間」(篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園和平文化研究所　二〇一五年三月)　五～八頁。

47 前掲注46同書　八～一〇頁。

48 前掲注46同書　一〇～一一頁。

第二章　「江南游記」に見られる日本へのまなざし
――大阪毎日新聞社の要請との関わり――

第一節　芥川の江南体験と「江南游記」

一九二一年五月二日、芥川龍之介は「上海から杭州に」向かい、江南の旅を迎えた。「三日、西湖に画舫（画舫とは美しく飾った遊覧船）を浮べ、湖内を遊覧する。荒れ放題の蘇小小の墓、革命家秋瑾女史の墓、岳飛廟、三潭印月、退省庵、放鶴亭を見る。四日、古刹霊隠寺に行く。五日、杭州から上海にもどる」。「八日、上海から蘇州に行く。朝寝坊して三列車乗り遅れたため、夕方到着」する。「案内者は島津四十起」であった。

「九日、ロバで廻り、北寺の九層の塔にのぼり、道教の寺院玄妙観を見、夕暮れ時に荒廃した孔子廟を訪ね」た。「一〇日、この日もロバに乗り、天平山白雲寺へ行き、雨に濡れながら霊厳山霊厳寺へ行く。他にどの日かははっきりしないが、有名な庭園の留園・西園を観、楓橋夜泊の寒山寺や虎邱も訪ねた」。「一一日、前夜一二時頃蘇州駅から乗車して鎮江に向い、夜明けに鎮江に到着して下車」する。「そこから運河を船で揚州に向い、揚州唯一の日本人で役人の高洲太吉の案内で画舫に乗り、徐氏の花園や五亭橋、法海寺、平山堂などを見物して、同氏宅に泊まる」。

「一二日、揚州から鎮江にもどり、そこで案内役の島津と別れ、列車で南京に到着」する。日本人経営のホテルに宿をとり、中国人の案内者と人力車で繁華街の秦淮に赴き、食事して帰る」。一三日、大阪毎日新聞社の「支局員五味の案内で市内をまわる。孝陵を見、胃が痛むので宿にもどり、アンマをとって昼寝する。かつて愛読した『家庭軍事談』の著者多賀中尉に招待され、夕食をご馳走になる」。「翌一四日南京を船で発ち」、一五日に上海に戻った（注1）。

このように、一九二一年五月二日から一五日まで、芥川は杭州を始め、蘇州、鎮江、揚州、南京等の江南地域の都市を訪れた。こうした江南体験を記す『江南游記』は、一九二二年一月一日から二月一三日まで『大阪毎日新聞』に連載されていた。

第二節　「江南游記」の語り方について

『大阪毎日新聞』に掲載された「江南游記」は以下のように始まる。「私」は「昨日の朝、本郷台から藍染橋へ、ぶらぶら坂を下つて行つ」た。すると、「反対にその坂を登つて来た」二人の「青年紳士」と「すれ違」う。その時、「卒然」向こうから「噯喲」という「間投詞」が「伝わ」ってくる。この「偶然耳にした」中国語は、「いろいろな記憶」を甦らせ、「腸胃の病の為に、三月ばかり中絶してゐた、私の紀行の事」を思わせる。そのおかげで、「上海游記の続篇」（稿者注：「江南游記」）を、「大阪の社」（稿者注：大阪毎日新聞社）に催促され、「腹の工合が悪かつたり」、「寝不足」が「続いたり」、「感興がなかつたり」する日々を送っている「私」は、その「意外な仕合せ」に恵まれ、「薄田氏」（稿者注：薄田泣菫のこと）にようやく応えられるようになって、「書き出さうと云ふ気」がしたという。

「江南游記」はこうした「前書き」から始まり、「病」を抱えているにもかかわらず、原稿の催促を余儀なくされた「私」の創作上の苦境を提示している。と同時に、テクストの空間を大きく二分化（「私」が旅行者として、経験した過去の空間①と、テクストがどうやって、作者としての「私」に書かれるかという現在の空間②）してしまう。そしてテクストにおいて、書く私（空間②）は、しばしば空間①に介入し、ストーリーの進展を大きく左右することになる。

それについて例を示そう。「私」が西湖の「八つ橋」を「渡つて来」た際、「若い四五人の支那人に遇つ」た、そして、その中の一人は、「殆小宮豊隆氏と、寸分も違はない顔してゐ」た。また、他にも、「京漢鉄道の列車ボオイにも、宇野浩二にそつくりの男がゐ」たし、「北京の芝居の出方にも、南部修太郎に似た男がゐ」た、というふうに展開していく。すると、書く「私」（空間②）が姿を現す。

――こんな事を書いていると、至極天下泰平だが、私は現在床の上に、八度六分の熱を出してゐる。頭も勿論、ふらふらすれば、喉も痛んで仕方がない。が、私の枕もとには、二通の電報がひろげてある。文面はどちらも大差はない。要するに原稿の催促である。医者は安静に寝てゐろと云ふ。友だちは壮だなぞと冷かしもする。しかし前後の行きがかり上、愈高熱にでもならない限り、兎に角紀行を続けなければならぬ。以下何回かの江南游記は、かう云ふ事情の下に書かれるのである。芥川龍之介と云ひさへすれば、閑人のやうに思つてゐる読者は、速に謬見を改めるが好い。

（十　西湖（五）　「江南游記」）

このように、書く「私」（空間②）が現れ、「八度六分の熱」や「原稿の催促」の「二通の電報」に絡んだ厳しい創作状況を吐露するのみならず、「以下何回かの江南游記は、かう云ふ事情の下に書かれるのである」と認めている。雷峰塔の見学にあたっても、書く「私」（空間②）が再び介入する。

雷峰塔を少時仰いだ後、我我は新新旅館の方へ、――今日は昨日よりも熱が低い。喉も焼いたのが利いたやうである。この分ならば二三日中に、机の前へ坐れるかも知れない。しかし紀行を続ける事は依然として厄介な心もちがする。その心もちを押して書くのだから、どうせ碌な物は出来さうもない。

（十一　西湖（六）　「江南游記」）

書く「私」（空間②）は、病気によるかもしれぬ、執筆中の「江南游記」を「続ける事」への「厄介な心もち」を隠さずに、「その心もちを押して書くのだから」、「どうせ碌な物は出来さうもない」とまで明言してしまう。さらに、金山寺の記述にいたっては、「手帳に書いてあるの」を文章にならないまま、「写」してしまうという。

「白壁。赤い柱。白壁。乾いた敷石。広い敷石。忽又赤い柱。白壁。梁の額。梁の彫刻。梁の金と赤と黒と。大きい鼎。僧の頭。頭に残つた六つの灸跡。揚子江の波。代赭色に泡立つた波。無際限に起伏する波。塔の屋根。甍の草。塔の甍に劃られた空。壁に嵌めた石刻。金山寺の図。査士票の詩。流れて来る燕。白壁と石欄と。蘇東坡の木像。甍の黒と柱の赤と壁の白と。島津氏はカメラを覗いてゐる。広い敷石。簾。突然鐘の音。敷石に落ちた葱の色。……」

（二十六　金山寺　「江南游記」）

その粗雑で、決して文章といえない「写し」の生成原因について、書く「私」（空間②）が今度は、親友「菊池寛」の看病を理由として弁解していく。

どうもこれだけ書いたのぢや、読者には一向通じさうもない。が、通じる事にして置かないと、書き直すだけでも手数である。手数も勿論ふだんなら辞さない。が、私は今名古屋にゐる。おまけに道づれの菊池寛は、熱を出して呻つてゐる。どうか其処を御酌量の上、通じるとして置いて頂きたい。この一回を書き終つた後、私は又菊池の病室へ出張しなければならないのである。

（二十六　金山寺　「江南游記」）

繰り返し述べるが、「江南游記」は「私」が旅行者として、経験した過去の空間①と、テクストがどうやって、作者としての「私」に書かれるかという現在の空間②とに、大きく分かれている。そして、書く私（空間②）は、テクストで一貫して、「江南游記」を、「病」、「原稿の催促」等の「事情の下に書かれ」たものと強調しながら、紀行文そのものへの不安に自ら言及する。その上で、「江南游記」を「碌な物は出来さうもない」と位置付けている。いわば、テクストの空間を大きく二分化し、交錯させ、そして「病気」、「原稿の催促」等を理由に、書く私（空間②）がテクストの空間①に介入した上で、紀行文への不満を漏らしている。こうした語り方は、まさに「江南游記」の特徴といえるだろう。

第三節　芥川による「江南游記」の創作

「江南游記」の執筆時、作家芥川龍之介は本当に病を抱えながら、原稿を催促される立場にいたのか。そして、実生活の芥川は「江南游記」に不安を持ち、消極的に捉えていたのか。それついては、芥川の薄田泣菫への書簡を調べると明らかになる。

周知のように薄田泣菫は、大阪毎日新聞社の学芸部長であり、芥川を大阪毎日新聞社の社員として招聘し、彼の中国派遣にも尽力した人物である。いわば、薄田は芥川にとって、大阪毎日新聞社との架け橋のような、不可欠な存在といえるだろう。次の書簡（注２）は、一九二一年一一月二四日付のもので、「江南游記」の準備期にあたる、『大阪毎日新聞』連

載開始の一か月前に、書かれたものとみられる。

拝啓　度々御世話をかけまして申訳ありませんどうも支那旅行の為文債をのばして行つたのとその後体のわるい為もろ〳〵の雑誌編輯者より原稿をよこせ〳〵とせめられ病躯その任にたへず実際へこたれ切つてゐます仰ぎ願くは新年号を退治するまで御待ち下さるやう願ひますその代り今度始めたら中絶しませんこの頃神経衰弱甚しく睡眠薬なしには一睡も出来ぬ次第、窮状幾重にも御寛恕下さい（後略）　頓首

このように、芥川は「睡眠薬なしには一睡も出来ぬ」「神経衰弱」に罹患した「病躯」の下で、「原稿をよこせ〳〵とせめられ」る苦情を、余すことなく薄田に伝えている。この書簡の内容は、冒頭で触れた「江南游記」の前置きにおける、「病」を抱えながら、「大阪の社」に「原稿の催促」を強いられた「私」の苦境を彷彿させよう。それに引き続き、「江南游記」が『大阪毎日新聞』に連載中にもかかわらず、「郵便屋の遅滞か女中の怠慢か」という原因で、原稿の「遅滞」を余儀なくされた。催促した薄田に、芥川は「原稿は九回以降毎日一回づつ送つてゐます」と次（注3）のように弁明する。

拝啓　如何なる訳か今日御手紙を拝見しました　日附がない為何日に出たのかわからないのですがまだ私の支那紀行の原稿一回も来ない由ありますからずつと前のだと思ひます　郵便屋の遅滞か女中の怠慢か今日兎に角拝見したのです（中略）それから原稿は九回以降毎日一回づつ送つてゐます

芥川が「毎日一回づつ送つ」ていくとすれば、「原稿遅滞」は避けられるはずであろう。しかしながら、「遅滞」がやはり繰り返される。今度（注4）は、「菊池寛の病気」等によるものという。

啓　菊池の病気や何かの為江南游記掉尾の原稿遅滞を来たし御気の毒に存じます　さて同游記も廿九回を以て一段つきましたが今度は長江游記へとりかかる前に一週間程息つぎをします　しますと云ふよりさせて下さい一日四五枚書きつづけるのは中々楽ぢやありませんしかし読者退屈とならば何時までも延期してよろしい　当方の考へでは長江游記、湖北游記、河南游記、北京游記、大同游記とさきが遼遠故これからはあまり油を売らず一游記五回乃至十回で進行したいと思つてゐます　以上

前述で触れたように、「江南游記」では、金山寺に関する、読者に「一向通じさうもない」「手帳」から「写し」た、文章にならない記述について、「私は今名古屋にゐる。おまけに道づれの菊池寛は、熱を出して呻つてゐる。どうか其処を御酌量の上、通じるとして置いて頂きたい」とする「私」の様子は、上述の書簡の示した、芥川の実生活と一致したこと

が確認できる。したがって、テクスト「江南游記」に記されたその記述は、芥川の実生活から投影されたものと見なしてもよかろう。

そして、上述の書簡において、芥川は、「江南游記」が「読者退屈」を引き起こす心配を隠さず、「読者退屈とならば何時までも延期してよろしい」とまで言い、作家として決して望ましくない「延期」を覚悟したことも提示している。この書簡の内容は、締め切りに追われている作家芥川の切迫ぶりと、「江南游記」に対する不安を、はっきり表しているといわざるをえない。次の書簡（注５）は、こういった途方に暮れたような芥川像を再び提供する。

即　席　歌

原稿を書かねばならぬ苦しさに痩すらむ我をあはれと思へ
雪の上にふり来る雨か原稿を書きつつ聞けば苦しかりけり
「甘酒」の終は近し然れども「支那旅行記」はやまむ日知らに
さ庭べの草をともしみ　椽にあれば原稿を書く心起らず
作者、我の泣く泣く書ける旅行記も読者、君にはおかしかるらむ

（中略）

支那紀行書きつつをれば小説がせんすべしらに書きたくなるも
小説を書きたき心保ちつつ唐土日記をものする我は
原稿を書かねばならぬ苦しさに入日見る心君知らざらむ
のんきなるＡ・Ｋ論をする博士文章道を知らず卑しも
薄曇るちまたを行けば心うし四百の金も既にあまらず

澄江堂主人

二　伸

一体ボクの遊記をそんなにつづけてもいいのですか。読者からあんな物は早くよせと云ひはしませんか。（云へばすぐによせるのですが）評判よろしければその評判をつつかひ棒に書きます。なる可く評判をおきかせ下さい。小説家とジヤアナリストとの兼業は大役です

「原稿を書かねばならぬ苦しさに痩すらむ我」、「作者、我の泣く泣く書ける旅行記」といった文句に、逃げ場のなく、窮地まで追い込まれたような、作家芥川の人間像が浮き彫りになっている。のみならず、「一体ボクの遊記をそんなにつづけてもいいのですか。読者からあんな物は早くよせと云ひはしませんか」とまで打ち明けている。こうして、「江南游記」に対する不安や、読者の評価を気にせずにはいられない作家芥川の苦境がありありと浮き上がってくる。だから、「なる可く評判をおきかせ下さい」と、読者の「評判」への要請を禁じえなかったのであろう。

結果的には、『大阪毎日新聞』（朝刊）に二八回（一九二二年一月一日から二月一三日ま

で）にわたって連載した「江南游記」は、一六回の休載（休載日は、一月四日、八日、九日、一〇日、一八日、二〇日、二三日、二五日、二月二日、三日、四日、六日、八日、九日、一一日、一二日）を余儀なくされたことが確認できる。

前述をまとめると、厳しい状況で創作された「江南游記」に対し実生活の芥川が、不安を持っている。それにしたがい、テクスト「江南游記」において、書く「私」（空間②）が屢々空間①に介入し、苦しい創作状況を吐露した上で、「江南游記」への不満を漏らしている。その不安と不満の場に置かれたテクスト「江南游記」は、一体どのようなものなのか。「江南游記」は、所謂「碌な物は出来さうもない」という芥川自身の評価通りのものなのか。それについて、テクストそのものを詳しく検討しなければならない。

第四節　「江南游記」に見られる「私」の追求するテーマ

「江南游記」の構成から検討していく。すでに先行研究（注６）によって指摘されたが、「江南游記」は「名所旧跡についての記述が際立って多くなっている」テクストである。

（前略）名所旧跡についての記述が際立って多くなっている。（中略）そのことは章題にも明らかで、「杭州の一夜」「西湖」「霊隠寺」「蘇州城内」「天平と霊厳と」等々「江南游記」の章題は全二九章のうち二六章まで地名あるいは旧跡名になっている。

その指摘の通り、「江南游記」の内容面において、風景を見るところに重点を置かれているようにみえる。

ところで、風景というテーマは本当に「私」が追求するものなのか。その答えについて、「江南游記」における注目すべき箇所がある。村田孜郎と、西湖にある「飯館」・「楼外楼」で食事した際、隣のテーブルを囲んだ「ハイカラな支那人の家族」から、なかなか目を離さない「私」は、こう語り出す。

（前略）青青と枝垂れた槐の下に、このハイカラな支那人の家族が、文字通り嬉嬉と飯を食ふ所は、見てゐるだけでも面白い。私は葉巻へ火をつけながら、飽かずに彼等を眺めてゐた。断橋、孤山、雷峰塔、――それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。

（九　西湖（四）　「江南游記」）

上述において、風景に当たる「山水」より、「人間を見」る方が「愉快」だということが、「私」の語りによって語りだされた。ところが、風景より「人間」を、と明言したにもかかわらず、「江南游記」は、何故風景を見るところに重点を置いているのか。それについて、「私」が次のように謎を解いていく。

天平山一見をすませた後、我我は又驢馬に乗りながら、靈巖山靈巖寺へ志した。靈巖山は伝説にもせよ、西施弾琴の岩もあれば、范蠡の幽閉された石室もある。西施や范蠡は幼少の時に、呉越軍談を愛読した以来、未に私の贔屓役者だから、是非さう云ふ古蹟は見て置きたい。――と云ふ心もちも勿論あつたが、実は社命を帯びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や美人に縁のある所は、一つでも余計に見て置いた方が、万事に好都合ぢやないかと云ふ、さもしい算段もあつたのである。この算段は上海から、江南一帯につき纏つた上、洞庭湖を渡つても離れなかつた。さもなければ私の旅行は、もつと支那人の生活に触れた、漢詩や南画の臭味のない、小説家向きのものになつたのである。

（十七　天平と靈巖と（中）　「江南游記」）

なるほど、「私」が追求するのは、所謂「もつと支那人の生活に触れた」、「人間」的なものである。が、「社命」を配慮するため、「万事に好都合」の「英雄や美人に縁のある所」に当たる風景を書かざるをえない、という事情が明らかになっている。

第五節　大阪毎日新聞社の要請と「私」の追求するテーマ

上述の「私」に任ぜられた「社命」については、大阪毎日新聞社の芥川の中国旅行の宣伝記事によって明らかになる。第一章において既に触れたが、一九二一年三月三一日付の『大阪毎日新聞』には、芥川の中国訪問に関する予告記事が、「支那印象記　新人の眼に映じた新しき支那　近日の紙上より掲載の筈」（注7）のタイトルで告知された。

支那は世界の謎として最も興味の深い国である。古き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラツセル氏やデユウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越ゑて来ようとするのも、やがて此の点に心を牽かるるに外ならぬ。吾が社はここに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯花を狩り尽した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行行想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の観たる支那が如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本編に依つてのみ見られよう。

この芥川の中国訪問に関する予告記事は、研究者にしばしば引用されているものである（注8）。記事は「古き支那」を「支那固有の文化」としながら、「新しき支那」を「新世

界」と捉え、「新様と新意に饒なるもの」とも表現している。そして、「支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある」ことによって、「新人ラツセル」等の欧米文化人は中国へ観察に赴いたと解釈する。「此の点に心を牽かるる」「吾が社」は、ついに「新興文芸の代表的作家」である芥川を中国に派遣し、「新しき支那」（「若き支那の面目」）への観察、すなわち、「新人の観たる支那が如何に新様と新意に饒なるものであるか」という注文を、芥川に要請したと記事から読み取れる。

こうした「新人の眼に映じた新しき支那」は、なぜ『大阪毎日新聞』に要請されたのか、そして、「新しき支那」の内核は一体どういったものであるのか、それらの問題を考察するに当たり、予告記事に示されたラッセルの、中国訪問中（芥川の中国旅行の始まる三か月前の一九二〇年一二月五日付の）『大阪毎日新聞』に寄稿した「支那の第一印象（上）　北京にて　ベルトランド・ラツセル」（注９）に触れる必要がある。

『ベルトランド・ラツセル』の名は今や新文化、新思想に憧憬する隣邦の若き人々に種々の響きを与へて居る。ラ氏の支那に遊ぶといふ噂の伝はるや、彼等は一斉に爪立ちして其来るを待つた、而してラ氏の来りて最初の支那批判を試みるや、其批判の余りに忌憚なかりしが為に彼等は愕然として駭いた斯くして支那の読者階級は今しラ氏の一言一句に深甚の興趣を寄せて居る氏は目下一週二回国立北京大学の講堂に立つて『哲学問題』及び『新支那の使命』を講じて居るが、其忌憚なき批判と深奥なる観察とは講演の都度溢るゝが如き熱心な聴講者を呼んで居ると伝へられる以下の一篇は本社が特に其寄与を得たる氏の論文にして『支那の第一印象』が如何に哲人に映じたるかを語れるもの、吾等は氏自身の感想を端的に之によりて開き得るを欣ぶものである。

古き美の破壊

初めて欧羅巴から支那へ来た旅人は先づ其支那独特の偉大な芸術美に撲たれる、そして又近代商工主義が侵入した程の処には何処にも無残に打壊された美の廃墟があるのを見て二度吃驚する。

若し其旅人の興味の中心が芸術と美とに存するならば恐らく茲にも欧洲文明の影響の著しいのを呪ふに相違ない、其人は支那特有の絵画と詩とが捨てゝ顧られず、又古風な支那独有の四角ばつた卓や椅子が誠に平凡な洋風の家具にに換へられて居るのを観察する此趣味の旅行者は残された美を丹念に漁る保守主義を多分思想の世界にまでも持ち入らうとするのであらう、其処には過去の世界から其儘移された仏寺の美しさと仏教の思想とがある、旅人は外貌も修業も欧洲の学者のそれとは似てもつかぬが其道に智識を積んだ人々が現存して居るのを看て喜ぶだらうそして世界が忠実な瞑想家の為めに与へたと思われる様なこんな特異性を瞑想の興味と変化とを増す為めに何うかして何時までも残したいと切に希うであらう。

然し一介の観光客としてゞなく、如実に支那を考察するの労を惜まずして支那の前

途を想ふならば却々斯んな保守的な態度に満足しては居られさうにはない、支那の古い美には最早何の生命も残つて居ない、支那全土を挙げて一個の美術館として取扱わざる限り、此古美術の保存さへむつかしいことが判る、されば支那人中学識あり溌溂たる新進の士は支那の此優れた古来の文化に対して頗る冷淡で殊に外人が之を賞揚する場合には堪へ難い苛だゝしさをさへ感ずる風がある、事実支那将来の進歩発展は仮令真の価値のある場合に於てさへ古いものを全く捨て去る事に存するのが解る、商工主義、デモクラシー、科学、近代教育といふやうなものには伝統的にして変らざる文明の落ちついた美と云ふものは丸でない、現代の欧洲には四五世紀前の様に人の心を魅するものは何もないが、と云つて現今欧羅巴人で誰も中世期の昔を今に繰返さうと希ふものはあるまい、之と同じ様に支那でも生気に満ちた人々は其必然的な美の損失を余り惜む処もなく只管に将来の発展に邁進せん事を望んで居るのである。

新理想の追求

欧洲から来たものは先づ支那の青年達が古い伝統に渇仰の念を失ひ新しい理想を追い教化指導を求むるの切なることに驚くが勿論其間にも孔子教の面影はある、学問の徳聖人の尊崇は偶像破壊者の間にも残つて居る、支那は幾世紀を通じて博学能文の故を以て選ばれ人々によつて治められた国であるが故に『文字階級』なるものが出来上つて居るが、各階級の青年は今や智的指導を米国に或は欧羅巴に向つて求め出したのである、所が彼等の就中求むる所は事実の智識でなく所謂智慧である、『聖人あり、治国平天下の道を講ずべし』との一般の信念が現今に至つても尚人心を支配しているを見ては驚嘆せざるを得ない、我等西欧人は最早聖人に対する信仰を悉く失つて了つたが之は我等の国家生活、企業或は政党政派の膨大と其組織体制の為に個人の価値を没し従つて聖人さへ信しなくなつたのである然るに支那では今尚聖人出でゝ希臘七賢人に聞くソーロンやリコルゴスの仕事を遂げるかの様な期待を有してる、人に導かれやうと云ふ願があつて指導する集合的能力がないことが支那永遠の悩みである。

上述の引用記事における冒頭の段落は、ラッセル自らの文章ではなく、『大阪毎日新聞』による解説文に違いない。ここでは、ラッセルを「新文化」、「新思想」を持つ人物と捉えられているが、この見方は、上記の芥川の中国訪問の予告記事で、「新人」と捉えられた「ラツセル」と繋がっているように思われる。周知の通り、ラッセルは一八七二年生まれで、「支那の第一印象」を発表した際、既に四八才を迎えていた。それゆえ、常識的にはなかなか「新人」とは見なしがたい。にもかかわらず、ラッセルを「新人」ととらえる『大阪毎日新聞』は、恐らく年齢と関係なく、「新文化」と「新思想」を有する人間であることを強調するために、「新人」と名づけたのではないだろうか。こうした「新文化」と「新思想」の持ち主であるラッセルが「忌憚なき」「支那批判」を行ったにもかかわらず、中国の「熱心な聴講者を呼んで」「響きを与へて居る」とされている。こうして、中国を教化するラッセ

ルの啓蒙者としての像が『大阪毎日新聞』の語りによって作り出されたのである。

続く段落では、ラッセルは最初に「欧羅巴から支那へ来た旅人」としての目線から、中国伝統のものを「古き美」や「支那独特の偉大な芸術美」と認め、それが「近代商工主義」の「侵入」によって「無残に打壊された」ことに心を寄せて、残念な思いを示す。しかし一方で彼は、「一介の観光客としてゞなく、如実に支那を考察するの労を惜まずして支那の前途を想ふならば却々斯んな保守的な態度に満足しては居られさうにはない、支那の古い美には最早何の生命も残つて居ない」として、学者からの目線で、自らの認識を改め、中国伝統のものに対する批判を加えたのである。その中で、中国伝統のものでは「丸でないもの」として、「商工主義、デモクラシー、科学、近代教育」等の新しいものが取り上げられる。

最後の段落では、ラッセルは「支那の青年達が古い伝統に渇仰の念を失ひ新しい理想を追い教化指導を求むるの切なることに驚くが勿論其間にも孔子教の面影はある、学問の徳聖人の尊崇は偶像破壊者の間にも残つて居る」とし、中国の「古い伝統」と「新しい理想」の交錯するところを見つけ、「各階級の青年は今や智的指導を米国に或は欧羅巴に向つて求め出したのである」が、『聖人あり、治国平天下の道を講ずべし』との一般の信念が現今に至つても尚人心を支配している」と〈新〉と〈旧〉の混在する中国を見出している。こうした、「古い伝統」と「新しい理想」の交錯する中国を指摘したラッセルの見方は、前述の『大阪毎日新聞』の予告記事に示された「支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある」という見方を彷彿させる。

上述の記事に引き続き、ラッセル「支那の第一印象（下）北京にて　ベルトランド・ラツセル」（注10）が、一九二〇年一二月六日付の『大阪毎日新聞』に掲載された。

支那を救う途

最近二十年に支那の成就した所は実に驚くべきものがあるが、私は今の支那に最も必要な事は教育の普及であると信ずる、勿論之は就学期にある青年子女許りでなく、全国民の教化である、支那は元来其社会組織は頗る貴族的で、今日と雖も其伝統は支那社会にあって却々根強いものである今日の支那社会の生産状態は依然として手工業が現存して居て産業革命前の欧洲に於ける経済状態の様なものである、精神的方面も同様で伝統的信念に対する懐疑と、新信仰の切実な希求は恰も百五十年前の仏蘭西其儘である、然し私の観る処では支那を救う為めには新信仰の種類は兎もあれ何れにしてももう少しデモクラチックな精神を取り入れなければ到底役に立つとは思はれないが、此デモクラチックの精神は第一着手として、労働階級の教育に依って示されなければならぬと考える、勿論其方向に進む為めには幾多の困難と障碍とが横はつて居る事は私も熟知して居るが忍耐と強固な決意とに依つて遂には勝利を得る事が出来ると信じて居る。

支那と列強との関係、支那と泰西の思想及び施設との関係は非常に微妙な問題であ

る、思ふに近代的洞察を持つた愛国的支那人は若し可能であつたなら、出来るだけ諸外国から政治的な或は経済的な制御を受けずに西欧の科学と産業制度とより生ずる最多量の利益を得たいと願つたに違いない、然し思想と思想より来る支配とは恐らく分離することはむつかしいであろう、若し現代支那人が外国の資本、或は種々な方面の外国の侵略を拒もうと企画するにしても、其計画が必然に思想、経済制度、社会組織の範囲に迄及ぶ大愛国的運動と関連したものでない限り成功するとは思われぬ、斯の如き事情の下に悪なしに善を得る事は困難であると思うが、兎に角新来の旅人は此処に至つて謎に遭遇し自ら何を欲すべきかをすら判断する事が出来ぬ。

新支那の将来

兎も角も次の二十年に近代商工主義が支那を根本から一変すべきものであることは明かである、然し其商工主義の発達する処何処にも必ず一方に弊害を伴うものであるが、支那に於て此商工主義が弊害を伴わずに発達する事を希望するとしても、唯に望むは宜しが、恐らく望む事多きに過ぐるの結果になるであろう私は此商工主義の過渡期に処しても鋭い洞察と適当な施設とを以てすれば甚だしい悪影響なしに経過する事が出来るものと信じて居るが、未だ嘗て何れの国も此洞察と施設とを示したものはない、而して支那だけが例外を作るだろうと予想する根拠もないのである、僅数週の極皮相な観察に過ぎぬかもしれぬが、私の観る所では支那の将来の為に嘱目すべきものは、少数有識者が其理想の追求に切実なことと、而して社会的政治的組織の改善を求めて、喜んで之が指導者に服せんとするの意志とであると思う而して順序を漸次に踏み進む忍耐と希望とを有するならば、賢明なる指導者を得て驚くべき国家的覚醒に至るに足るものと信じて居るが、どの程度まで之等の条件が充たされるかはまだ私には見当がつかない、兎もあれ衷心から称賛を禁ずる事が出来ない一事は支那人士の「仁の心」である、私は此度到る処に受けた温情に満ちた好遇には驚き且非常な感動を受けた、御礼心に支那諸問題の解決に多少でも貢献する事が出来たならと思うのは自然であるが、私は何分問題が紛糾し且難解であって其上新来の客で支那語に通じて居ないので、問題の実相さえも捉え難いと思われる、此様な事情の存する限り私が何か申し述べたとしてもそれは皮相的な而して無学から来た観察に過ぎぬとの譏は免れぬ事であろう。

以上のように、ラッセルは「支那を救う途」として、「今の支那に最も必要な事は教育の普及である」とし、中国「全国民の教化」の必要性を訴える。そして「精神的方面」において、「デモクラチックな精神を取り入れなければ」ならないことも指摘する。さらに、「支那と列強との関係、支那と泰西の思想及び施設との関係」においては、ラッセルは「近代的洞察を持つた愛国的支那人は若し可能であつたなら、出来るだけ諸外国から政治的な或は経済的な制御を受けずに西欧の科学と産業制度とより生ずる最多量の利益を得たい」と

いう考え方の甘さを指摘するとともに、「現代支那人が外国の資本、或は種々な方面の外国の侵略を拒もうと企画する」ことには、実行性が乏しいとの考えを示し、「悪なしに善を得る事は困難である」と結論付けている。上述の、「泰西の思想及び施設」にせよ、「西欧の科学と産業制度」にせよ、「外国の資本、或は種々な方面の外国の侵略」にせよ、「近代商工主義」にせよ、いずれも中国固有のものではなく、列強から齎された新しいものといえるだろう。ラッセルは、それを「弊害を伴うもの」にしても、「悪なしに善を得る事は困難である」と認め、こうした新しいものなくては、「新支那の将来」を見出せないと捉えているようである。

以上、ラッセルの目に映じた中国をまとめると、次の結論が導かれるだろう。すなわち、伝統的なものと新しいものが、現在の中国には混在し、交錯している。「古き美」とみなされる中国の伝統的なものが、「近代商工主義」等の「侵入」によって「無残に打壊された」のは、残念なことである。しかし、その「支那の古い美には最早何の生命も残つて居ない」のであり、中国が「将来の発展に邁進」しようとすれば、列強から齎された新しいものでしか実現できない。

こういったラッセルの中国認識を踏まえて、再び「支那の第一印象（上）」の冒頭部における『大阪毎日新聞』の解説文に目を向けると、そこでは、中国の伝統的なものを「古き美」と認め、それに対する同情の念を示したラッセルの態度については、一切触れられていない。のみならず、「此度到る処に受けた温情に満ちた好遇には驚き且非常な感動を受けた」と漏らしたラッセルの中国に対する感激についても、一切言及していない。むしろひたすらにラッセルの、「新文化」、「新思想」で「忌憚なき」「支那批判」を行い、「響きを与へ居る」といった中国を教化する啓蒙者としての姿をアピールしている。このように、「支那の第一印象」の冒頭における『大阪毎日新聞』の解説と「支那の第一印象」にみられるラッセルの見解との間では、対中国の言説のスタンスをめぐり、温度差があるといわざるをえない。このように読めば、『大阪毎日新聞』の解説文にみられる、中国の伝統的なものを一方的に批判する姿勢は、『大阪毎日新聞』の立場を示唆していると見ることができよう。啓蒙者としてのラッセルの人物像と、「爪立ちして其来るを待つた」とする、ラッセルの指導教化を求める未開化の〈中国〉表象は、こうして『大阪毎日新聞』の解説によって形づくられていったように思われる。

こういったラッセルの「支那の第一印象」を芥川の中国訪問の予告記事に照らし合わせてみると、「支那の第一印象」に見られる新しいものは、まぎれもなく、予告記事に記された「新しき支那」と見なしてもよいだろう（同様に、「支那の第一印象」に見られる中国の伝統的なものは、予告記事に記された「古き支那」と見なしてもよい）。したがって、予告記事に記された「新しき支那」の中身は、中国が「将来の発展に邁進」するための欠かせない、原動力的な存在といってもよい。その文脈で捉えていくと、「新しき支那」（「若き支那の面目」）への観察、いわば、「新人の観たる支那が如何に新様と新意に饒なるものであるか」という『大阪毎日新聞』の芥川に対する要請には、「新しき支那」が中国の発展に貢

献するプラスの一面を観察してほしいというような趣旨も読み取れる。

それのみならず、「当時の列強との中国の覇権争いというものが、こういう新聞記事からも透けて見え」（注11）る。というのは、「ラッセル氏」、「デユウイ教授」、「ベルグソン教授」等の欧米文化人の中国訪問に「心を牽かるる」「吾が社」は、欧米諸国に後れをとらないように、芥川の中国派遣を追随する形で決めたのだ、という経緯が明らかになっているからである。ラッセルの目には、中国に「指導教化」を与えた啓蒙者は当然「米国」、「或は欧羅巴」であるのに対し、『大阪毎日新聞』にとっては、日本は勿論啓蒙者の範疇に含まれる存在といってもよいだろう。ちなみに、こうした中国進出を巡って、日本は欧米列強をライバル視とし、争おうとする姿勢が、当時『大阪毎日新聞』の中国に対するスタンスでもあったと第一章において、すでに触れている。

以上、「支那の第一印象」と照らし合わせた上で、芥川の中国訪問の予告記事を、大阪毎日新聞社の、啓蒙者として「古き支那」を批判し、帝国列強から齎された近代的な「新様と新意」に溢れた「新しき支那」に対する好意的な立場と、中国進出を巡って欧米列強と覇権を争おうとする姿勢とが読み取れる。こうした『大阪毎日新聞』の対中国のスタンスの中で、「支那が如何に新様と新意に饒なるものであるか」という「新しき支那」を注文する大阪毎日新聞社の「社命」の内核が、僅かながらも見えてくるのではないか。

第六節　大阪毎日新聞社の要請に応える「私」の〈中国〉表象

「江南游記」において、「私」は「社命」を配慮するため、「万事に好都合」の「英雄や美人に縁のある所」にあたる風景を選択せざるをえなかったという経緯が明らかになっている。そうした状況の中で、「私」が「新しき支那」を注文する「社命」に対し、どうやって自分の態度を示していくのか。また、「人間」的なテーマを掲げている「私」は、風景というテーマを躊躇いなく、甘受していけるのか。それについて、テクストをさらに検証する必要がある。「江南游記」における風景の分類から検討していく。

（一）　みすぼらしい風景と「私」の表象

テクストにおいて「私」がしばしば体験したのは、みすぼらしい風景といえるだろう。「私」の断橋体験に入ろう。

（前略）断橋は西湖十景の中、残雪の名所になつているから、前人の詩も少くない。現に橋畔の残雪亭には、清の聖祖の詩碑が建つてゐる。その他楊鉄崖が「段家橋頭猩色酒」と云つたのも、張承吉が「断橋荒蘇渋」と云つたのも、悉この橋の事である。――と云ふと博学に聞えるが、これは池田桃川氏の「江南の名勝史蹟」に出てゐるのだから、格別自慢にも何にもならない。第一その断橋は、ははあ、あれが断橋かと遥かに敬意を表したぎり、とうとう舟を寄せずにしまつた。

（六　西湖（一）　「江南游記」）

「私」が「断橋」に眼を投じた場合、「その断橋は、ははあ、あれが断橋かと遥かに敬意を表したぎり、とうとう舟を寄せずにしまつた」という皮肉的な表現から、「断橋」のみすぼらしい様子が、如何に「私」の興味をそそらないかということが、さりげなく伝わってくる。それに加えて「私」が、楊鉄崖の「段家橋頭猩色酒」と張承吉の「断橋荒蘚渋」という「断橋」の風情を描いた昔の詩句を想起することによって、現実の「断橋」のみすぼらしさが、一層対照的に表れることになる。

（前略）蘇小小は銭塘の名妓である。何しろ芸者と云ふ代りに、その後は蘇小と称へる位だから、墓も古来評判が高い。処が今詣でて見ると、この唐代の美人の墓は、瓦葺きの屋根をかけた漆喰か何か塗つたらしい、詩的でも何でもない土饅頭だつた。殊に墓のあるあたりは、西冷橋の橋普請の為に荒され放題荒されてゐたから、愈索漠を極めてゐる。少時愛読した孫子瀟の詩に、「段家橋外易斜曛。芳草凄迷緑似裙。弔罷岳王来弔汝。勝他多少達官墳。」と云ふのがある。が、現在は何処を見ても、裙に似た草色どころの騒ぎぢやない。

（七　西湖（二）　「江南游記」）

「蘇小小の墓」について、「私」は、それが「詩的でも何でもない土饅頭だつた」と酷評した上で、「孫子瀟の詩に、「段家橋外易斜曛。芳草凄迷緑似裙。弔罷岳王来弔汝。勝他多少達官墳」と云ふのがある。が、現在は何処を見ても、裙に似た草色どころの騒ぎぢやない」と、失望の情を隠さなかった。

やつと霊巖山へ辿り着いて見たら、苦労して来たのが莫迦莫迦しい程、侘しい禿げ山に過ぎなかつた。第一西施の弾琴台とか、名高い館娃宮趾とか云ふのは、裸の岩が散在した、草も碌にない山頂である。これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「官女如花満春殿」なぞと、懐古の情には沈めさうもない。

（十八　天平と霊巖と（下）　「江南游記」）

「西施の弾琴台」と「館娃宮趾」にある「霊巖山」になると、「私」は勿論「莫迦莫迦しい程、侘しい禿げ山に過ぎなかつた」と不満を漏らす。さらに、「これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「宮女如花満春殿」なぞと、懐古の情には沈めさうもない」と語り、目の前に現れた「霊巖山」を酷評した。

高洲氏の邸に一休みしてから、門前の川へ繋がせた、屋根のある画舫に乗りこんだのは、その後まだ三十分と、たたない内の事である。画舫はぢぢむさい船頭の棹に、直と川筋へ漕ぎ出された。川は幅も狭ければ、水の色も妙に黒ずんでゐる。まあ正直

に云つてしまへば、これを川と称するのは、溝と称するの勝れるのに若かない。その又黒い水の上には、家鴨や鷲鳥が泳いでゐる。両岸は汚い白壁になつたり、乏しい菜の花の畑になつたり、どうかすると岸の崩れた、寂しい雑木原になつたりする。が、いづれにした所が、名高い杜牧の詩にあるやうな「青山隠隠水迢迢」の趣なぞは見られさうもない。

（二十三　古揚州（上）　「江南游記」）

「揚州唯一の日本人、塩務官の高洲太吉」と船を浮かべた揚州の古い「川」に対面すると、「私」は、「川と称するのは、溝と称するの勝れるのに若かない」と評しながら、「杜牧の詩にあるやうな「青山隠隠水迢迢」の趣なぞは見られさうもない」と揶揄した。

「橋上より眺むれば、秦淮は平凡なる溝川なり。川幅は本所の竪川位。両岸に櫛比する人家は、料理屋芸者屋の類なりと云ふ。人家の空に新樹の梢あり。人なき画舫三四、暮靄の中に繋がれしも見ゆ。古人云ふ。「煙籠寒水月籠沙」と。這般の風景既に見るべからず。云はば今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり。

（二十八　南京（中）　「江南游記」）

名高い「秦淮」に至っては、「私」は、「平凡なる溝川なり」と評すると共に、「古人云ふ。「煙籠寒水月籠沙」と。這般の風景既に見るべからず。云はば今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり」と皮肉した。

上述の風景は、大阪毎日新聞社の「社命」に提起された「古き支那」にあたる名所古跡の範疇に属すべきものとみられる。「私」は、「土饅頭」、「侘しい禿げ山」、「平凡なる溝川」などの辛辣な表現で、その種の風景を批判している。のみならず、それを評価した昔の詩を、その対極側に据えることによって、風景に対する批判的な態度をより一層強めるのである。こうした批判的な態度は先に触れた「社命」の態度も彷彿させる。というのは、「私」のみすぼらしい風景への態度は、「古き支那」を、「老樹の如く横はつて居る」活力のない存在として受け止め、啓蒙者としての目線で中国を見下ろした「社命」の方針にも繋がっている。いわば、みすぼらしい風景をめぐって「私」と「社命」の態度は共通しているといえるだろう。

（二）　俗悪になった風景と「私」の表象

「江南游記」において、「私」はみすぼらしい風景を体験した他、「広告」や「煉瓦建」という近代的なキーワードで関連するもう一種の風景にも触れている。それは俗悪になった風景と命名できよう。「私」の「杭州」へ向かう汽車での体験がこう記される。

（前略）ふと窓の外を覗いて見ると、水に臨んだ家家の間に、高高と反つた石橋が

ある。水には両岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南画に出て来る船も、二三艘水際に繋いである。私は芽を吹いた柳の向うに、こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心持になつた。

（中略）

しかしその橋が隠れたと思ふと、今度は一面の桑畑の彼方に、広告だらけの城壁が見えた。古色蒼然たる城壁に、生生しいペンキの広告をするのは、現代支那の流行である。無敵牌牙粉、双嬰孩香烟、――さう云ふ歯磨や煙草の広告は、沿線到る所の停車場に、殆見えなかつたと云ふ事はない。支那は抑如何なる国から、かう云ふ広告術を学んで来たか？　その答を与へるものは、此処にも諸方に並び立つた、ライオン歯磨だの仁丹だのの、俗悪を極めた広告である。日本は実にこの点でも、隣邦の厚誼を尽したものらしい。

（二　車中（承前）　「江南游記」）

「私」は詩画のような「石橋」の景色を見かけると、「急に支那らしい心持になつた」とし、目の前の風景に没入した姿を見せる。「しかしその橋が隠れたと思ふと」、「古色蒼然たる城壁」に塗られた「生生しいペンキの広告」が目に映ってくる。いうまでもなく、この「ペンキ」や「広告」にまつわる風景は、前述の『大阪毎日新聞』の「社命」に評価される「新しき支那」に当たるものといえる。ところが、「私」はその「新」に繋がる「ペンキ」や「広告」を、「俗悪を極めた」ものと見なし、「日本は実にこの点でも、隣邦の厚誼を尽した」といったような風刺的な言い方で、「俗悪を極めた広告」を中国に齎したのは、日本だと証言する。「私」は、ここで中国に〈恩恵〉を齎した啓蒙者は日本と主張する「社命」と一線を画しているようにみえる。

同じような体験は、寒山寺に関する記述でも窺える。

主人。さうさね。下らんには違ひない。今の寒山寺は明治四十四年に、江蘇の巡撫程德全が、重建したと云ふ事だが、本堂と云はず、鐘楼と云はず、悉紅殻を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏鳴くどころの騒ぎぢやない。

（中略）

主人。まあ、幾分でも取り柄のあるのは、その取り柄のない所だね。何故と云へば寒山寺は、一番日本人には馴染の深い寺だ。誰でも江南へ遊んだものは、必寒山寺へ見物に出かける。唐詩選は知らない連中でも、張継の詩だけは知つてゐるからね。何でも程德全が重修したのも、一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表する為に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗悪にしたのは日本人にも責はあるかも知れない。

（中略）

主人。まだその上に面白いのは、張継の詩を刻んだ石碑が、あの寺には新旧二つある。

古い碑の書き手は文徴明、新しい碑の書き手は兪曲園だが、この昔の石碑を見ると、散散に字が缺かれてゐる。これを缺いたのは誰だと云ふと、寒山寺を愛する日本人ださうだ。

（十九　寒山寺と虎邱と　「江南游記」）

寒山寺の重建について、「江蘇の巡撫程德全が、重建したと云ふ事だが、本堂と云はず、鐘楼と云はず、悉紅殼を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏鳴くどころの騒ぎぢやない」ということで、寒山寺が「紅殼を塗り立てた」ことによって、「俗悪」になったことが示されている。そして重建の原因について、「何でも程德全が重修したのも、一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表する為に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗悪にしたのは日本人にも責はあるかも知れない」という文句を通して、「日本人」の「責」が指摘される。さらに、寒山寺の風情を描く「月落ち烏鳴く」という「張継」の「詩」を刻んだ、「散散に字が缺かれてゐ」る「古い碑」を缺いたのは、「寒山寺を愛する日本人ださうだ」という揶揄的な記述は、「俗悪を極めた」ものを齎した日本像のみでなく、破壊者としての日本像までも提供する。

この類の風景において、「私」は、日本を、〈恩恵〉を齎した啓蒙者と受け止めているというより、むしろ「俗悪を極めた」ものを齎した破壊者と見なしているといえるだろう。したがって、日本を〈恩恵〉を齎した啓蒙者とする「社命」とはやや擦れ違った「私」の立場がこれで提示されるのである。

もう一つ注目すべきなのは、寒山寺に「俗悪を極めた」ものを齎した日本を批判的に捉えた「十九　寒山寺と虎邱」においての記述である。この記述は、直接に「私」によって語られたものではなく、身分不明な「主人」と「客」による問答体の形で、その「主人」の語りによって提起されたものと確認できる。それは紛れもなく、日本を、〈恩恵〉を齎した啓蒙者と見なす「社命」からかけ離れた「私」が、自らの語りで「社命」に反することを避けるための、入念に用いた婉曲的な表現と思わざるをえない。

「俗悪」という言葉は、「広告」と「日本」のみでなく、「煉瓦」や「西洋」というキーワードにも関わっていく。西湖の記述に移ろう。

（前略）西湖は兎に角春寒を怯れる、支那美人の觀だけはある筈である。処がその支那美人は、湖岸至る所に建てられた、赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の為に、垂死の病根を与へられた。いや、独り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は殆大きい南京虫のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帯に蔓つた結果、悉風景を破壊しゐる。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だつたばかりか、女史の霊の為にも不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女狹の墓門にしては、如何にも気の毒に思はれたのである。しかもかう西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖

岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが醉払つてゐて、その又西洋館の前に、一人づつヤンキイが立小便してゐる、――と云ふやうな事にもなりさうである。

（七　西湖（二）　「江南游記」）

上記に示されたように、「支那美人」に喩えられた西湖に、「俗悪恐るべき煉瓦建の為に、垂死の病根を与へられた」ことが、「私」の語りによって明らかになっている。「悉風景を破壊しゐる」「煉瓦建」に不満を漏らした「私」は、「秋瑾女史の墓前」に辿りつくと、「この煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だつたばかりか、女史の霊の為にも不平だつ」た。そして、「「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女狭の墓門にしては、如何にも気の毒に思はれた」とする上で、「西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが醉払つてゐて、その又西洋館の前に、一人づつヤンキイが立小便してゐる、――と云ふやうな事にもなりさうである」としている。この記述は、「湖岸至る所に建てられた」「俗悪」にあたる「煉瓦建」が「西洋館」を指すと明言するとともに、「醉払つて」「立小便してゐる」ヤンキイも「俗悪」なものとしても取り上げている。それによって、西洋が齎した「新」に繋がる〈恩恵〉は、「私」にとって、「俗悪恐るべき」「垂死の病根を与へた」ものに過ぎないと提示されている。

前述したように、日本が齎した近代的な「広告」について、「私」は、「俗悪を極めた」ものと受け止める。そして、寒山寺を俗悪にした「責」が問われるべき、「張継」の詩を刻んだ詩碑を壊した日本に対して、「私」が、批判的な立場を示していると確認できる。同様に、西洋が齎した近代的な「俗悪恐るべき」「煉瓦建」の「西洋館」や、そこで「立小便してゐる」「ヤンキイ」やは、「私」にとって、「風景を破壊」する役割しか果たせない俗悪的なものに過ぎない。それに対し「私」は、「水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立」ったとするなど、鮮明に批判している。

ところで、日本を批判的に捉える記述については、前述のように、「私」によって直接に語られたものではなく、身分不明な「主人」と「客」という問答体の形で、「主人」の語りによって語られたのである。それは「私」が、日本を〈恩恵〉を齎した啓蒙者とする「社命」を配慮した上で、自らの語りで「社命」に反することを避けるための、入念に用いた婉曲的な表現と思わざるを得ない。その一方で、「私」の、西洋に対する批判は、日本への批判より明らかに直接的且つ強烈的である。それは恐らく、中国進出をめぐる欧米列強と覇権を争おうとし、西洋をライバルと見なす『大阪毎日新聞』の「社命」の枠の内で許されるものであるからであろう。

もう一つ注目されるのは、その類の風景と詩との関わりである。すでに触れたように、「月落ち烏鳴く」にせよ、「秋風秋雨愁殺人」にせよ、そのような昔の風景を彷彿する詩句は、日本と西洋から齎した「広告」や「煉瓦建」が代表した近代的な〈新〉によって、散々に破

壊されたことが、「江南游記」において確認できる。

(三)　「懐古」の詩興を生ずる風景と「私」の表象

上述の二種類の風景以外に、「私」が出会った三つ目の風景は、「懐古」の詩興を生ずる風景である。勿論その類の風景は、みすぼらしい風景と同様に、大阪毎日新聞社の「社命」に言及された「古き支那」に属すべきものと見なしてもよいだろう。

（前略）墓の前には筆太に、宋岳鄂王之墓と書いた、苔痕斑斑たる碑が立つてゐる。後の竹木の荒れたのも、岳飛の子孫でない我我には、詩趣こそ感ずるが、悲しい気はしない。私は墓のまはりを歩きながら、聊か懐古めいた心もちになつた。岳王墳上草萋萋――誰かにそんな句もあつたやうな気がする。が、これは孫引きではないから、誰の詩だつたか判然しない。

（七　西湖（二）　「江南游記」）

以上のように、「宋岳鄂王之墓」（稿者注：岳飛の墓）を訪れた際、「私」は「苔痕斑斑たる碑」や「荒れ」た「竹木」に対面すると、「懐古めいた心もちに」なる。しかし、「岳飛の子孫でない我我には、詩趣こそ感ずるが、悲しい気はしない」と語り、自分が「岳飛の子孫でない」外国人としての立場を強調すると同時に、中国と距離を置く態度を表明する。いわば、「新」を求める「社命」に従い、「古き支那」にあたる「懐古」の詩興を生ずる風景への同情をしない「私」の態度が読み取れるだろう。

ところが、「私」は、その態度を最後まで一貫することができず、結末に、「岳王墳上草萋萋」という詩句で、目の前の風景にある種の同情の意を漏らした。そこにはいうまでもなく、眼前の風景に耽った「私」の様子が浮き上がってくる。しかし、「私」が「誰の詩だつたか判然しない」と加え、他人の詩を用い（自分の詩でないことを強調するにもかかわらず、結果的に）「社命」と対立する「古き支那」にあたる「懐古」の詩興を生ずる風景に同情の態度を示している。ここに現れた「私」の「社命」に同調しない態度が、自分の詩ではなく、他人の詩という形で示されたのである。

同様の体験談は、その後の孔子廟の訪問でも描き出される。

「私」は廟前の「寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廃塔」を目にすると、「蒼茫万古の意」に沈む。そして廟に入ると、「荒廃」を感じずにはいられなかった。すると、「私」はこう語り出す。

（前略）この荒廃は、直に支那の荒廃ではないか？しかし少くとも遠来の私には、この荒廃があればこそ、懐古の詩興も生ずるのである。私は一体歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？――さう云ふ矛盾を感じながら、苔蒸した石橋を渡つた時、私の口には何時の間にか、こんな句がかすかに謳はれてゐた。「休言竟是人家国。我亦書生好感時。」

但しこの句の作者は私ぢやない。北京にゐる今関天彭氏である。

（十五　蘇州城内（下）　「江南游記」）

「私」が目の前の孔子廟の「荒廃」を、「支那の荒廃」とまで感じてしまう。そしてその「荒廃」から齎された「懐古の詩興」に対し、「遠来」の私は、「一体歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？」とするように、肌で感じた中国の「荒廃」に同情を払うべきか、それとも外国人として、目の当たりにした「荒廃」を楽しむべきかという「私」の矛盾と躊躇った姿が浮き彫りになっている。

結局「私」は、再び他人の詩（今関天彭の詩）を取り上げることで、自らの詩で直接に「古き支那」にあたる荒廃した風景を評価することを回避する。ここからは勿論、「社命」から乖離した自分の立場を隠そうとする「私」の意図が垣間見られる。しかし、「休言竟是人家国。我亦書生好感時」（注12）という一句に示された通り、「私」の、外人としてもどうしても、中国に対する感触を表したいという本音を吐露しているのではなかろうか。言い換えれば、『大阪毎日新聞』の「社命」に縛られた「私」は、実感した目の前の中国に対する自分の感触を直接に訴えようとする本音を、「今関天彭」の詩を通じて、発しているのではないだろうか。このように、「私」が他人の詩を意識的に持ちあげ、「社命」に対する不満を曲がりくねった形で示していくことになる。とはいうものの、最後にそれは「北京にゐる今関天彭氏」の詩と言い加えることを忘れず、自分の詩でないことを強調し（いわば、自分の本音を重ねた他人の「詩」と距離を置くことを通して）、「私」が「社命」を配慮したメッセージを送るような意図も読み窺えるのである。

第七節　詩を作れない「私」と詩を作れる芥川

前述に触れたように、「私」は詩を「古き支那」に評価を与える「社命」に反するものとして見なしたとすれば、如何なる詩興を生ずる風景に会ったとしても、当然詩を作るわけにはいかないだろう。テクスト「江南游記」において、「私」は如何にも詩興を感じたとしても、結局詩を一首も制作しなかったのである。確認していくと、霊隠寺の見物について、次のように記されている

霊隠寺に詣る。途中小石橋あり。橋下の水佩環を鳴らすが如し。両岸皆幽竹。雨を帯ぶるの翠色、殆人に媚ぶるに似たり。石谷の画境に近きもの乎。僕大いに詩興を催す。然れども旅嚢「圓機活法」なし。畢に一詩なき所以。ない方が仕合せかも知れない。

（十二　霊隠寺　「江南游記」）

「私」が、「霊隠寺」に至る途中で、如何にも「大いに詩興を催」しているにしても、「圓機活法」（注13）を持参しないという理由で、自ら詩の制作を断念するのである。ここに提

起された「圓機活法」は、やはり客観的な制限として、「私」に取り上げられたある種のメタファーと受け止めてもよかろう。換言すれば「私」は、「圓機活法」を借りて、「社命」に拘束された厳しい創作環境で、自分の感触を打ち出すことのできない苦境を喩えている可能性がある。そして、「ない方が仕合せかも知れない」という意味深な文句から、自分の感触を如実に表せなかったものの、「社命」違反を招く恐れがないというほっとした「私」の様子も、読み取れるのではないか。「江南游記」において、「圓機活法」のみでなく、大運河の詩情を破壊した「案内記」や孔子廟大成殿の詩境を壊した「蝙蝠」等は、「圓機活法」と同様に、「私」の創作上の制限と隠喩されているものと推測されよう。この意味でいうと、厳しい制限で作れなかった〈詩〉は、勿論自分の中国に対する思いを自由に述べられないものとしてのメタファーとも読み取れよう。

上述した通り「江南游記」において、「私」の、「古き支那」を評価する〈詩〉を制作しない姿勢は、「社命」を配慮する現れと看取できる。したがって、「私」が当然その意味を付与された〈詩〉を作るわけがない。

ところが、「古き支那」を評価する〈詩〉を制作しない点において、作家芥川龍之介とテクスト「江南游記」中の「私」とは、はっきりと一線を画している。〈詩〉の制作と無縁になった「江南游記」の「私」と異なり、芥川は西湖を訪問中、親友松岡譲への絵葉書（注14）で、西湖の「美し」さと「老酒」を褒めた他、自ら俳句を作ったのである。

五月二日　松岡譲　日本東京市牛込區早稲田南町七夏目様方　松岡譲様　（繪葉書）

杭州より一筆啓上、西湖は小規模ながら美しい所なりこの地の名産は老酒と美人、

春の夜や蘇小にとらす耳の垢

五月二日　芥川龍之介

当然、俳句は直ちに〈詩〉とはいえないものの、目の当たりにした風景を評価する意味において、詩と同じような役割が果たせるものと受け止めてもよかろう。それに、俳句はそもそも「日本独特の短詩」（注15）として知られていることで、風景を評価する〈詩〉を作ることができた作家芥川龍之介の真の人間像が、テクスト「江南游記」と異なり、鮮明に提供される。芥川は、江南旅行中の一九二一年の五月二日に、江南の風情を匂わせる俳句を親友の松岡譲に送る。

また、同江南旅行中、芥川は、杭州から一時的に上海に戻り、蘇州と南京へ出発する直前に、友人江口渙への絵葉書（注16）でも、旅愁を滲ませた俳句を残していく。

五月五日　江口渙　日本東京下谷區上野桜木町十七　江口渙宛　（繪葉書）

西湖から又上海へ歸つて来たもう上海も一月になる尤もその間二十日は病院にゐた今

日は蒸暑い雨降り、隣の部屋には支那の芸者が二人来て胡弓を引いたり唱ったりしてゐる二三日中には蘇州から南京の方へ行くつもりだ

燕や食ひのこしたる東坡肉　　五月五日　　我鬼

上述に示されたように、作家芥川は、現実の江南体験において、決して詩興に耽ったとしても詩を作ることができなかったというわけではない。とすると、「江南游記」における「詩」を制作しなかった「私」の姿は、「新しき支那」を求める「社命」への配慮を示すための、ある種の文学上の布置といってもよかろう。

ちなみに、「江南游記」における風景と詩の関係についての先行研究は、管見に入る限り、まだ数少ないようであるが、その中で、単援朝（注17）は、芥川の「唐詩の世界を現実の「支那」の風景の索引としようとする意識」を抉り出し、「眼前の風景が否定的に捉えられたのは、ただそれらが彼の胸中に根を下ろした唐詩の世界と重ならなかったためである」と指摘し、「「現代の支那」をめぐる芥川の捉え方に、詩文だの小説だの、文学によって構築された「支那」の夢に囚われ過ぎた一面があるといわねばならない」と主張している。稿者は補足として、芥川が意識的に詩を用いることによって、自己の中国に対する態度を打ち出す可能性を提示したい。

上述から分かるように、「江南游記」一巻に記された風景に、芥川は詩を用い、対中国の表象を付していく。それについてまとめると、みすぼらしい風景に対し、「私」はそれを評価した昔の詩（楊鉄崖の「段家橋頭猩色酒」と張承吉の「断橋荒蘚渋」等）を、風景の対極側に据えることによって、「古き支那」を見下ろした「社命」が中国に対するものと同じような態度を示している。

ところが、俗悪になった風景に触れた際、「私」は「月落ち烏鳴く」や「秋風秋雨愁殺人」等の詩句によって提起された中国昔の風景は、〈新〉に繋がる「広告」、「煉瓦建」等によって、破壊されたことを通じて、「社命」から乖離した態度を見せている。それだけでなく、日本と欧米列強の中国進出を批判的に捉えることで、「私」は中国に対してある程度の同情を示している。ところで、「私」の、西洋に対する批判は、日本への批判より明らかに直接的且つ強烈である。それは恐らく、前述の、中国進出をめぐる欧米列強と覇権を争おうとし、西洋をライバルと見なす「社命」の枠の内で許されるものということであろう。

さらに、詩興を生ずる風景に対し、「私は」「岳王墳上草萋萋」、「休言竟是人家国。我亦書生好感時」等の詩句を借り、中国への感傷と感慨を漏らした。こうした中国に対する感傷と感慨は、啓蒙者としての目線で「古き支那」を見下ろす「社命」と相容れるものではないといえるだろう。これで、「社命」から乖離した「私」の立場が再び確認できる。しかし、「私」は、こうした詩の「作者は私ぢやない」と強調することによって、中国への感傷と感慨を示した詩と距離を置く姿勢を示す。それによって、自らの詩で中国を評価するこ

とを回避することになる。いうまでもなく、「私」が、そこまで技巧を凝らし、用心深くしながら、繊細的な感情を滲ませる筆致自体は、大阪毎日新聞社の「社命」による拘束された創作環境の現れにほかならない。

注

1 鷺只雄編著『年表作家読本芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月　一一一～一一三頁）参照。

2 一九二一年一一月二四日、芥川の薄田泣菫宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第一九巻）岩波書店　一九九七年六月）　二一五頁。

3 一九二二年一月一三日、芥川の薄田泣菫宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第一九巻）岩波書店　一九九七年六月）　二二四頁。

4 一九二二年二月一〇日、芥川の薄田泣菫宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第一九巻）岩波書店　一九九七年六月）　二三三～二三四頁。

5 一九二二年二月一五日、芥川の薄田泣菫宛の書簡（年次推定）〔転載〕（『芥川龍之介全集』（第一九巻）　岩波書店　一九九七年六月）　二三四～二三五頁。

6 林姵君「芥川龍之介は中国旅行をどう語ったか――「上海游記」から「江南游記」への屈折――」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園和平文化研究所　二〇一五年三月）　二八頁。

7 「支那印象記　新人の眼に映じた新しき支那　近日紙上より掲載の筈」（『大阪毎日新聞』一九二一年三月三一日）。

8 例えば、青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学園大学紀要』（第一六集）一九八九年一二月）や西山康一〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」（『時代の中の異文化交流』　岡山大学文学部　二〇一一年三月）等である。

9 ラッセル「支那の第一印象（上）」（『大阪毎日新聞』一九二〇年一二月五日）。

10 ラッセル「支那の第一印象（下）」（『大阪毎日新聞』一九二〇年一二月六日）。

11 西山康一〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」（『時代の中の異文化交流』　岡山大学文学部　二〇一一年三月）　一一三頁。

12 「議論したってしょうがないよ。結局人の国じゃないか。私も勉強している身のうえだ。この世の中に感慨をいだくのもむりはなかろう」（「注釈」『芥川龍之介全集』（第六巻）（筑摩書房　一九七一年八月））　六八～六九頁。

13 円機詩学活法全書。詩学書。二四巻。中国明代の楊淙の著と伝えられる。天文、時令、地理など四四部門に分け、さらに叙事、事実など細分。作詩者のため編集された実用書。『日本国語大辞典』第二版　（第二巻）（小学館　二〇〇二年一月）　七三五頁。

14 一九二一年五月二日、芥川の松岡譲宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第一九巻）岩波書店　一九九七年六月）　一六七頁。

15 『日本国語大辞典』第二版（第一〇巻）（小学館　二〇〇二年三月）　九二九頁。

16 一九二一年五月五日、芥川の江口渙宛の書簡　（『芥川龍之介全集』（第一九巻）　岩波書店　一九九七年六月）　一六八頁。

17 単援朝　「芥川龍之介『支那游記』の世界―夢想と現実との間―」（『国語と国文学』（八一二）　一九九一年九月）　五五頁。

第三章　「長江」に見られる日本へのまなざし
――関東大震災に繋がる『女性』の編集方針との関わり――

第一節　芥川の長江体験と「長江」

一九二一年に特派員として大阪毎日新聞社から中国に派遣された芥川龍之介は、江南訪問中体調を崩したため、訪問日程を見送り、四月「一四日」に、南京から上海に戻り、そして一五日に「里見病院」で診察を受けた。診断の結果、異常のないことを踏まえ、芥川は「一六日」の夜、鳳陽丸で「蕪湖に向け出発」し長江の旅を迎えた。

芥川は、「一九日、蕪湖に着き、西村貞吉の社宅に泊まる」。「二二日、九江に着き、日本人経営するホテル大元洋行に泊まる。蕪湖から九江までは南陽丸に乗り、日本画家の竹内栖鳳らと一緒になり、その息子逸とは特に懇意になった」。「二三日、竹内氏一行と駕籠で廬山に登り、午後一時頃山頂の大元洋行支店に着く」。「二四日、朝、廬山を発ち、九江から大安丸で漢口に向う」。「二六日頃、漢口到着。租界の武林洋行の宇都宮五郎に案内してもらう。漢口で黄鶴楼の跡、古琴台（伯牙と鐘子期の「知音」の故事の舞台）などを観る」。「三〇日、漢口から洞庭湖を経て長沙に行く」。「六月一日、長沙から漢口にもどる。中国の三大ストーブといわれる有名な漢口の暑さに辟易して里心がつく。予定では三峡や西安に赴くはずであったが、変更して洛陽の遺跡、龍門の石窟を見て北京に向うこととする」。「六日、夜、漢口から洛陽に向う」ことで、長江体験を終えた（注1）。

長江体験を記述するテクストは、早くも一九二二年三月に執筆し始められた（注2）にもかかわらず、種々の原因（注3）に伴い難産となり、芥川の帰国した三年後の一九二四年に、ようやく「長江」という題名で雑誌『女性』（一九二四年九月号）に掲載され、そして翌年「長江游記」の題で『支那游記』（改造社　一九二五年一〇月）に収められたのである。

図二　『女性』（一九二四年九月号）の目次

第二節　〈小説〉として掲載された「長江」

（一）〈小説〉的性格を匂わせる「長江」の冒頭部

「長江」（「長江游記」）については、管見の限り、まだ専門的研究論文に論じられていないようであるが、芥川の長江体験を概観する際、先行研究は往々初出の「長江」ではなく、「長江游記」を取り上げ、それを「紀行」（注４）や「紀行文」（注５）と捉えている。ところが、初出雑誌『女性』について調べたところ、「長江」は当初『女性』（一九二四年九月号）の創作欄に置かれ、〈小説〉として掲載されたことが確認できた。いわば、初出としての「長江」は〈紀行文〉としてではなく、〈小説〉として載せられたものなのである。

「長江（小説）」は題名だけでなく、テクストそのものにおいても、〈小説〉的な性格が感じられる。「長江」の冒頭で「私」はこう吐露する。

これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である。かう云ふ目まぐるしい世の中に、三年前の紀行なぞは誰にも興味を与へないかも知れない。が、人生を行旅とすれば、畢竟あらゆる追憶は数年前の紀行である。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懐しがつてゐた。しかし今は日本に、――炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懐しがつてゐる。長江を？――いや、長江ばかりではない、蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懐しがつてゐる。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この私の追憶癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

（冒頭　「長江」）

「私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか」という記述からは、「私」が「長江」を、「堀川保吉」を主人公とする「保吉もの」と同様な読み方で読んでほしいと示唆していることが窺われる。周知の通り、「「保吉」（稿者注：「堀川保吉」のこと）とは、「大正五年（一九一六年）一二月から八（一九一九）年三月までの二年余の間、横須賀海軍機関学校の英語の嘱託教官を務めた芥川の分身であり、「保吉もの」は、もちろん保吉が登場する短編小説群の総称」（注６）である。「堀川保吉」を主人公とする「保吉もの」は、小説として引き合いに出されていると理解できる。

こうして「長江」の冒頭部において、芥川は、自分の実体験をベースに作った小説の主人公の「堀川保吉」を通して、「長江」が「三年前の紀行」をベースに創作された〈小説〉的なものなのだと読者（「愛読者諸君」）に示した可能性がある。

さらに検証を進めていくと、すでに先行研究（注７）の指摘がある通り、「堀川保吉」を主人公とする「保吉もの」の嚆矢である「魚河岸」（『婦人公論』一九二二年八月）は、「初

出時には随筆として発表されている」。そして、「初出冒頭には「この話は小説ではない。実際にあつた話」とあるように、主人公は当初「保吉」ではなく、「わたし」として表記されていた。ところが、その後「魚河岸」が芥川の第七短編集『黄雀風』（新潮社　一九二四年七月）に収載された時、「わたし」が「保吉」と改められた。それをきっかけに、「一気に随筆から小説へと転位した」と見なされている。「長江」冒頭部で提起された「堀川保吉」は、上述の〈保吉もの〉の〈随筆〉から〈小説〉への転位を併せ考えると、「長江」の〈紀行文〉から〈小説〉的な作品への転位を示唆するようにみえる。

（二）〈小説〉的性格を匂わせる「長江」の本文

「長江」の本文においても、〈小説〉的性格を滲ませるエピソードを確認することができる。「私」と、自分を「蕪湖」に招いた中国滞在中の親友である西村貞吉との蕪湖についての対談は、次のように記される。

「つまらない所だな、蕪湖と云うのは。――いや一蕪湖ばかりじゃないね。おれはもう支那には飽き厭きしてしまった。」

「お前は一体コシャマクレテいるからな。支那は性に合わないのかも知れない。」

西村は横文字は知っていても、日本語は甚未熟である。「こましゃくれる」を「コシャマクレル」、鶏冠とさかを「トカサ」、懐を「フトロコ」、「がむしゃら」を「ガラムシャ」――その外日本語を間違える事は殆挙げて数えるのに堪えない。私は西村に日本語を教えにわざわざ渡来した次第でもないから、仏頂面をして見せたぎり、何とも答えず歩き続けた。

（一　蕪湖　「長江」）

「日本語は甚未熟」で、「日本語を間違える事は殆挙げて数えるのに堪えない」と揶揄された西村貞吉は、芥川の「府立三中時代」からの「生涯の友の一人」であり、「東京外国語学校」を卒業した後、「中国に渡」った人物である（注8）。

芥川は、中国旅行を終えた三ヶ月後の一九二一年一〇月一〇日付、西村貞吉宛書簡（注9）の中で、西村の言語力について、「お前の文章をよんだどうも難有うあれは中々うまい御世辞でも何でもなく中々うまいお前は新聞記者になつても飯が食へるちよいと感服した」と称えている。さらに翌年の一九二二年五月に芥川が西村に送った絵葉書（注10）も、「句も歌も」承知するような西村の人物像を描き出す。「長崎へ来たちよいと上海へ行きたくてならぬ四十起（注11）などには句も歌もわからんまだ君は日本へ来ないか、蕪湖はもう暑からうな、こゝも暑い浴衣でも好い位だ蝉に似た君の顔を思ふ」。この西村について調べたところ、彼の自ら書いた文章（注12）を捜し出すことができた。芥川の死を追悼する文章であり、西村の持つ日本語能力を鮮明に証し立てる資料でもある。

我が許に残れる龍之介の書簡十四、十六才の頃のものより臨終前一箇月最後の手紙に到る前後凡そ二十年に亘れり。少年時代のもの多く散逸し尽せるが中に、我が幼き頃のアルバムに残れる絵はがき便りのみ、僅かに散逸を免れぬ。

ここには、「日本語は甚未熟」であるとは決して言えない西村の実像が紛れもなく示されている。「日本語を間違える事は殆挙げて数えるのに堪えない」人物として提起された「長江」中の西村貞吉は、〈紀行文〉の範疇を超えた小説らしい虚構的な布置として理解することが可能である。

第三節　「長江」が〈小説〉として掲載された原因と『女性』の編集方針

「長江」が〈紀行文〉としてではなく〈小説〉として掲載された原因については、『女性』一九二四年九月号の「編輯後記」によって明らかになる。その作業に入る前に、まず雑誌『女性』の性格について確認したい。

（一）　雑誌『女性』の性格

雑誌『女性』は、一九二二年五月に、クラブ化粧品本舗中山太陽堂が創めたプラトン社によって創刊され、もともと中山太陽堂のクラブ化粧品のPR誌として販売された。後に「女性向け」の総合文芸雑誌にまで発展を成し遂げる。その誌面においては、自然主義・反自然主義の既成作家から大衆文学まで幅広い作品が取り込まれている。また、多くの評論・随筆も掲載されている。一定の立場に固執するのではなく、多角的に論及するのが『女性』のスタイルである。それのみならず、文学以外の演劇、音楽、舞踊、美術論などにも編集の目が行き届いていた。『女性』は関東大震災以降、文芸誌としての重みを増す。震災による東京の出版社の壊滅後は有力作家の関西移住も目立ち、彼らが「プラトン社を頼って」『女性』誌上に結集することで、関西発の『女性』が震災後の文壇をリードした（注13）とされる。

（二）　『女性』一九二四年九月号の編集方針と「長江」

『女性』一九二四年九月号の「編輯後記」は、「長江」を含む九月号の編集方針について、次（注14）のように示す。

恐ろしい暑さだ。人を気違ひにするやうな暑さだ。水が降らぬ。田が枯れる。その中で国難来の声が揚がる。奢侈品防止の警鐘が鳴らされる。大震大火災の記念日が近づく。不安と焦燥と恐怖との夏だ。

併し、それを救つてくれるものが唯一ある。それは文学だ。天日が如何に土を焼いても、生活が如何に脅されても、文学は落ちついてゐる。文学は静かに情緒の琴線を鳴らしてゐる。涼しい音楽だ。静かな歌だ。

開巻先づ芥川龍之介氏の「長江」を読み給へ。諸君の頭脳はこの明徹な筆によつて忽ち秩序を回復するであらう。長田秀雄氏の「お七吉三」は火のやうな恋愛を氷のやうな理性で批判したものである。加能作次郎氏の「幼女たち」室生犀星氏の「笛吹く人」これらの詩の世界は、必ず諸君の焦燥と不安とを取り除かずには置かないだらう。

（中略）

九月号を編輯して私共は救はれたやうな気がした。読者諸氏もこの雑誌を手にせられて同じ感じを抱かれるに相違ない。

「編輯後記」に示された「大震大火災」とは、一九二三年九月一日に発生した「関東大震災」（注15）のことと理解される。『女性』一九二四年九月号は、関東大震災を強く意識した上で、震災一周年の記念号的色彩が担わされているように思える。「編集後記」の文言からは、「情緒の琴線を鳴らしてゐる」「文学」を以て、「大震大火災の記念日が近づく」「不安と焦燥と恐怖との夏」を救おうとする『女性』の編集方針が読み取れる。ここで「唯一」の「救つてくれるもの」として提起される「文学」は、人間の「焦燥と不安」を「取り除」く役割を担うものとされている。こうした文学の役割については、様々な議論がありうるが、「長江」が発表された一九二〇年代の日本において、文学の役割が世間にどのように受け止められていたのかについて確認する作業を試みたい。

文学は人生を鼓舞するものでなくてはならぬ。人生の活動を盛んならしめ、之れを味う人に天来の声を聞かしめ、神霊の感興を与へるものでなくてはならぬ。文学は人の情緒を動かし、動された情緒がやがて活動となり、人生の行路は茲に一面を拓く。（注16）

世間には、文学を味つたり、芸術を研究したりすることを以て、閑人の閑事業のやうに考へてゐる人が往々ある。しかし仮りに、文学芸術の研究が閑人の閑事業であるならば、吾々は、これを真面目に研究する必要は無いのである。が文学芸術は決して、そんな閑人の閑事業ではない。人生に取つて最も重大な必要品の第一である。

文学芸術の研究の目的は、その細かい点については、各人に依つて異なるであらうが、それの万人に取つて必要である第一の理由は、吾々の生活を深化し、吾々の生活意志を一層強固にして、吾々をして生き甲斐ある幸福感を味はせることにある。（注17）

上述の一九二〇年代における文学論的著作に記されたように、「世間には、文学を味つたり、芸術を研究したりすることを以て、閑人の閑事業のやうに考へてゐる人が往々ある」とされる一方で、「文学は人生を鼓舞するもの」として、「人の情緒を動かし、動された情緒がやがて活動となり、人生の行路は茲に一面を拓く」と評価する立場が示される。そして、「文学芸術は決して、そんな閑人の閑事業ではない。人生に取つて最も重大な必要品の

第一であ」り、「吾々の生活を深化し、吾々の生活意志を一層強固にして、吾々をして生き甲斐ある幸福感を味はせる」ものとして受け止められている。前出の「編集後記」に示された、「大震大火災の記念日が近づく」「不安と焦燥と恐怖との夏」を「情緒の琴線を鳴らしてゐる」「救つてくれる」文学の役割は、当時の文学論的著作に記された文学の役割に繋がっているものとして理解される。震災の苦難と恐怖から人々を救うものとして位置づけられた文学の役割は、『女性』も含めて、当時のジャーナリズムや一般的な人々の思いに重なり合うものであったと想像される。

こうした救済としての「文学」の役割を宣揚する『女性』（一九二四年九月号）の創作欄において、「長江（小説）」、「お七吉三（戯曲）」、「幼女たち（小説）」、「笛吹く人（小説）」、「輪廻（長篇小説）」等五本の作品が組まれている。その創作欄の最初に置かれた、『女性』九月号の巻頭文章としての「長江」は、文学を以て関東大震災の恐怖から救おうとする『女性』の編集方針を担うものであったと理解される。ここで考えてみたいのは、「長江」が〈小説〉としてどのように『女性』の編集方針を担い得たか、ということである。それを解明するに先立って、当時の小説と文学との関わり、言い換えるならば、小説は文学ジャンルにおいてどのような地位を占めていたのかという問題について考察する必要がある。

明治の文芸復興期に於ても、その最も著大な収穫は小説である。維新の革命が文芸上の新作物を生むに至つたのは明治が約二十年も歩んだ頃で、精神上の仕事はいつもそれだけ遅れて結果する。明治十八年坪内逍遥博士（一八六六―）の『小説神髄』が出で、その所論の見本たる『当世書生気質』が現はれたのが、新日本の文壇の暁鐘であつた。それまでは誠に粗雑な旧時代の人情本の模倣か、さなくば西洋小説の翻案が、僅に世の需要を充たしてゐたに過ぎなかつたが、此頃よりして次第に新時代は開展し始めた。（注18）

（前略）小説が戯曲その他人間生活を取扱ふ他種の文学に取つて代り、現代の如く複雑にして多角的な世界に於ける最高位にある文学的形式としての地位を確立した（後略）。（注19）

小説（Novel）は、近代において最も多く読まれてゐる文学である。ウィンチェスタアは、小説を以て一般の人に共通してゐる想像と、巧妙な文学的技術とを発揮する上に、最も好都合な手段であり、且つ、近代の民主的社会の中流階級の知識と読書的習慣に適合した文学上の形式であると云ひ、更に、近代における小説の隆盛は、十八世紀初期までは、見ることを得ない現象であつて、近代社会における小説の位置は、正に演劇に取つて代わつたものであると云つてゐる。（注20）

（前略）小説が近代に於て演劇に取つて代つたといふことは多くの人々の説の一致

する所である。演劇といふことは舞台を必要とするものであるから、どうしても都会を中心とする傾向がある。所が、近頃は知識が増進して、書物を読む者が都会以外の中流階級にも増加して来たから、舞台などに必ずしも拘束せられない自由な小説が広く行はれるやうになり、演劇の位置を取つたものと見ることが出来る。（注21）

これらの文学論的著作から分かるように、一九二〇年代当時、小説は「明治の文芸復興期」を経て、戯曲、演劇等を抜いて、「最高位にある文学的形式としての地位を確立」し、「一般の人に共通してゐる想像と、巧妙な文学的技術とを発揮する上に、最も好都合な手段」としても認められていた。そこからは、小説は当時、文学を代表する存在であったといっても過言ではないだろう。芥川は小説の役割について、「あらゆる文芸の形式中、小説ほど一時代の生活を表現出来るものはない」（注22）と認めている。ちなみに、小説の他、戯曲や詩歌などの文学ジャンルは当時の文学書において重点的に取扱われ、紹介されているが、これに対して、紀行文は殆ど取り扱われていなかったことが確認できる。一九二〇年代当時、紀行文は小説、戯曲のようには重要視されていなかったといえるだろう（注23）。

このような事実を踏まえて、再び「長江」に目を向けると、「長江」は〈紀行文〉としてではなく、〈小説〉として編集・掲載されたと理解する方が、『女性』の編集方針に見られる、関東大震災から人間の「焦燥と不安」を救おうとする文学の役割に合致するのではないかと考えられるのである。

結局、「長江」については、「上海游記」「江南游記」の先行作が用いた、〈紀行文〉を感じさせる「游記」の命名が捨象され、「長江（小説）」へと収斂することになったのである。こうした事情は、上述の『女性』の編集方針と無関係ではないと推測できる。

第四節　関東大震災による芥川の芸術への再考と「長江」

「長江」が〈小説〉として掲載された事実は、関東大震災を意識した『女性』の編集方針の反映であると同時に、震災の発生に端を発した、芥川の芸術に対する再考とも関わっているように見える。関東大震災による文学界への打撃について、篠崎美生子（注24）は以下のように指摘している。

震災直後一九二三年九月二二日の東京朝日新聞には「維新当時より凡て物事が順調に進み日清日露の戦捷に国民は奢りに走り国を挙げて享楽に傾いた結果天が処罰を与へたのである」とする渋沢栄一の談話が掲載されている。当時財政界の最有力者の一人であった渋沢がその後も繰り返し述べたこの「震災＝天譴」説は、「国民精神作興ニ関スル詔書」（一九二三・一一・一〇）を以て、奢侈を戒め思想統制を強化しようとした政府方針の拠り所ともなった。（後略）

関東大震災は、「芸術家」を自認する者にとっては「芸術」の価値の再考を迫る大きな事件であったようだ。各誌が震災直後の十、十一月に出した震災特集号には、自然

の脅威と文明や芸術の無力を唱える悲観的な文書が軒を連ねている。

篠崎の指摘した、奢侈を戒め思想統制を強化しようとした日本政府の姿勢は、「奢侈品防止の警鐘が鳴らされる」とした前述の「編輯後記」においても確認できる。「各誌が震災直後の十、十一月に出した震災特集号には、自然の脅威と文明や芸術の無力を唱える悲観的な文書が軒を連ねてい」たという背景の中で、芥川（注25）は異議を唱える。

日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめし境遇の惨は恐るべし。されど鶴と家鴨とを、――否、人肉を食ひしにもせよ、食ひしことは恐るるに足らず。自然は人間に冷淡なればなり。人間の中なる自然も亦人間の中なる人間に愛憐を垂るることなければなり。鶴と家鴨とを食へるが故に、東京市民を獣心なりと云ふは、――惹いては一切人間を禽獣と選ぶことなしと云ふは、畢寛意気地なきセンティメンタリズムのみ。

自然は人間に冷淡なり。されど人間なるが故に、人間たる事実を軽蔑すべからず。人間たる尊厳を抛棄すべからず。人肉を食はずんば生き難しとせよ。汝とともに人肉を食はん。人肉を食うて腹鼓然たらば、汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後に尚余力あらば、風景を愛し、芸術を愛し、万般の学問を愛すべし。

芥川は自然については、「自然は人間に冷淡なり」と認識し、「脅威」としてまでは明言していない。おまけに、「人肉を食うて腹鼓然たらば、汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後に尚余力あらば、風景を愛し、芸術を愛し、万般の学問を愛すべし」とすることで、所謂「自然の脅威」を理性的に捉えているようである。こうして「自然」を凝視している芥川は、芸術について次（注26）のような認識を示す。

芸術は生活の過剰ださうである。成程さうも思はれぬことはない。しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の過剰である。僕等は人間たる尊厳の為に生活の過剰を作らなければならぬ。更に又巧みにその過剰を大いなる花束に仕上げねばならぬ。生活に過剰をあらしめるとは生活を豊富にすることである。

自らの考えを直叙するのみならず、「妄問妄答」の中で芥川は問答体を設けて主人の言葉を借り、芸術について以下（注27）のように評する。

客　ぢや我我の芸術的衝動はああ云ふ大変に出合つたが最後、全部なくなつてしまふと云ふのかね？

主人　そりや全部はなくならないね。現に遭難民の話を聞いて見給へ。思ひの外芸術

的なものも沢山あるから。――元来芸術的に表現される為にはまづ一応芸術的に印象されてゐなければならない筈だらう。するとさう云ふ連中は知らず識らず芸術的に心を働かせて来た訳だね。

客　（反語的に）しかしさう云ふ連中も頭に火でもついた日にや、やつぱり芸術的衝動を失ふことになるだらうね？

主人　さあ、さうとも限らないね。無意識の芸術的衝動だけは案外生死の瀬戸際にも最後の飛躍をするものだからね？　辞世の歌で思ひ出したが、昔の侍の討死などは大抵戯曲的或は俳優的衝動の――つまり俗に云ふ芝居気の表はれたものとも見られさうぢやないか？

（中略）

客　ぢや芸術は人生にさ程痛切なものぢやないと云ふのかね？

主人　莫迦を云ひ給へ。芸術的衝動は無意識の裡にも我我を動かしてゐると云つたぢやないか？　さうすりや芸術は人生の底へ一面に深い根を張つてゐるんだ。――と云ふよりも寧ろ人生は芸術の芽に満ちた苗床なんだ。

客　すると「玉は砕けず」かね？

主人　玉は――さうさね。玉は或は砕けるかも知れない。しかし石は砕けないね。芸術家は或は亡びるかも知れない。しかしいつか知らず識らず芸術的衝動に支配される熊さんや八さんは亡びないね。

芥川にとって、芸術は「人間たる尊厳の為」に「作らなければならぬ」ようなものである。大災害に遭遇した際、人間には芸術を顧慮する余裕がないかもしれない。しかしながら、「芸術的衝動は無意識の裡にも」存在しながら、「我我を動かしてゐる」。これを踏まえて芥川は、「人生は芸術の芽に満ちた苗床」とし、「芸術は人生の底へ一面に深い根を張り、「亡びない」ものとまで認識している。ここには、関東大震災から齎された、人生の深処に根拠を持つ芸術を堅持しようとする芥川の創作理念が窺われるのではないだろうか。

こうした中で再び「長江」に目を向けると、関東大震災の一周年記念の色彩を帯びつつ、〈小説〉として組まれた「長江」は、文学を以て震災の恐怖から人間を救おうとする『女性』の編集方針を表わすとともに、震災によって「自然の脅威と文明や芸術の無力」を思い知らされつつも、「人間たる尊厳の為に」芸術を「作らなければならぬ」とする芥川自らの芸術への思いを投影した作品としても理解される。実際、こういう芥川の芸術への思いが、震災の恐怖や不安を忘れさせる「追憶」へと向かっていくのである。

第五節　「長江」と関東大震災

芥川は関東大震災の発生した翌月に発表した「廃都東京」（注28）において、東京への思いを次のように記す。

（前略）僕はこんなにならぬ前の東京を思ひ出した為であります。しかし大いに東京を惜しんだと云ふ訣ぢやありません。僕はこんなにならぬ前の東京に余り愛惜を持たずにゐました。と云つても僕を江戸趣味の徒と速断してはいけません、僕は知りもせぬ江戸の昔に依依恋恋とする為には余りに散文的に出来ているのですから。僕の愛する東京は僕自身の見た東京、僕自身の歩いた東京なのです。銀座に柳の植つてゐた、汁粉屋の代りにカフェの殖えない、もつと一体に落ち着いてゐた、（中略）云はば麦稗帽はかぶつてゐても、薄羽織を着てゐた東京なのです。その東京はもう消え失せたのですから、同じ東京とは云ふものの、何処か折り合へない感じを与へられてゐました。それが今焦土に変つたのです。僕はこの急劇な変化の前に俗悪な東京を思ひ出しました。が、俗悪な東京を惜しむ気もちは、――いや、丸の内の焼け跡を歩いた時には惜しむ気もちにならなかつたにしろ、今は惜しんでゐるのかも知れません。どうもその辺はぼんやりしてゐます。僕はもう俗悪な東京にいつか追憶の美しさをつけ加へてゐるやうな気がしますから。

この文章において、芥川は関東大震災をきっかけとして「俗悪な東京」に「追憶の美しさをつけ加へ」るようになり、東京への思いが好意的になったと述べている。同様に、芥川が強く批判した長江に「追憶」を付け加えるようになり、長江への思いが好意的になった、ということも確認できる。実体験としての長江の旅に対する「私」の「痛烈な批判」（注29）は、次のように語られている。

現代の支那に何があるか？　政治、学問、経済、芸術、悉堕落しているではないか？　殊に芸術となった日には、嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？　しかも国民は老若を問わず、太平楽ばかり唱えている。成程若い国民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の声と雖いえども、全国民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事実である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なお且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリストか、浅薄なる支那趣味の惚恍者であろう。いや、支那人自身にしても、心さえ昏んでいないとすれば、我々一介の旅客よりも、もっと嫌悪に堪えない筈である。……

（一　蕪湖　「長江」）

若葉を吐いた立ち木の枝に豚の死骸がぶら下っている。それも皮を剥いだ儘、後足を上にぶら下っている。脂肪に蔽われた豚の体は気味の悪い程まっ白である。私はそれを眺めながら、一体豚を逆吊りにして、何が面白いのだろうと考えた。吊下げる支那人も悪趣味なら、吊下げられる豚も間が抜けている。所詮支那程下らない国は何処にもあるまいと考えた。

ところが、こうした実体験に即した「痛烈な批判」は、「長江」冒頭部において以下のように、好意的な方向へと導かれていることに注意を払うべきである。

これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である。かう云ふ目まぐるしい世の中に、三年前の紀行なぞは誰にも興味を与へないかも知れない。が、人生を行旅とすれば、畢竟あらゆる追憶は数年前の紀行である。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懐しがつてゐた。しかし今は日本に、――炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懐しがつてゐる。長江を？――いや、長江ばかりではない、蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懐しがつてゐる。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この私の追憶癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

（冒頭　「長江」）

ここで「私」は、三年前に「嫌悪に堪えな」かった長江を批判し、「日本を懐しがつてゐた」にもかかわらず、今日本にいると、長江を「懐しがつて」好意的になってきたと述べている。時の経過に伴い、長江に対する「私」の認識が変化していったことが浮き彫りになっている。こうした「私」の認識の変化は、前述の「廃都東京」に記された芥川の東京に対する認識の変化と、まるで同じ一つのわだちから出たようなものであるといってもよい。実際のところ、「長江」は、「廃都東京」と同様に関東大震災と関連を有しているかもしれない。「私は長江を溯つた時、絶えず日本を懐しがつてゐた。しかし今は日本に、――炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懐しがつてゐる」とする一文は、三年前に体験した涼しさを匂わせる「汪洋たる長江」を想起することによって、震災から一年を経た東京の「炎暑の甚し」さを乗り越えようとする今の「私」の姿を浮かび上がらせる。こういった「私」の姿は、読者「諸君の頭脳」がこの「長江」の「明徹な筆によつて忽ち秩序を回復するであらう」と主張する『女性』の、関東大震災の記念日に答えようとする編集方針と一致しているようにみえる。

そもそも関東大震災の恐怖、不安を忘れさせる機能を持つものとして、芥川は「廃都東京」において、「美しさ」を挙げ、その「美しさ」を生成する装置として、「追憶」を位置づける。再び震災を思い起こさせる季節の中で、芥川は「長江」においても同じような手法を用い、「追憶」を以て、「嫌悪に堪えな」かった現実の長江への思いを克服したと示唆しているようである。ここで提起された「追憶」という装置は、いうまでもなく一種の文学的手法である。こうした「追憶」は、長江を批判した三年前の「私」と、「長江を懐しが

ってゐる」「今」の「私」とに引き裂かれた主体の在り方を、鮮明かつ対照的に提示する。

「長江」に記された在中日本人の振る舞いを例に挙げるならば、「私」が中国に溶け込んだ在中日本人の中国への思いを「第二の愛郷心」（注30）として揶揄することに注目したい。「白楽天と云う名前をハクラクと縮めて」呼ぶ大元洋行の主人を始めとする在中日本人に対し、「私」は次のように語る。

「香炉峰と云うのも二つありますがね。こっちのは李白の香炉峰、あっちのは白楽天の香炉峰――このハクラクの香炉峰ってやつは松一本ない禿山でがす。……」

大体こう云う調子である。が、それはまだしも好い。いや、香炉峰の二つあるのなどは寧ろ我々には便利である。一つしかないものを二つにするのは特許権を無視した罪悪かも知れない。しかし既に二つあるものは、たとい三つにしたにもせよ、不法行為にはならない筈である。だから私は向うに見える山を忽「私の香炉峰」にした。けれども主人は雄弁以外に、廬山を見ること恋人の如き、熱烈なる愛着を蓄えている。

「この廬山って山はですね。五老峰とか、三畳泉とか、古来名所の多い山でがす。まあ、御見物なさるんなら、いくら短くっても一週間、それから十日って所でがしょう。その先は一月でも半年でも、――尤も冬は虎も出ますが……」

こう云う「第二の愛郷心」はこの主人に限ったことじゃない。支那に在留する日本人は悉ふんだんに持ち合わせている。苟も支那を旅行するのに愉快ならんことを期する士人は土匪に遇う危険は犯すにしても、彼等の「第二の愛郷心」だけは尊重するように努めなければならぬ。上海の大馬路はパリのようである。北京の文華殿にもルウブルのように、贋物の画などは一枚もない。――と云うように感服していなければならぬ。（後略）

（中略）

主人の言葉に従えば、クウリンの町は此処を距ること、ほんの一跨ぎだと云うことである。しかし実際歩いて見ると、一跨ぎや二跨ぎ所の騒ぎではない。路は山笹の茂つた中に何処までもうねうね登つてゐる。私はいつかヘルメットの下に汗の滴るのを感じながら、愈天下の名山に対する憤慨の念を新たにし出した。名山、名画、名人、名文――あらゆる「名」の字のついたものは、自我を重んずる我々を、伝統の奴隷にするものである。未来派の画家は大胆にも古典的作品を破壊せよと云つた。古典的作品を破壊する次手に、廬山もダイナマイトの火に吹き飛ばすが好い。……

（四　廬山（下）　「長江」）

ここには、中国に溶け込んだ在中日本人に違和感を示し、彼らの持つ中国への「第二の愛郷心」をさりげなく揶揄する「私」の姿がありありと示されている（注31）。しかしながら、こうした在中日本人を揶揄した記事に見られる「私」の中国批判が、「追憶」によって好意的になっていることは看過してはならない。いわば、現実には「嫌悪に堪えな」かっ

たはずの長江の旅に、「追憶」によって、「美しさ」がつけ加えられているのである。そのことによって、「三年」前の「私」の長江の旅を批判した姿と、「今」「長江を懐しがつてゐる」「私」の姿との断絶と分裂が、より一層強烈かつ対照的に提示されるという仕組みである。

ここで再び、第二節で触れた西村貞吉のエピソードについて振り返ってみよう。

「つまらない所だな、蕪湖と云うのは。――いや一蕪湖ばかりじゃないね。おれはもう支那には飽き厭きしてしまった。」

「お前は一体コシャマクレテいるからな。支那は性に合わないのかも知れない。」

西村は横文字は知っていても、日本語は甚未熟である。「こましゃくれる」を「コシャマクレル」、鶏冠とさかを「トカサ」、懐を「フトロコ」、「がむしゃら」を「ガラムシャ」――その外日本語を間違える事は殆挙げて数えるのに堪えない。私は西村に日本語を教えにわざわざ渡来した次第でもないから、仏頂面をして見せたぎり、何とも答えず歩き続けた。

（一　蕪湖　「長江」）

「日本語を間違える事は殆挙げて数えるのに堪えない」「支那は性に合」う西村の人物像は、すでに触れたように、優れた日本語能力を持つ西村貞吉の実像とは異なり、「長江」の小説性、虚構性を窺わせるエピソードとして位置づけられてよい。

こうして人物造形に虚構化が図られたことによって、西村は中国に溶け込んだような在中日本人の範疇に置かれることになる。このような操作を経た後に、大元洋行の主人に西村を加えて揶揄を繰り返し、両者に相次いで批判的砲火を浴びせていく「私」の姿が浮上してくるのである。こうした中で、長江の旅を批判した「三年」前の「私」の姿と、「今」「長江を懐しがつてゐる」「私」の姿との分裂と断絶が、より一層対照的に提示されてくることになる。

したがって時の経過に伴い、「嫌悪に堪えな」かった長江に自らの「追憶」を付け加えることで、長江への思いが好意的になったと提示した「私」の、関東大震災を経験した人々に、同様な「追憶」を以て、大震災の恐怖と不安を乗り越えられるとアピールする姿が浮上してくる。こうした「長江」に見られる「私」の姿は、まさに文学の力で人々を関東大震災の恐怖と不安から救おうとする『女性』の編集方針と呼応するものといえるだろう。

「長江」は芥川が一九二一年四月の長江体験を記述したテクストである。当初「長江游記」として『大阪毎日新聞』に掲載する予定（注32）であったが、結局、中国体験を終えた三年後の一九二四年九月に、〈小説〉として『女性』に掲載された。〈紀行文〉を感じさせる「游記」の命名が捨象されたことは、関東大震災を記念しようとする『女性』の編集方針と無関係ではないと推測できる。

前年の関東大震災は、「人間たる尊厳の為に」芸術を「作らなければならぬ」とする芸術

への思いを芥川が固める契機となった。こうした芥川の芸術への思いが、「長江」において、震災の恐怖や不安を忘れさせる「追憶」へと向かっていく。「長江」の中で、芥川は「追憶」という言葉を使い、読者にその「追憶」に付き合うことを求める。その意味において、「長江」は結果的に、関東大震災一周年記念としての性格を帯びた『女性』（一九二四年九月号）の編集の要望に応えたテクストとして位置づけられるであろう。

注

1 上述は、鷺只雄編著『年表作家読本芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月　一一三～一一六頁）からの参照。

2 一九二二年三月一九日付の芥川の西村貞吉宛の書簡において、「今日から長江游記を書き出した」（『芥川龍之介全集』（第一九巻）　岩波書店　一九九七年六月　二四一頁）という一文から判断できる。

3 芥川の体調不良による原稿の遅滞が原因となる。また、芥川を大阪毎日新聞社の社員として招聘し、芥川と大阪毎日新聞社とのパイプ役であった薄田泣菫が、パーキンソン病で一九二三年に「待命休職を命ず」（三宅昭三文責『薄田泣菫宛　芥川龍之介書簡解読と解説』薄田泣菫顕彰会　二〇〇五年一一月　五八～五九頁）という辞令を受け、それ以降、大阪毎日新聞社の職務から外されたことも原因と考えられる。

4 久保田芳太郎「長江游記」（菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編　『芥川龍之介事典』増訂版　明治書院　二〇〇一年七月）　三四二頁。

5 施小煒「長江游記」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版　二〇〇〇年六月）　三六四頁。

6 川端俊英「保吉もの」（菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編　『芥川龍之介事典』増訂版　明治書院　二〇〇一年七月）　五〇二～五〇三頁。

7 今野哲「魚河岸」関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版　二〇〇〇年六月）　六四頁。

8 関口安義『特派員芥川龍之介――中国でなにを視たのか――』（毎日新聞社　一九九七年二月）　三七頁。

9 一九二一年一〇月一〇日、芥川の西村貞吉宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第一九巻）（岩波書店　一九九七年六月）　二〇六頁。

10 一九二二年五月、芥川の西村貞吉宛の絵葉書（『芥川龍之介全集』（第一九巻）　岩波書店　一九九七年六月）　二六五頁。

11 島津四十起のこと。島津の人物像について、第一章では詳述している。

12 西村貞吉「芥川龍之介より無名の友への手紙」（『文芸春秋』（五（一一））　一九二七年一一月）　一〇四頁。

13 津金澤聡広「雑誌『女性』と中山太陽堂およびプラトン社について」（『雑誌『女性』』（四八）日本図書センター　一九九三年九月）参照。

14 「編輯後記」（『女性』（六（三））一九二四年九月）　二五〇頁。

15 大正一二年（一九二三）九月一日午前一一時五八分、関東地方を襲った大地震。マグニチュード七・九、震源地は相模湾の北西隅付近の海底。被害は東京を中心に湘南地方、三浦半島、房総半島全域におよび、死者一〇万、全壊、焼失、流失家屋五八万戸をだした。関東地震。（「関東大震災」『日本国語大辞典』第二版（第三巻）二〇〇一年三月）一三五七頁。

16 横山有策『文学概論』（久野書店　一九二一年九月）　三〇～三一頁。
17 本間久雄『文学概論』（東京堂書店　一九二六年一一月）　一～二頁。
18 横山有策『文学概論』（久野書店　一九二一年九月）　二一七頁。
19 益田道三『文学概論』（聚芳閣　一九二五年一〇月）　一三九頁。
20 本間久雄『文学概論』（東京堂書店　一九二六年一一月）　三二五～三二六頁。
21 小林善八『文学概論』（文芸社　一九二八年九月）　五二頁。
22 芥川龍之介「文芸雑談」（『芥川龍之介全集』第一四巻　岩波書店　一九九六年一二月）四二頁。初出『文芸春秋』（四（一））（一九二七年一月）。
23 注16、17、18、19、20、21等の著書を参照。
24 篠崎美生子「大震に際せる感想」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版　二〇〇〇年六月）　三二二頁。
25 「大震に際せる感想」（『芥川龍之介全集』（第一〇巻）　岩波書店　一九九六年八月）一五三頁。初出『改造』（五（一〇））（一九二三年一〇月）。
26 「大震雑記」『芥川龍之介全集』第一〇巻　岩波書店　一九九六年八月）　一四七頁。初出『百艸』（新潮社　一九二三年一〇月）。
27 「妄問妄答」（『芥川龍之介全集』第一〇巻　岩波書店　一九九六年八月）　一六六～一六八頁。初出『改造』（五（一一））（一九二三年一一月）。
28 「廃都東京」（『芥川龍之介全集』（第一〇巻）　岩波書店　一九九六年八月）　一六一頁。初出『百艸』（新潮社　一九二三年一〇月）。
29 施小煒「長江游記」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版　二〇〇〇年六月）三六五頁。
30 在中日本人の中国に対する好意を、「長江」は初めて「第二の愛郷心」として命名することに注目したい。芥川の作品を調べてみると、「愛郷心」そのものは、関東大震災との関わりがあるようにみえる。芥川は、関東大震災の翌月に発表した「感想一つ――東京人」において、「愛郷心」のことを以下のように取り上げる。

東京に生まれ、東京に育ち、東京に住んでゐる僕は未だ嘗て愛郷心なるものに同情を感じた覚えはない。又同情を感じないことを得意としてゐたのも確かである。

元来愛郷心なるものは、県人会の世話にもならず、旧藩主の厄介にもならない限り、云はば無用の長物である。東京を愛するのもこの例に洩れない。兎角東京東京と難有さうに騒ぎまはるのはまだ東京の珍らしい田舎者に限つたことである。――さう僕は確信してゐた。

すると大地震のあつた翌日、大彦の野口君に遇つた時である。（中略）僕はその時話の次手にもう続続罹災民は東京を去つてゐると云ふ話をした。

「そりやあなた、お国者はみんな帰つてしまふでせう。――」

野口君は言下にかう云つた。

「その代りに江戸つ児だけは残りますよ。」

僕はこの言葉を聞いた時に、ちよいと或心強さを感じた。それは君の服装の為か、空を濁らせた煙の為か、或は又僕自身も大地震に悸えてゐた為か、その辺の消息ははつきりしない。しかし兎に角その瞬間、僕も何か愛郷心に似た、勇ましい気のしたのは事実である。やはり僕の心の底には幾分か僕の軽蔑してゐた江戸つ児の感情が残つてゐるらしい。

「感想一つ――東京人」（「東京人」として改題　『芥川龍之介全集』（第一〇巻）（岩波書店　一九九六年八月）一六四～一六五頁。初出『カメラ』（三（一〇））（一九二三年一〇月）。

31 中国に溶け込んだ在中日本人の中国への愛郷心について、第一章では詳述している。

32 一九二二年五月二八日付の芥川の薄田泣菫宛の書簡においての、「長崎へ参る途大阪の社へよるべき所長江游記の稿未成らず恐縮の余り近づきがたし」（『芥川龍之介全集』（第一九巻）　岩波書店　一九九七年六月　二六四頁）との文言から、長江体験を記述するテクストは、当初「長江游記」として『大阪毎日新聞』に掲載する予定だったと判明できる。

第四章　「北京日記抄」に見られる日本へのまなざし
――中国の社会運動に対する『改造』のスタンスとの関わり――

第一節　芥川の北京体験と「北京日記抄」

一九二一年六月六日夜、長江体験を終えた芥川龍之介は、「漢口から洛陽に向う」。「七～一〇日頃、洛陽、龍門の石窟を見学し、殊に石窟の壮大さに驚く」。「一四日、北京に到着」する。「旧友の山本（稿者注：山本喜誉司）に再会する」。「二〇日、前門外にある三慶園に芝居を観に行く」。「二四日、大同の石窟を観に旅行するはずであったが、ストライキで列車不通となり、行けず。しかし、その後訪ねている」。

「芥川はこのあと七月一〇日に天津へ行くまで、北京に約一カ月滞在する。その間喜々として本屋に行き、芝居を観、名所旧跡を見学した。見た主な所をあげると、万寿山、玉泉山、白雲観、天寧寺、松筠庵、謝文節公祠、窰台、陶然亭、文天祥祠、永安寺、北海、天壇、紫禁城、雍和宮、万里の長城、大同の石仏寺など」である。「絵では「文華殿の陳列品は貧弱」だが、「御府の画はすばらしいものです」（六月二四日付、下島宛）としばしば観に行った」（注1）。

（一）　書簡に示された北京の印象

芥川の中国滞在時から、晩年に至るまでの北京体験に関する書簡を見ると、好意的な北京の印象が窺える。

北京着　北京はさすがに王城の地だ　此処なら二三年住んでも好い
夕月や槐にまじる合歓の花

（一九二一年六月一四日　岡栄一郎宛）

拝啓北京にある事三日既に北京に惚れこみ侯、僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり昨夜三慶園に戯を聴き帰途前門を過ぐれば門上弦月ありその景色何とも云へず北京の壮大に比ぶれば上海の如きは蛮市のみ

（一九二一年六月二一日　室生犀星宛）

僕は今北京にゐます北京はさすがに王城の地です、僕は毎日支那服を着ては芝居まはりをしてゐます　以上

（一九二一年六月二四日　中原虎雄宛）

北京の新人たちは河上さんが二三ヶ月北京へ来てくれると好いと云つてゐる、来てくれゝばラッセン以上の持て方をするのは事実だ来ないかね、僕はまだ少時北京にゐる芝居、建築、絵画、書物、芸者、料理、すべて北京が好い　以上

（一九二一年六月二七日　恒藤恭宛）

北京はよかつたでせう。僕は東京以外の都会では一番北京へ住みたいと思つてゐるものです。

（一九二七年二月五日　小松芳喬宛）

（二）『日華公論』の記事に示された北京の印象

書簡のみでなく、中国訪問中の一九二一年七月一一日に天津で発行された日本語雑誌『日華公論』の取材（注２）を受けた際にも、芥川（注３）は好意的な北京の印象を語っている。

私が南から北支那へ来て見ますと眼界が一変して、見るものが総て大支那、何千年の昔から文明であつた支那と云ふ感じを無言の裡に説明して呉れる程、それは実に雄大な感に打たれるのであります。私の考へでは将来此の大支那を統一して行く上に於ての都は矢張り北支那だろうと思ひます。

私が支那を南から北へ旅行して廻つた中で北京程気に入つた処はありません。それが為めに約一ケ月間も滞在しましたが、実に居心地の好い土地でした。

第二節　芥川の北京の印象に関する先行研究

先行研究は芥川の北京認識を探るにあたり、上記の書簡や『日華公論』の記事に重点を置き、北京が気にいったとする芥川の好意的な北京の印象を提示している。今野哲は「芥川は北京が相当気に入ったようで、「新芸術家の眼に映じた支那の印象」（「日華公論」大正一〇年八月）や知友への書簡にも北京を称える文言が並ぶ」（注４）と評価している。白井啓介は「到着早々「北京はさすがに王城の地だ　此処なら二三年住んでも好い」（岡栄一郎宛）と手放しで礼賛する」（注５）と述べている。王書瑋も「私が支那を南から北へ旅行して廻つた中で北京程気に入つた処はありません」という前出雑誌に載せられた芥川の文言を踏まえて、「芥川にとって（中略）北京を含む北の方は「落ち着き」があって、「大陸的な」気分で「何千年の昔から文明」の沈澱を示してくれるところである。（中略）芥川にとって、南から北への北上は、あたかも現代から過去への旅のようである。現代生活に疲れた彼は過去の中で、芸術的な感激を得、大陸的な気分に癒された。芥川は思わず「僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり」（稿者注：前出書簡）と発言した」（注６）と述べている。このように多くの先行研究が芥川の書簡や『日華公論』の記事を重視し、芥川

の好意的な北京の印象を強調している。

一方で、北京訪問を記述するテクスト「北京日記抄」（『改造』一九二五年六月）を中心に芥川の北京の印象を探る先行研究は、管見に入った限りまだ数少ないようである。その中で、関口安義は「「最も面白かりし」と言う十刹海での人間観察、紫禁城の印象を「こは夢魔のみ。夜天より厖大なる夢魔のみ」と簡潔に記すなど、ユニークな観察が光る」（注7）と捉えている。単援朝は「北京での行動はすべて自分の意志で決めたものではなかった。少なくとも名所巡りにおいてそうだったのである。興味をもたないものをいやいやながら見物するときの心情は、当然のことながら、そのまま見た対象に反射されることもあるはずである」（注8）とし、名勝体験に「いやいや」臨んだ芥川の「心情」を指摘している。とはいえ、これらの論でも、そうした「北京日記抄」の北京表象と、上記の書簡や『日華公論』の記事に示された好意的な北京の印象とが、どのような関連性にあるのか、といったことまでは検討されていないようである。

稿者は本章で「北京日記抄」に焦点を当てながら、芥川の書簡、訪中メモ類と比較しつつ検討する。その上で、先行研究に示された芥川の好意的な北京の印象とはむしろ相容れない「北京日記抄」に見られる独自の側面を提示する。

第三節　「北京日記抄」に見られる〈中国〉表象

「北京日記抄」本文は、（一）雍和宮、（二）辜鴻銘先生、（三）十刹海、（四）胡蝶夢、（五）名勝の順に成り立っているが、（一）雍和宮、（三）十刹海は名勝体験に属する内容で、稿者はそれらを名所巡りの範疇で扱うことにする。それゆえ、稿者は名所巡り（雍和宮、十刹海、名勝）、人物会見（辜鴻銘先生）、観劇体験（胡蝶夢）という順番で章を設け、「北京日記抄」に見られる〈中国〉表象を検討していく。

（一）　名所巡りに見られる表象

雍和宮体験

雍和宮体験を、「北京日記抄」とメモは次のように記している。

> 今日も亦中野江漢君につれられ、午頃より雍和宮一見に出かける。喇嘛寺などに興味も何もなけれど、否、寧ろ喇嘛寺などは大嫌ひなれど、北京名物の一つと言へば、紀行を書かされる必要上、義理にも一見せざる可らず。我ながら御苦労千万なり。
>
> （中略）
>
> 第六所東配殿に木彫りの歓喜仏四体あり。堂守に銀貨を一枚やると、繍幔をとって見せてくれる。仏は皆藍面赤髪、背中に何本も手を生やし、無数の人頭を頸飾にしたる醜悪無双の怪物なり。歓喜仏第一号は人間の皮をかけたる馬に跨り、炎口に小人を啣くわうるもの、第二号は象頭人身の女を足の下に踏まえたるもの、第三号は立って

女を姪するもの。第四号は——最も敬服したるは第四号なり。第四号は牛の背上に立ち、その又牛は僭越にも仰臥せる女を姪しつつあり。されど是等の歓喜仏は少しもエロティックな感じを与えず。只何か残酷なる好奇心の満足を与うるのみ。

（一　雍和宮　「北京日記抄」）

○和合仏第六所東配殿。繡幔。三青面赤髪。緑皮。髑髏飾。火焔背。男数手。女両手。人頭飾（白赤）。手に幡。孔雀羽。独鈷戟。四女に牛臥せるあり。上に男。牛皮を着たる小男、男に対す。二象首の女をふむもの。一馬に人皮をかけ上にまたがる。人頭逆に垂れ舌を吐しこの神、口に小人を啣。○大熊（半口怪物）。小熊。二武人（青面、黒毛槍）。

○銅鑼。太鼓。赤、金。

（メモ）

上述のメモは、雍和宮の名勝である歓喜仏を、視覚を中心に詳しく描出している。それに対し「北京日記抄」は、「歓喜仏四体あり」とその数を明確にし、「第一号」から「第四号」までそれぞれ詳述した上で、歓喜仏の残酷な一面をありありと描出している。さらに、「是等の歓喜仏は少しもエロティックな感じを与えず。只何か残酷なる好奇心の満足を与うるのみ」と結論づけている。こうしたかなり詳しく対象を把握しようとする芥川の態度は、「喇嘛寺などに興味も何もなけれど、否、寧ろ喇嘛寺などは大嫌ひ」という言を裏切っていると感じさせるほどであり、彼のそれに対するある面での強い興味を示すものともいえるのではないだろうか。

「北京日記抄」中には「中野江漢君につれられ」とあるが、実際芥川がどのように案内され、雍和宮をどう認識したのかということについては、案内者の中野江漢の回想によってより明確になる。中野江漢は中国民俗の研究家であり、一九一四年に北京にわたり、支那風物研究会を主宰し、「支那風物叢書」を刊行した（注9）。中野は芥川の案内を引き受けた経緯について、こう（注10）語る。

芥川君が北京に来たのはたしか大正一〇年だつたと思ふ、恰度私が京津日日新聞「烏衣巷」のペンネームで「北京繁昌記」を連載して居た時であつた。芥川君は北京に着くなり京津日日新聞の綴込の中から、その記述を読んでスツカリ共鳴して了つたらしく、波多野乾一君を介して私に会見を申込んで来た、それが私が芥川君に会つた最初である。

それから扶桑館の楼上で、二三日朝から夜までプツ通しに支那談をやつたことを記憶して居るその揚句北京見物の案内を頼まれたが私は「三四日のおのぼりさん式の見物ならお免蒙りたい、見物で無く徹底的に見学するならば徹底的に案内してもよい」ということになり、とうとう一箇月以上も毎日々々北京城の内外隅から隈まで隈なく

歩き廻つた。（後略）

しかもその案内振り、案内されぶりは約束通りに実に徹底的であつた、一木一石と雖もいやしくもせず細に入り微を穿つといつたやうな工合で、最初の豪傑松本鎗吉も根気負けして逃げ出してしまつたくらひである。

中野の案内振りはメモにおいて詳述されていないが、上記の『北京繁昌記』を通じて垣間見ることができるだろう。『北京繁昌記』では喇嘛廟としての雍和宮の歴史的及び宗教的価値について、次（注11）のように触れる。

喇嘛教は西蔵化せられた仏教の一種で、西蔵人は勿論内外蒙古人は悉く信ずる。喇嘛は無上又は上人といふ意味で「達賴喇嘛」即ち「法王」は、神の命であつて、神聖にして浸すべからざるものとして居る。現に西蔵では此法王が、首府拉薩に於て、宗教及び政治を統べて居る位である。故に達賴さへ丸めて置けば外藩統治上に非常な便利がある。早くもそこに着眼し、自邸を喜捨し彼等の歓心を買つたのは、雍正帝の大手柄といわねばならぬ。斯くて徐々と清朝の権威を外藩に伸張し、乾隆の中葉に至つて統治権を掌握してしまつた。順治帝も嘗て太和殿の西に黄寺を建立して達賴、班禪を駐京せしめたこともあつた。斯くの如き意味からして、北京の喇嘛廟は歴史上の遺跡として名高きのみならず、宗教としての感化が如何に威大なるかを想見する生きた証拠である。

そして雍和宮の名勝の歓喜仏について、中野江漢は次（注12）のような認識を示す。

雍和宮に於ける「歓喜仏」は生殖的霊能の神秘を崇拝する原始的蛮人の、宗教思想を露骨に象徴化した稀世の珍物である。若しも露骨な統計が執れたらば、雍和宮に三詣する過半数は、歴史的遺物を見るとか、燕京唯一の名刹に詣でるとかいふやうな、意義ある殊勝な考えではなく、ただこの珍物を拝み度い助平心否好奇心に駆られて足を運ぶ人であろうと思う。

上述の如く、「北京城の内外隅から隈まで隈なく歩き廻つた」というふうに「徹底的」に案内された芥川は、「北京の喇嘛廟は歴史上の遺跡として名高きのみならず、宗教としての感化が如何に威大なるかを想見する生きた証拠である」とする中野の提示した雍和宮の歴史的及び宗教的価値を、認識するに至らなかったはずがない。ところが、「北京日記抄」ではこうした雍和宮の歴史的価値及び宗教的価値については一言も触れずに、「興味も何も」ない、「大嫌ひ」と批判していることが確認できる。

雍和宮の名勝である歓喜仏に対し、中野は「若しも露骨な統計が執れたらば、雍和宮に参詣する過半数は」、「ただこの珍物を拝み度い助平心否好奇心に駆られて足を運ぶ人であ

ろう」とし、大衆の関心の在り方を直言している。それに対して、「北京日記抄」は、「是等の歓喜仏は少しもエロテイツクな感じを与へず。只何か残酷なる好奇心の満足を与ふるのみ」と述べている。この芥川の言葉は、中野の提示した「ただこの珍物を拝み度い助平心否好奇心に駆られ」たという言葉を彷彿させる。ただし、「北京日記抄」においては、中野の語った大衆の「助平心」とは逆に、「少しもエロテイツクな感じを与へず」とし、大衆の「好奇心」を、「残酷なる好奇心」と言い換えられている。「興味も何もな」いといい、案内される受身の立場にいたはずの芥川は、結局独自の判断で歓喜仏を捉えようとする。こうした動きは、前述の、歓喜仏に対するある面での強い興味を示すものともいえるのだろう。

中野の指摘した歓喜仏に対する大衆の関心と、「北京日記抄」の示した見解とは異なっているように見えるにもかかわらず、歓喜仏に対する好意を抱いていない点において、中野と芥川の両者は共通しているといえるだろう。

十刹海体験

十刹海（稿者注：什刹海ともいう）体験に関して、「北京日記抄」は男女別席のエピソードを主として描いている。そして、それを借りて中国人の「形式主義」を揶揄した。それと対照的に、メモはこうした認識を示さない。

僕等のはひりし掛茶屋を見るも、まん中に一本の丸太を渡し、男女は断じて同席することを許さず。女の子をつれたる親父などは女の子だけを向う側に置き、自分はこちら側に坐りながら、丸太越しに菓子などを食はせてゐたり。この分にては僕も敬服の余り、旗人の細君にお時儀をしたとすれば、忽ち風俗壊乱罪に問はれ、警察か何かへ送られしならん。まことに支那人の形式主義も徹底したものと称すべし。

僕、この事を中野君に話せば、中野君、一息に玫瑰露を飲み干し、扨徐に語つて曰、「そりや驚くべきものですよ。環城鉄道と言ふのがあるでせう。ええ、城壁のまはりを通つてゐる汽車です。あの鉄道を拵へる時などには線路の一部が城内を通る、それでは環城にならんと言つて、わざわざ其処だけは城壁の中へもう一つ城壁を築いたですからですね。兎に角大した形式主義ですよ。」

（三　十刹海　「北京日記抄」）

○十刹海。岸は柳、楡。茶館はアンペラ葺（白布のテエブル、男女は夫婦も別席）。

（メモ）

上述の引用文が示すように、メモに見られる「男女は夫婦も別席」と書かれた部分は、「北京日記抄」においては、具体的に「女の子」と「親父」を登場させる形で描かれる。「僕」は「男女は断じて同席することを許さず」という観念の下で、「女の子をつれたる親父など

は女の子だけを向う側に置き、自分はこちら側に坐りながら、丸太越しに菓子などを食はせてゐたり」することを「まことに支那人の形式主義も徹底したものと称すべし」と揶揄する。こうした皮肉めいた表象はメモにおいては確認できない。

その他の名勝体験

天壇訪問について、特に、天壇の外の広場を巡る「北京日記抄」とメモの記述の間にも温度差が感じられる。

天壇の外の広場に出づるに忽一発の銃声あり。何ぞと問へば、死刑なりと言ふ。

（五　名勝　「北京日記抄」）

○天壇を出れば広場。死刑をする所。役者が声を試みる所。ひるね多し。

（メモ）

ここで注目すべき点は、天壇の外の広場をめぐる記述である。メモでは「死刑をする所」というだけではなく、「役者が声を試みる所」、「ひるね多し」という中国独特の風情やのどかな光景を思わせる記述を見て取ることができる。しかしながら、「北京日記抄」はそれには触れずに、「忽一発の銃声あり」と緊張感のある雰囲気を作った上で、「死刑」とだけ関連させる。「死刑」といえば、「草も人血に肥えてゐるのかも知れない」と提起された「昔の死刑場」（十三　蘇州城内（上）「江南游記」）や「犬でも食つてしまつたのかもしれない」首のない「腐つて落ちた罪人」の「二すぢぶら下つてゐる」「辮髪」（九　鄭州「雑信一束」）などの、不気味さしか匂わせないイメージを想起せざるをえない。

（二）　辜鴻銘との会見に見られる表象

「北京日記抄」とメモの表象上の相違は、辜鴻銘との会見でも窺える。

先生、南は福建に生れ、西は蘇格蘭のエディンバラに学び、東は日本の婦人を娶り、北は北京に住するを以て東西南北の人と号す。英語は勿論、独逸語も仏蘭西語も出来るよし。されどヤング・チヤイニイズと異り、西洋の文明を買ひ冠らず。基督教、共和政体、機械万能などを罵る次手に、僕の支那服を着たるを見て、「洋服を着ないのは感心だ。只憾むらくは辮髪がない。」と言ふ。（後略）

僕、亦先生の論ずる所に感じ、何ぞ先生の時事に慨して時事に関せんとせざるかを問ふ。先生、何か早口に答ふれど、生憎僕に聞きとること能はず、「もう一度どうか」と繰り返せば、先生さも忌忌しさうに藁半紙の上に大書して曰、「老、老、老、老、老、……」と。

（二　辜鴻銘先生　「北京日記抄」）

○辜鴻銘。王風起華夏、喜気満乾坤。

（メモ）

メモに示された「喜気満乾坤」の出典については、管見の限りまだ先行研究では指摘されていないようである。稿者が調べた結果、当該句は唐代杜甫の作「喜聞盗賊蕃寇総退口號五首」の中の一句「今春喜気満乾坤、南北東西拱至尊」を出典とすることが確認できた。杜甫の作の創作の背景には、以下のような史実がある。安史の乱以降唐の国力が衰弱していくことをきっかけに、吐蕃（稿者注：今のチベット）が反乱を起こす。大暦三年一〇月になると、唐はついに吐蕃を破って時局を収拾する。この作は反乱が鎮まった後に作られたもので、「喜気とは、吐蕃の寇が退却することに対する悦び」、「拱至尊とは、天下一統のこと」である（注13）。つまり、「王風起華夏、喜気満乾坤」というのは、中国の伝統文明の源流たる華夏文明において生起した王風の思想で天下を治めようとする、豪邁な気概を匂わせる一句である。

こうした「王風起華夏、喜気満乾坤」の句について、張明傑（注14）は、「嘗て辜鴻銘宅に出入りし」た「日本人牧師の清水安三」の書いた論評「辜鴻銘宅の思想と人物」の中に「『王風満中廈』という文字が門一ぱいに書いてある」との記述を踏まえ、「辜鴻銘宅の石刷りか字の額の文字」であると主張している。メモの句は、辜鴻銘に対する評価の意味を込めて芥川が選んだものなのかどうかは判然としないが、たとえそれが「辜鴻銘宅の石刷りか字の額の文字」であったとしても、辜鴻銘が中国伝統の力をもって天下を治めようとする豪邁な気概と意気揚々とした姿がこの文字に託されているのではないかと思われる。そもそも自宅の石刷りや字の額の文句を借りて自らの志を表わすこと自体が、中国文人の常であることは周知の通りである。

一方「北京日記抄」においては、多国の言語に精通し「東西南北の人と号」（注15）しているにもかかわらず、辮髪を残した支那服の姿で「西洋の文明を買ひ冠らず。基督教、共和政体、機械万能などを罵る」辜鴻銘の、中国の伝統に拘る保守的な側面が、「僕」の語りによって鮮明に浮上する。こうした記述はメモに記された「王風起華夏」に通ずるものであるのかもしれないが、「喜気満乾坤」と示されたような颯爽とした辜鴻銘の英姿は、「北京日記抄」では確認できなかった。

（三）観劇体験に見られる表象

「北京日記抄」では、さらに「胡蝶夢」（注16）の鑑賞体験が主として語られる。

（前略）道服を着たる先生の舞台をぶらぶら散歩するは「胡蝶夢」の主人公荘子ならん。それから目ばかり大いなる美人の荘子と喋々喃々するはこの哲学者の細君なるべし。其処までは一目瞭然なれど、時々舞台へ現るる二人の童子に至っては何の象徴

なるかを朗かにせず。「あれは荘子の子供ですか？」と又ぞろ波多野君を悩ますれば、波多野君、聊いささか唖然として、「あれはつまり、その、蝶々ですよ。」と言う。しかし如何に贔屓眼に見るも、蝶々なぞと言うしろものにあらず。或は六月の天なれば、火取虫に名代を頼みしならん。唯この芝居の筋だけは僕も先刻承知なりし為、登場人物を知りし上はまんざら盲人の垣覗きにもあらず。否、今までに僕の見たる六十有余の支那芝居中、一番面白かりしは事実なり。抑「胡蝶夢」の筋と言えば、荘子も有らゆる賢人の如く、女のまごころを疑う為、道術によりて死を装い、細君の貞操を試みんと欲す。細君、荘子の死を嘆き、喪服を着たり何かすれど、楚の公子の来り弔するや、……

（中略）

（前略）楚の公子の来り弔するや、細君、忽公子に惚れて荘子のことを忘るるに至る。忘るるに至るのみならず、公子の急に病を発し、人間の脳味噌を嘗めるより外に死を免るる策なしと知るや、斧を揮って棺を破り、荘子の脳味噌をとらんとするに至る。然るに公子と見しものは元来胡蝶に外ならざれば、忽飛んで天外に去り細君は再婚するどころならず、却かえって悪辣なる荘子の為にさんざん油をとらるるに終る。まことに天下の女の為には気の毒千万なる諷刺劇と言うべし。（後略）

「胡蝶夢」を見終りたる後、辻聴花先生にお礼を言い、再び波多野君や松本君と人力車上の客となれば、新月北京の天に懸り、ごみごみしたる往来に背広の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るを見る。ああ言う連中も必要さえあれば、忽――斧は揮わざるにもせよ、斧よりも鋭利なる一笑を用い、御亭主の脳味噌をとらんとするなるべし。「胡蝶夢」を作れる士人を想い、古人の厭世的貞操観を想う。同楽園の二階桟敷に何時間かを費したるも必しも無駄ではなかったようなり。

（四　「胡蝶夢」）　（「北京日記抄」）

「僕」は「胡蝶夢」に現れた「道服を着たる」荘子を「哲学者」の荘子として見なし、「胡蝶夢」の筋を借りて「細君の貞操を試みんと欲す」この「悪辣なる荘子」の行動を、「女のまごころを疑ふ」「有らゆる賢人」と捉えた上で、批判する。

その「胡蝶夢」を「見終わりたる後」、「僕」は「ごみごみしたる往来に背広の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るを見る。ああ言ふ連中も必要さへあれば、忽――斧は揮はざるにもせよ、斧よりも鋭利なる一笑を用ゐ、御亭主の脳味噌をとらんとするなるべし」とすることによって、芝居に現れた「御亭主の脳味噌をとらんとする」細君を、目の前の「新時代の女子」に当て嵌める。ここには、そこまで連想を発動した「僕」の中国への揶揄的態度が浮き上がってくる。

ところが、「胡蝶夢」で演じられた「女のまごころを疑ふ」という荘子の逸事は、『荘子』に示された「哲学者」荘子の姿とは相当に乖離しているようである。それについては、青木正児が次（注17）のように指摘している。

さて此劇（稿者注：「胡蝶夢」）の筋の骨子は其の源を周末の書「荘子」に見えたる三つの記事に発してゐる。（一）全本の主要なる骨子を為せる荘子と其妻との関係（荘子の婦人観）は「至楽篇」荘子の妻の死に関する記事から来ている。（二）第一齣の「嘆骷」（荘子の死生観）は同じく「至楽篇」の荘子が髑髏と問答した話から来てゐる。（三）第五齣「弔孝」の冒頭に蝴蝶の化身が下僕二人と為って出て来る趣向や第五齣及び第九齣「劈棺」に於て荘子が幻術によって妻の貞操を試みる趣向は「齊物論」の荘子が夢に蝴蝶と為ったと云ふ荘子の人生観を説いた寓言から導かれてゐる。

（中略）

つまり此一劇は以上三箇の簡単な話を種として、其れを劇的に色付けしたのである。（一）は荘子が妻の死に対して生の恃むに足らず死の悲むに足らざるを説いた寓言であるのを、劇の作者は之を演義して夫婦恩愛の羈絆を脱せんとする悟道の話に作り為し、此の悟入はやがて妻の死をさへ冷静に眺め得るに至ると云ふ仕組みにしてゐる。そして其の悟道の転機として女性の醜悪を見せ付けて、婦人の貞操に対する疑ひを起こさしめ、恩愛の無価値を喩してゐる。此の作為は全本の骨子を為して最も劇的成功を収めてゐる。（二）は原本の筋のまゝ演義されてゐる。（三）は現世を以て一つの仮象界であるとする道家の哲理を説く為の比喩談であるのを、劇に於ては現実化して一つの道教的幻術に作為したのである。

青木の指摘したように、「胡蝶夢」の骨子は『荘子』の記事に基づくが、「胡蝶夢」で演じられた「道服」の姿で「道術」を使う荘子に関する逸話は、決して『荘子』に記された「哲学者」の荘子ではなく、あくまでも演技されたものにすぎない。原典としての『荘子』は、芥川が熟知していた可能性が高い。すでに先行研究（注18）に指摘がある通り、芥川が中国旅行を実現する一年前に発表した「尾生の信」（『中央文学』一九二〇年一月）は、「胡蝶夢」の原典である『荘子』の「外篇　盗跖篇第二九」等を種としているようである。そうであるとすれば、芥川は原典『荘子』の記述を承知していたにもかかわらず、結局「胡蝶夢」で上演され、虚構された「女のまごころを疑ふ」荘子と「御亭主の脳味噌をとらんとする」細君を、中国の「有らゆる賢人」と「新時代の女子」に重ね合わせていた、ということになる。「北京日記抄」の記事には、負の捉え方で中国を表象しようとする狙いが垣間見られるのではないだろうか。

第四節　〈中国〉表象と「北京日記抄」のモチーフとの関連性

以上をまとめると、「北京日記抄」に見られる負の〈中国〉表象は、先行研究で論じられた好意的な北京の印象という範疇には収まりきれない。こうした「北京日記抄」に見られる異色さは、芥川の北京認識についての研究を深める上で、欠かせない材料を提供しているといっても過言ではないだろう。

これまで見てきた「北京日記抄」独自の性格をどう受け止め、さらにそれが芥川の書簡、メモ類に示された北京の印象とどのように交錯し、それらを総合的にどのように位置づけるべきか。それについての、はっきりとした解答は未だ見出せていないが、それを考えるための一つの着眼点として、稿者は「北京日記抄」というタイトルに注目したい。周知の通り、そもそも「抄」とは「一部分を抜き出す」(注19)ことである。それゆえ、「北京日記抄」は北京日記の多くの中から、ある特定の内容が抜きだされたものと考えうる。それは、前述の「北京日記抄」に見られた負の〈中国〉表象を含み持つものであった。

その負の〈中国〉表象が「北京日記抄」に組み込まれた理由としては、「上海游記」、「江南游記」、「長江」(「長江游記」)に示された対〈中国〉表象(注20)の一貫性を保つため、負の表象を持つ「北京日記抄」をこれらの三作の延長線上に置いた上で『支那游記』(改造社　一九二五年一〇月)に取り込もうとする芥川の戦略の存在が考えられてよい。というのも、「北京日記抄」の執筆時と見られる一九二五年四月二九日に芥川が親友の小穴隆一に送った書簡中に「悪銭少々同封す。支那旅行記の装幀料と思はれたし」(注21)という記述があることから、その時点で、『支那游記』を発表することになっていた事情が窺えるのである。

このように考えることで、「北京日記抄」の記事中に散見された負の〈中国〉表象と「抄」と命名された「北京日記抄」のモチーフとの関連が僅かながらも見えてくるのではないだろうか。さらに、「北京日記抄」が当初『改造』に掲載されたことを考えるならば、この雑誌の編集過程で生じた事態についても検討を要するであろう。

第五節　「北京日記抄」と中国の社会運動

「北京日記抄」が発表された当時、上海の「大罷業(稿者注：大規模ストライキ」に端を発し、日中関係に甚大な影響を及ぼした社会運動(注22)が中国で発生していた。

> 一九二五年の大罷業の前奏である上海日本紡績二月ストの発火点となったのは、上海に於ける最大の在華紡であり、職工総数も一万五千人にのぼる内外綿工場であった。同会社第八工場では、新任工場長による工場内の取締苛酷で女工の身体検査などを実施し、また男工二百を馘首し女工を以てこれに代え、或は賃銀値下が行われたので工員の不満は鬱積していた。二月九日より第五東西及び第十二工場が休業し、翌十日には第九、十三、十四工場が罷工に襲撃され、十一日には遂に内外綿全工場一万五千三百余(男工六千八百、女工八千五百)がストに突入したのである。ストは忽ちのうち、(中略)總罷業工員三万人に達した。
>
> (中略)
>
> 上海では二月の紡績罷業終息後も不穏な情勢は続き、内外綿工場では五月一日メーデーの半日休業の要求が容れられず、且会社側が賃銀の生産高制度を採用した為不熟練工の不満は昂まり、五月四日第八工場にサボタージュが起った。(中略)各工場は十

一日より操業を開始したが、十四日に内外綿第十二工場が怠業したので会社側はこれと関連せる第七工場を閉鎖すると、翌日同工場に暴動が起り、遂に印度人巡捕及び日本人は発砲し負傷者七名を出し内一名は死亡するに至った。その後（中略）二十三日宣単撒布の学生六名が工部局官憲に逮捕されたので、五月三〇日朝来上海市に亘って学生団は「実行経済絶好」「反対越界築路」「抵制日貨」の伝単を配布したり、又それらを大書した旗を持って遊行した。工部局警察がこれ等学生五名を老閘警察署に引致したため興奮した遊行団は大挙警察を襲撃し逮捕者を奪回せんとしたので、英人エバーソン署長の命令で工部局巡査は発砲し、即死者四名、負傷者二十名をだし、そのうち四人が入院中死亡するに至った。（中略）三一日には学生団市内各処に宣単配布を行い、六月一日再び群衆と警察の衝突あり、三〇日と一緒にして中国人死亡者合計十四名、病院に収容された重軽傷者は四十名に及んだ。（中略）六月一日共同租界内の中国商は大部分休業するに至ったのである。六月一日工部局は共同租界に戒厳令を実施し、二日の納税者会議も流会となり、同日午後米日伊等の陸戦隊が少数ながら上陸した。そして南京路西端にてはまた衝突が起り、義勇隊の機関銃に依って多数の死傷者が発生したのである。翌三日には香港より英兵三大隊千五百名も上海に到着するなど、大規模な反帝運動とこれを鎮圧せんとする列強の軍事力が緊張裡に対峙したのである。五・三〇事件の反響は上海のみでなく、（中略）全国各地に大きな騒擾を惹起したのであった。

以上の記述に見られる如く、上海の社会運動は一九二五年二月から内外綿工場において発端し、その後、在華紡全体に波及していく。五月三〇日に至ると、「五・三〇事件」の惨劇へと発展し、六月一日以降さらに拡大していったことが確認できる。

第六節　中国の社会運動に対する日本のメディアの反応

上述の中国の社会運動を、日本のメディアはどのように捉えていたか、表一は、「上海游記」と「江南游記」を掲載した『大阪毎日新聞』を中心に、一九二五年二月から『改造』六月号の発刊日の一九二五年六月一日までの関係記事をまとめたものである。

表一　『大阪毎日新聞』における中国社会運動の関連報道（稿者より作成）

月	日	新聞の見出しタイトル
二月	一三日	「評壇：上海の罷業」、「上海内外綿争議と本邦紡績の地位」
二月	一七日	「更に豊田紡へ波及：上海紡績職工の罷業」、「罷業職工の暴動：邦人九名負傷」
三月	四日～六日	「大罷業の跡を顧みて（上・中・下）」
三月	一七日	「上海罷業の裏に動くロシヤ共産党の手」
四月	三日～七日	「在支日本人紡績の態度（一～三）」

四月　一八日　「青島邦人紡績不穏：形勢漸次悪化せる為大日本紡重役急行」
四月　二四日　「青島の罷業：我紡績業者の立場」、「支那の罷業騒ぎ」
五月　三日　「青島の罷業団：官憲に泣つく：持久戦に閉口して」、
「外来扇動者の逮捕：と工場寄宿舎整理を要求」
五月　五日　「上海内外綿の怠業：つひに操業中止となる」
五月　六日　「青島罷業も近く解決か」、「上海紡績：操業開始」
五月　八日　「排日気勢が濃厚となつた青島罷業団」、
「怠業気分漲る上海西部の邦人紡績」
五月　九日　「漸くめざめた支那の人心：但し一部の学生は騒ぐ」、
「邦人二名襲はる：悪化した上海内外綿」
五月　一二日　「青島の罷業職工：一斉に操業開始」、「上海も再び操業」
五月　一四日　「在支紡績：罷業真相」
五月　一六日　「上海内外綿の怠業暴動化す」、「支那兵数名が我が警官に暴行」、
「日本人を傷つけ機会を破壊　上海内外綿の怠業遂に暴動化す」、
「青島も亦騒ぐ：罷業反対者と不良職工とが入り乱れて大闘争」
五月　一七日　「青島罷業の一原因」、
「次第にのび行く共産党の魔手：上海における同派の諸団体」
五月　一八日　「形勢は楽観出来ぬ：職工側の憤激が甚だしい」
五月　一九日　「武器を集め暴行団を組織した罷業職工団」
五月　二一日　「支那警察の態度煮えきらぬ：青島の支那職工ますます悪化」
五月　二七日　「青島の三紡績職工また騒ぐ」、「我二警官に投石」
「支那官憲の取締不徹底」、
「暴力団の取締につき特に注意を促す＝若槻内相の訓示＝」
五月　二八日　「青島へ駆逐艦を派遣」、
「日本の抗議に対して徹底的鎮圧を誓ふ：張山東督弁の回答」、
「対峙する警官と職工：工場側は強硬」
五月　三〇日　「支那官憲武力を用ひ工場占領職工を追出す：内外綿では発砲し死傷者
を出す：邦人及び工場には損害はない」、
「支那各地の罷業は排外運動の第一歩：無産党と国民党の活動：第二
の義和団事件か」
五月　三一日　「上海の排日暴動：警官隊と大衝突を演じ」、
「支那学生二百一時は全く市街戦」、「市中は戒厳状態」、
「本日から排日大会：形勢はいよいよ険悪」、「奉天罷業悪化す」
六月　一日　「荒れ狂ふ排外団：各国義勇団の非常召集を行ふ」、
「嘗てない大胆なやり方：こんどの示威運動は純然たる
排外排日ばかりでなく」、

「女学生も交って過激な大道演説：警官隊と衝突して扇動者等捕縛さる」

表一によると、一九二五年二月にはすでに、「五・三〇事件」の発端となった上海のストライキに関する記事が『大阪毎日新聞』の紙面に現われていたことが確認できる。五月に至ると、運動の激化に伴い、関連報道数が大きく増えている。ここで問題にすべきは、こうした中国の社会運動に対し、『改造』がどのようなスタンスで臨んでいたのか、ということである。

第七節　中国の社会運動に対する『改造』のスタンス

（一）『改造』の性格について

『改造』は一九一九年四月に創刊された急進的な総合雑誌である。一九一九年七月（第四号）の「労働問題・社会主義批判号」を皮切りに、労働者階級の視点から編集を行った。その結果、一九一九年九月号以降、度々発売禁止の処分を受ける。一九一九年一二月号では「河上、福田両博士論戦批判」を特集し、『改造』誌上における論争の嚆矢となる。その後誌上論争等において、対立する言論を掲載し、バランスをとることは『改造』の編集上の特徴の一つ（注23）となった。その後、一九二三年九月の関東大震災で被害に遭ったが、一九二六年年末には、いわゆる円本ブームの火付け役となる『現代日本文学全集』を発行する。その結果、円本は出版界とその関連産業が不況から脱出する契機となった。また、一九二七年二月号の巻頭には、「本誌の値下げ十倍拡張運動」と題する文章を掲載している。これは現代日本文学全集の大量生産、廉価販売を雑誌に適用して読者を増やそうという企画であった（注24）。

（二）『改造』に見られる中国関連記事

創刊当初、『改造』誌上には、中国の関連記事がほとんど見られなかったようである。一九二一年二月号に載った成瀬無極の「上海印象記」が、『改造』誌上初の中国旅行記であった。そこ（注25）に見える、「阿片喫煙者」の「旅役者」、「田舎の路傍に蹲つて哀号する乞食」、「栄養不良らしい蒼白な顔を」する「小児」等の記述が読者の印象に残る。さらに結末では、「死毒ともいふべきものがこの国の体内に発酵しつゝある」と結論付けられている。

一九二四年に至ると、中国内戦の勃発をきっかけに、『改造』は中国への関心を高めていった。一〇月号から一二月号にかけて、三号連続で中国内戦の関連記事を掲載している。これほど中国への強い関心を示したのは、『改造』創刊以来初めてのことといえる。特に、一一月号では「対支国策討議」を特集し、日本の国益から、中国の内戦に干渉すべきかどうか等の問題について、多くの誌面を割いて議論（注26）を紹介している。そして、『改造』が再び中国に関心の目を向けるきっかけとなるのが、一九二五年に発生した、前述の「五・三〇事件」であった。

（三） 中国の社会運動と『改造』一九二五年六月号

「五・三〇事件」の引き金となった中国の社会運動は、前述の通り、一九二五年二月には発生した。にもかかわらず、労働者階級を重視する『改造』ですら、最初にそれに触れたのは一九二五年六月号である。

『改造』六月号の準備期にあたる五月に至ると、『大阪毎日新聞』を始めとするメディアが中国の社会運動について数多く報じるようになり、そうした中で、『改造』も関心の目を向け始めるに至った。『改造』六月号では、「無産政党の研究」と「労働総同盟紛乱の真相と批判」という二つの特集が組まれたが、これとは別に中国の社会運動にも触れられていた。すなわち、片山潜の「支那旅行雑感」と芥川龍之介の「北京日記抄」がそれである。まず、「支那旅行雑感」（注27）から確認しよう。

> 内外綿会社のストライキ騒ぎ、丁度僕が上海に上陸した時はそのストライキが始まつて居つた。
>
> （中略）
>
> 支那の労働運動は、益々発展の望みがある、第一今日学生は労働問題及社会問題の先駆者である。彼等は学問の自由、思想の自由及活動の自由を持つて居る、（中略）彼等は実際の首領となつて罷工の尽力をするのが常である。
>
> （中略）
>
> 支那紡績工場の職工は日本と違ひ寄宿舎制度でないから同盟罷工の時に女工に向かつて雇主なる工場が圧迫を加へて罷工を打破することは不可能である。彼等女工は寄宿住居でも出来る程の待遇を受ければ大いに雇主に充実となり労働能率もあがるであらうが、其生活状態は豚同然である、外来資本家が支那労働者を搾取する目的は最低賃金が主眼である。
>
> （中略）
>
> 僕が支那の為めに建策するならば、非常手段に出づるにあるのみ。非常手段を以つて支那の経済的及政治的独立を計るには革命に依るの外はない。

このように、この「旅行雑感」では「旅行雑感」とはいえ、たんなる紀行文とは様相を異にし、あくまでも中国の社会運動に焦点を当て、それを支持的する立場を表明している。ちなみに、明治から昭和前期にかけて「社会主義者」（注28）として活躍した片山潜は、「支那旅行雑感」を発表する一年前に、『改造』一九二四年四月号に、「日米の関係」（注29）という一文を発表し、伏字が付されるほど日本の帝国主義を痛烈に批判していた。

> 日本の帝国主義の××××××で、国民に対する信望を失つたものは、西比利出兵である。この××××××××る戦争に於いて七億の巨額が消費され、約五千の日本無産

者は西比利の鬼となつた。これらの兵士は××××、×××××××××××××××！かく帝国主義が労働者及び農民に対して強大な権力と抑圧力とを持つてゐることは、最近の大震災に於いて証明された。

最近日本の帝国主義は依然の特権と勢力を失ひ、国民間に不人望となつたが、然し未だ猶大いなる勢力を保ち、予算の大部分をその用途に奪つてゐる。数年来日本は予算の四割乃至四割五分を軍備に消費して来たが、今年度の陸海軍予算は全予算の三分の一以上である。之に依つて見れば日本の帝国主義は未だ決して死滅せず、次の戦争のために着々備へているのである。

このように、一九二四年にはすでに、反帝国主義を掲げていた社会主義者の片山潜は、その翌年に発生した「反帝運動」（稿者注：前掲　臼井勝美「五・三〇事件と日本」）とされる中国の社会運動に対し、支持する立場をとったことは自然な流れといえるだろう。つまり、改造社がこうした中国の社会運動を支持する片山潜の立場をあらかじめ理解した上でこの「支那旅行雑感」を掲載しただろうことは、見えやすい道理である。このように考えると、改造社が同じ一九二五年六月号に「北京日記抄」を掲載した企図が、どのようなものであったかが、次第に見えてくる。

以下、この点を明らかにするために、まずは中国の社会運動をめぐる『改造』の七、八月号の関係記事を概観しよう。

（四）　中国の社会運動と『改造』一九二五年七月号・八月号

『改造』一九二五年七月号の巻頭言は、「支那新人の「新支那運動」」（注30）というタイトルの下、中国の社会運動を中国の社会運動を評価している。

支那の人々が、特に支那の学生団が事あるごとに国権の回復、不平等条約の撤廃を高唱するのは、条理よりして当然のことで、我々も彼等の意中に同感を禁じ得ぬものがある。今回も上海事件を導火線として彼等は列強の支配下より離脱せんとするの策を樹て着々運動を進めつつあることは推察するに難くはない（後略）。

（前略）我国は今回の上海事件に関して決して英国の尻馬に乗ることなく、あくまで我国の権威を以つて隣邦に対すべきだ。支那に於ても決して強国の後援を頼みとすることなく或中傷に惑はさるなく、純乎たる一独立国の権威を以つて、自国の永遠の福利より算へて、此事件の解決に当らんことを冀求する。

これに引き続き、『改造』一九二五年八月号では、巻頭言「支那問題に対する問答」の外、小特集「支那反帝国主義運動の基本考察」（「支那の国権回復問題」、「対支列国借款の由来とその現状」、「支那労働運動についての一観察」、「国際関係の現状に対する支那人の不平と要求」）を組み、中国の社会運動に対し、同情的な態度を示している。「国際関係の現状

に対する支那人の不平と要求」は、中国の社会運動について、以下（注31）のように述べている。

（前略）支那人の外国人に対する感情も問題も、支那と列国と国際的不平等の関係も、支那人にとつては不平であり不満であり、これが改善を希望し要求するのは尤もである。私は何れの国の人間でも支那人を蔑視することは止すべきであると思ふ。従来多くの外国人の支那人に対して取つて居た態度は改むべきであると思ふ。また国際的関係にしても、現代の時勢に於て、往古支那を威圧した時代の関係を永く存在せしむることは宜しくない。一日も早くこれを改むべきであると思ふ。

このように、一九二五年七月号と八月号に至ると、『改造』の論調は中国の社会運動に対して、より同情的になってくる。こうした中、木下杢太郎の「支那南北記」（注32）が八月号に掲載されたことが、とりわけ注目される。

朝鮮を三週間ばかり歩いてゐるうちに北京の戦争が片付いたから北京に往つた。

（中略）

夏になると北京の街道には槐の葉が繁り、合歓木が紅花を開く。殊に秋の棗が情趣に満ちてゐる。此樹は支那には十三四種もあると云ふが、読書人でも済みさうな閑静な家の門から、累々と実を附けたその枝が出てゐるのは好箇の支那風景である。

（中略）

（前略）石家荘から太原府に往く鉄道で、支那の鉄道のうちが善く整頓した方であつたが、殊に料理は中々美味であつた。汽車線路に沿うた風景はすばらしいものである。

（中略）

（前略）太原府もかなり特色のある都会であつたが、この頃学生間には少しく排日の感情があるやうだつた。

（中略）

洛陽へ来たのは、無論龍門に往く為めであつた。龍門には先年一度往つたことがあるが、唯三四時間の視察に止まり遂に蔗境に居たらなかつたから今度は一二週間も逗留しようと思つたのである。処が洛陽の県吏が我々のそこに往くのを阻んだ。理由は途に土匪が多いからと云ふのである。土匪ではなく、恐らく呉佩孚旗下の兵匪であつたらう。

（中略）

わたくしは上海から北京に引き返し、そして天津から船に乗つて神戸へ帰つた。いよいよ支那と別れるという段になると、さすがに物悲しい気持ちがした。（後略）

一週間ばかり神戸にぶらぶらしてゐたが、日本人の生活は、予期に反して、わたく

しの好感をそそらなかつた。わたくしの心にはいつの間にか支那を愛する感情が湧いてゐた。（後略）

（前略）今度改造社がわたくしの朝鮮支那に関する雑稿を出版してくれるといふので、そのうちの一文として、支那南北の曾遊を記せんと欲しても、唯一巻の日記があるのみで、他に之が参考にすべきものは何もない。然しこの旅行記がないと、右の書の内容に脈絡の缺する憾みがあるので、甚だ気が引けるが、急いでこの稿を作つたのである。

この「支那南北記」では、木下杢太郎の好意的な思いが中国に寄せられているのみならず、中国学生の「排日の感情」や直隷派の軍閥であった「呉佩孚旗下の兵匪」など、当時の中国の時局に関することなども描き出されている。「支那南北記」は、木下の一九二〇年の中国訪問での見聞をまとめた旅行記である。『改造』が木下にこの旅行記の執筆を依頼し、一九二五年八月という時点でこれを掲載したのは、中国の社会運動によって高まった日本社会の中国への関心に応えようとしたからであろう。「急いでこの稿を作つた」と漏らす木下のこの発言には、「支那南北記」でこの『改造』の狙いに応えようとした姿が浮き彫りとなっている。ちなみに、その「支那南北記」をもとにして、翌年の一九二六年に、単行本『支那南北記』（注33）が、改造社によって発行された。こうしたことからも、当時日本で高まっていた中国への関心に応えようとする改造社の姿勢が読み取れよう（注34）。

以上をまとめると、一九二五年二月号から五月号までの『改造』は、中国の社会運動について一切言及していなかった。それはおそらく、一九二五年二月に発生した上海の内外綿工場のストライキが五月まではそれほど拡大していなかったことと関係するようである。六月号の準備期とみられる五月に至ると、中国の社会運動の激化に伴い、日本メディアの注目が集まる中、改造社はそれを支持する片山潜の「支那旅行雑感」を六月号に掲載した。しかし、「支那旅行雑感」はタイトルの通り、あくまで片山潜の雑感であり、社論を示す文章であるとはいえない。おそらく六月号という時点では、改造社自身の中国の社会運動に対する評価はまだ定まっていなかったように見える。一九二五年七月号と八月号になると、改造社の中国の社会運動に対する姿勢は、それ以前より明確になってくる。木下杢太郎の中国に対する好意的な「支那南北記」は、まさにこうした改造社のスタンスを受けた中、八月号に載せられたのではないか。

改造社の中国の社会運動に対する評価が定まっていなかった六月号の時点で、中国の社会運動を支持する片山潜の「支那旅行雑感」が掲載され、他方、中国に負の表象を持つ芥川の「北京日記抄」が同時に掲載されたことは、『改造』の中国の社会運動に対するスタンスの留保と不明確さを表わしているのではないか。異なった〈中国〉表象を持つ両作を、対立するものとして誌上に掲載しバランスをとるのは、前述の通り『改造』の特徴でもあり、対中国のスタンスが整わない中で両作を同時に掲載するのは無難な選択であったと思われる。

実際、中国に負の表象で捉えた『北京日記抄』の性格については、一九二五年四月の時点で、改造社が把握していた可能性がある。芥川が、一九二五年四月一三日に西川英次郎に送った書簡中には、「来月の「改造」に支那日記を出したから読んでくれ」（注35）と見え、「北京日記抄」はその時点ですでに仕上げられ、改造社に送られていたと推測できる。つまり、改造社としては、おそらく一九二五年四月の時点で「北京日記抄」の性格を捉えていたはずである。

このように改造社は、片山潜の「支那旅行雑感」と芥川の「北京日記抄」の性格を事前に把握した上で、一九二五年六月という時点で両作を意図的に同時掲載し、バランスをとったものと推測される。しかし、それは中国の社会運動に対する表象戦略の留保と不明確さの反映であったと理解されるのである。

注

1 上述は、鷺只雄編著『年表作家読本芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月　一一六～一一七頁）からの参照。

2 後に「新芸術家の眼に映じた支那の印象　芥川龍之介氏談」として、『日華公論』（八（八））（一九二一年八月）に掲載されている。また、「新芸術家の眼に映じた支那の印象」として、『芥川龍之介全集』（第八巻）（岩波書店　一九九六年六月）にも所収。

3 「新芸術家の眼に映じた支那の印象　芥川龍之介氏談」（『日華公論』（八（八））一九二一年八月）　八八頁。

4 今野哲「北京日記抄」（志村有弘編『芥川龍之介大事典』勉誠出版　二〇〇二年七月）六八八頁。

5 白井啓介「中国――『支那游記』と一九二一年上海・北京との不等号」（関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　その知的空間』　二〇〇四年一月）一三六頁。

6 王書瑋「芥川が中国旅行に求めたもの――「北京日記抄」――」（『千葉大学社会文化科学研究』（一一）　二〇〇五年九月）三二頁。

7 関口安義「北京日記抄」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版　二〇〇〇年六月）　五一一頁。

8 単援朝「芥川龍之介・癒しの東洋（一）――北京への「郷愁」を中心に――」（『崇城大学研究報告』（二九（一））　二〇〇四年三月）二八頁。

9 『講談社日本人名大辞典』（講談社　二〇〇一年一二月）　一三七四頁。

10 「自殺した芥川氏と北京　中野江漢氏談」（『北京週報』（燕塵社　一九二七年七月三一日）八七一頁。

11 中野江漢『北京繁昌記』（第一巻）（支那風物研究会　一九二二年八月）　三四～三五頁。

12 前掲注11同書　六三～六四頁。

13 『杜甫全集校注』（第九巻）（人民文学出版社　二〇一四年一月　五四一一頁）翻訳は稿者。

14 張明傑「底知れぬ古都――芥川龍之介と北京――」（『明海大学教養論文集』（一四）二〇〇二年一二月）　七三頁。

15 辜鴻銘の経歴に照合してみると、彼は「青年時代英国に留学する他、独逸、仏蘭西、伊太利も遊歴。帰国後、『四書』、『五経』などの中国経典に取り組む。その後、張之洞の幕僚に入り、外交問題を担当。各国の言語に精通しているにもかかわらず、（中略）保守的政治態度を持つ」（『中国歴代人名辞典』増訂本　江西教育出版社　一九八九年三月　一一八一頁　翻訳は稿者）人物であったという。

16 稿者の調べた限りでは、「胡蝶夢」と命名された昆曲は確認できなかった。「胡蝶夢」は恐らく「蝴蝶夢」の誤記ではないか。

17 青木正児「蝴蝶夢解題」（『古典劇大系』（第一六巻支那篇）（春秋社　一九二五年七月）四～六頁。

18 張蕾『芥川龍之介と中国――受容と変容の軌跡』（国書刊行会　二〇〇七年四月）一〇三頁。
19 『日本国語大辞典』第二版（第七巻）（小学館　二〇〇一年七月）　一四～一五頁。
20 「上海游記」と「江南游記」と「長江」（「長江游記」）における〈中国〉表象については、論文の前の三章で詳述している。
21 一九二五年四月二九日、芥川の小穴隆一宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第二〇巻）（岩波書店　一九九七年八月）一四〇頁。
22 臼井勝美「五・三〇事件と日本」（『アジア研究』（四（二））一九五七年一月）　四七～五六頁。
23 対立する言論を誌上に掲載し、バランスを重視するという『改造』の性格について、『改造』誌上において数多くの記事が見られる。例えば、中国との連携関係の必要性を巡り、安部磯雄「東洋人連盟批判　東洋人連盟必要なし」（『改造』一九二四年六月号）では、それを強く否定しているのに対し、孫文「大亜細亜主義の意義と日支親善の唯一策」（『改造』一九二五年一月号）では、日中連携の必要性を訴えており、同時期に対照的な内容の記事が掲載されている。
24 関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進編著『雑誌『改造』の四十年』（光和堂一九七七年五月）参照。
25 成瀬無極「上海印象記」（『改造』（三（二））一九二一年二月）　三四～三五頁。
26 討議は、長谷川如是閑、堀江帰一、吉野作造、永井柳太郎、米田実、福田徳三、小村俊三郎、山本実彦の間で行われている。（「対中国策討議」（『改造』（六（一一））一九二四年一一月）　一～三三頁。
27 片山潜「支那旅行雑感」（『改造』（七（六））一九二五年六月）　一〇〇～一〇六頁。
28 『日本人名大辞典』（講談社　二〇〇一年一二月）　四九九頁。
29 片山潜「日米の関係」（『改造』（六（四））一九二四年四月）　一九〇頁。
30 「支那新人の「新支那運動」」（『改造』（七（七））一九二五年七月）　巻頭。
31 米内山庸夫「国際関係の現状に対する支那人の不平と要求」（『改造』（七（八））一九二五年八月）　一四〇頁。
32 木下杢太郎「支那南北記」（『改造』（七（八））一九二五年八月号）　八三～一〇三頁。
33 「支那南北記」のほか、「朝鮮風物紀」、「満州聞見録」、「付録」等も添えられている。木下杢太郎『支那南北記』（改造社　一九二六年一月）参照。
34 「本書の上梓を見えるに至つたのは改造社の好意に由る所が多い。併せ記して謝意を表白する」（「小引」『支那南北記』一九二六年一月）という木下杢太郎の発言が見え、改造社が『支那南北記』の刊行に力を貸したと見られる。
35 一九二五年四月一三日、芥川の西側英次郎宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第二〇巻）（岩波書店　一九九七年八月）　一二二頁。

第五章　『支那游記』に見られる日本へのまなざし
――『改造』の読者意識との関わり――

第一節　芥川の中国体験と『支那游記』

北京の旅を終えた芥川龍之介は、一九二一年「七月一〇日、天津に行」った。天津は上海同様西洋化された植民地であることに失望し、北京が恋しくなる。「当初は山東省に入り、泰山、曲阜に行き、青島から帰国する予定であったが、暑さが甚だしいのと胃腸の具合がよくないこともあって帰心矢の如く、一二日夜、天津から南満州鉄道に乗り、奉天（瀋陽）、朝鮮の釜山経由で帰国した」。芥川は「二〇日頃、田端の自宅に帰った。門司から帰京の途中、大阪毎日新聞社に帰国の報告を」した（注1）。

芥川の中国体験はこのように幕を閉じた。中国体験に関連した作品として、既に前述したように、帰国後の一九二一年八月一七日から九月一二日まで、「上海游記」を『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に発表した。その翌年の一九二二年一月一日から二月一三日まで、「江南游記」を『大阪毎日新聞』に連載した。一九二四年九月には長江体験を記述する「長江」を『女性』に発表した。一九二五年六月には「北京日記抄」を『改造』に発表した。そして一九二五年一〇月に、上述のテクストを収録した単行本『支那游記』（改造社一九二五年一〇月）を刊行した。『支那游記』は、「自序」と「目録」及び本文（「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」、「雑信一束」）から成り立っている。まず「自序」について考察しよう。

第二節　「自序」に見られる改造社の読者意識

『支那游記』における「自序」は、以下のように記されている。

「支那游記」一巻は畢竟天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である。僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。それから日本へ帰つた後、「上海游記」や「江南游記」を一日に一回づつ執筆した。「長江游記」も「江南游記」の後にやはり一日に一回づつ執筆しかけた未成品である。「北京日記抄」は必しも一日に一回づつ書いた訣ではない。が、何でも全体を二日ばかりに書いたと覚えてゐる。「雑信一束」は画端書に書いたのを大抵はそのまま収めることにした。しかし僕のジヤアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、――少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確である。

大正十四年十月

芥川龍之介記

（「自序」　『支那游記』）

上述の「自序」は、重要な情報を二つ与えてくる。一つは『支那游記』と「大阪毎日新聞社との関わりである。すなわち、『支那游記』は最終的には改造社によって発行されたにもかかわらず、「大阪毎日新聞社の命」なしには、芥川の中国訪問が実現できなかったということである。『支那游記』の扉に置かれた、芥川を大阪毎日新聞社の社員として招聘し、彼の中国派遣に尽力した大阪毎日新聞社の薄田泣菫のために特筆した「薄田淳介に」という献辞も、『支那游記』と大阪毎日新聞社との関わりを語っているように思える。

いま一つ看過できないのは、「僕」が『支那游記』を、「天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist的才能」、あるいは「僕のジャアナリスト的才能」の産物として捉える視点である。この芥川によって言及された「ジャアナリスト」は、特別の意味があるようである。これについて、三谷憲正はまず一九二〇年代、三〇年代における「ジャアナリズム」の語意を検討し、次（注2）のように指摘している。

一九二四年（大一四）発行の大槻文彦編『言海　復興改版』（六合館）には「ジャアナリズム／ジャアナリスト」は採られていない。が、『新らしい言葉の字引』（寶業之日本社、一九二〇（大九）には「【ジャーナリスト】Journalist(英)新聞記者。雑誌記者」、また「【ジャーナリズム】も「新聞・雑誌」という語意を掲出する。一見すると現在の使われ方とさほど変わってはいないように感じられる。しかし、金澤庄三郎編『広辞林』（三省堂、一九二九[昭四]）には、「ジャーナリズム「Journalisim（名）㈠新聞雑誌の営業。㈡読者の愛読を芸術価値の標準とし、読者を喜ばすことを唯一の目的とする新聞雑誌向の主義」と定義される。後者をさらに強調すると、新村出編『辞苑』（博文館、一九三七（昭一二）のように「読者大衆に歓迎されることを価値の標準として、場当たり的な興味本位の記事を掲載する新聞・雑誌の経営上の一主義」といった語義にもなる。

このように、三谷は「読者を喜ばすことを唯一の目的とする新聞雑誌向の主義」、「読者大衆に歓迎されることを価値の標準として、場当たり的な興味本位の記事を掲載する新聞・雑誌の経営上の一主義」という当時における「ジャアナリズム」の語意を指摘している。その上で、彼は晩年の芥川文学における「ジャアナリズム」と「ジャアナリスト」の深意を、次（注3）のように考察する。

芥川は「西方の人」において「クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジャアナリズムである」とし、「クリストは彼のジャアナリズムのいつか大勢の読者のために持て囃されることを確信してゐた」とも言う。あるいはまた「彼のジャアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市価を占めてゐた」と語る。さらには「かう云ふクリストの収入は恐らくはジャアナリズムによつてゐたのであろう」とまで言い切っている。こうした語句すなわち「大勢の読者・最高の市価・収入」といった言説に着目すれば、

ここで言われる「ジャアナリズム」が既に見てきたように、〈作品〉を指すことはあきらかであろう。

（中略）

芥川の言う「ジャアナリズム」とは、新聞・雑誌記事と同次元に扱われる〈作品〉を指すとすれば、その書き手を「ジャアナリスト」と呼ぶことにはなんら不思議はない。すなわち〈彼クリストは書き手であると同時に作品の中の登場人物〉つまり〈短編小説の作者をしながら自伝的物語の主人公〉だったということを示しているにしかすぎない。

このように、三谷は晩年の芥川文学における「ジャアナリズム」と「大勢の読者・最高の市価・収入」との関わりを指摘している。そして、「ジャアナリスト」の語意として、芥川自身を彷彿とさせる、〈作品〉の「書き手」や「短編小説の作者」、「自伝的物語の主人公」を示すものとしている。

石割透は、「芥川自己をジャーナリストと規定し、ハイネやキリストもまたジャーナリストとすることで自己と重ね合わせた」ことを述べた上で、芥川の「文壇の流行作家として生きてきた悔恨を伴った自嘲」と、それに影響を齎した「大正中期からの読者層の拡大、大衆文芸の隆盛、マスコミの発達」等の要因を次（注4）のように指摘している。

『文芸雑談』（『文芸春秋』大正一六・一）で芥川は「あらゆる文芸形式中、小説ほど一時代の生活を表現出来るものはない。同時に又、一面では生活様式の変化と共に小説ほど力を失ふものはない」とし、「すると小説は、――怖らくは戯曲も頗るジャアナリズムに近いものである」と書いた。これ以降芥川の没する年には、『文芸的な、余り文芸的な』『西方の人』『続西方の人』らに、「ジャアナリズム」「ジャアナリスト」が頻出、芥川自己をジャーナリストと規定し、ハイネやキリストもまたジャーナリストとすることで自己と重ね合わせた。（中略）芸術は時代を超えて永遠であるという古典主義者的な信念の動揺、芥川のいかにも大正的な芸術家意識の崩壊がここから指摘できる。そこにはまた、文壇の流行作家として生きてきた悔恨を伴った自嘲も感じられる。新聞小説の流行、大正中期からの読者層の拡大、大衆文芸の隆盛、マスコミの発達などの「新時代」の現象が、こうした芥川の態度の背後にうかがえよう。

後藤明生も石割透と同じような認識を示しながら、晩年の芥川が自己をジャーナリストと規定する意味を、「消極的なニュアンス」のある「逆説的自嘲」として以下（注5）のように捉える。

「自分はジャーナリストだ」と言った意味も、「自分は所詮ジャーナリストみたいなものだ」というような芥川流の逆説的自嘲でもあると思うんです。つまり晩年になっ

て体も弱まっているし、そうするとだんだん気力も衰えて、文学、芸術、小説というものに対する絶対的な自信を喪った呆んやりした不安や、「これまで自分がやって来たことは、せいぜいジャーナリストぐらいがいいところじゃないか」という、消極的なニュアンスもあるにはあるでしょう（後略）。

以上の通り、晩年の芥川文学における「ジャアナリズム」は、「読者」、「最高の市価」、「収入」、「マスコミ」などを意味し、「ジャアナリスト」は「消極的なニュアンス」を込めた「文壇の流行作家として生きてきた悔恨を伴った自嘲」を意味するものであった。

その上で、芥川の晩年に刊行された『支那游記』に目を向けると、その「自序」に現れた、「僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist的才能」、「僕のジヤアナリスト的才能」と繰り返された「Journalist・ジヤアナリスト」は、反語的に、芥川の「消極的なニュアンス」を込めた「逆説的自嘲」を表わすものであるように読み取れる。すなわち、芥川は「文壇の流行作家として生きてきた悔恨を伴った自嘲」を用いて、「マスコミ」による「大勢の読者・最高の市価・収入」を求める『支那游記』の商業的な側面を示唆しているのではないだろうか。こうして提起された『支那游記』の側面は、第四章で触れた一九二五年に発生した五・三〇事件を中心とする中国の社会運動によって、日本で高まっていた中国への関心に応えようとする改造社の読者目線の戦略と繋がっているといえるだろう。

そもそも、中国の社会運動と『支那游記』の刊行とは深く関わっていた。『改造』一九二五年「八月号の「編輯だより」に、早くも「芥川龍之介氏の『支那游記』も八月早々発行される」という予告が見られる。これは、『支那游記』の刊行が五・三〇運動（稿者注：五・三〇事件）をめぐるメディア報道とリンクして企画されたことの貴重な証拠になろう」（注6）という。

第三節　『支那游記』にまとめられたテクスト

「自序」に引き続き、「上海游記」、「江南游記」、「長江」、「北京日記抄」が『支那游記』に収録されている。初出に比べると、「上海游記」、「江南游記」と「北京日記抄」は、殆ど異同がないのに対し、「長江」はタイトル自体に異同が見られる。

「長江」は、初出の「長江（小説）」（『女性』一九二四年九月）としてではなく、「長江游記」として『支那游記』に収録された。その原因は恐らく、『支那游記』に収録された「上海游記」、「江南游記」という他の「游記」と一貫性を保つために、「長江」もこれらの二作品の延長線上に置こうとした芥川のねらいがあったと思われる。このように考えていくと、「長江」は「長江游記」として『支那游記』に収録された際、第三章で触れた〈小説〉的性格が捨象され、〈紀行文〉的性格が新たに付与されたといってもよいだろう。

こうした『支那游記』に所収された「長江游記」では、タイトルの他、さらに二か所が改められた。一つは、初出の「長江」の巻頭に描かれていた挿絵が削除されたことである。その挿絵には、細長い中国の「烏蓬船」（稿者注：半円形の竹片や細い竹で作る苫で覆った

中型木造船、長江流域をよく航行した船として知られる）のような小舟の先頭に立ち、長い櫓を操る男が描かれていた。彼は前方を確認しながら、その眼前に現れた尽きることなく綿々と続く雲に分け入って、船を前進させているように見える。この「長江」に付された挿絵はまるで我々を現実的な世界から、絵の中に描かれた虚構の世界に導いているかのようである。こうした現実的な世界から絵の中の虚構の世界へと導こうとするこの挿絵は、第三章で触れた〈小説〉的性格を滲ませる「長江」の読み方に暗合したものであろう。

図三　『女性』（一九二四年九月号）に掲載された「長江」

長江

芥川龍之介

—女性—

これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である。かう云ふ目まぐるしい世の中に三年前の紀行なぞは誰にも興味を與へないかも知れない。が、人生を行旅とすれば、畢竟あらゆる追憶は數年前の紀行である。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懐しがつてゐた。しかし今は日本に、——炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懐しがつてゐる。長江を？——いや、長江ばかりではない。蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懐しがつてゐる。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この私の追憶癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

もう一つ注意すべき点は、「長江」の冒頭部の内容を、「長江游記」は「前置き」として設けていることである。

前置き

これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である。かう云ふ目まぐるしい世の中に、三年前の紀行なぞは誰にも興味を与へないかも知れない。が、人生を行旅とすれば、畢竟あらゆる追憶は数年前の紀行である。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懐しがつてゐた。しかし今は日本に、——炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懐しがつてゐる。長江を？——いや、長江ばかりではない、蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懐しがつてゐる。私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」に対するやうに、この私の追憶癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

（前置き　「長江游記」）

周知のように、「前置き」とは、「本題に入る前に述べること。またその言葉や文章」（注7）である。「長江游記」は、第三章で触れた「長江」の〈小説〉的性格を示唆する冒頭部を、「前置き」として本題から切り取ったのである。換言すれば「前置き」を設けることによって、冒頭部における〈小説〉的性格を滲ませる内容が「長江游記」の本題ではない、という新たな読み方を読者に与えるのである。

第四節　「雑信一束」に見られる改造社の読者意識

『支那游記』の最後に置かれた「雑信一束」は以下のように記される。

一　欧羅巴的漢口

この水たまりに映つている英吉利の国旗の鮮さ、――おつと、車子にぶつかるところだつた。

二　支那的漢口

彩票や麻雀戯の道具の間に西日の赤あかとさした砂利道。其処をひとり歩きながら、ふとヘルメツト帽の庇の下に漢口の夏を感じたのは、――

ひと籃かごの暑さ照りけり巴旦杏

三　黄鶴楼

甘棠酒茶楼と言う赤煉瓦の茶館、惟精顕真楼と言うやはり赤煉瓦の写真館、――その外には何も見るものはない。尤も代赭色の揚子江は目の下に並んだ瓦屋根の向うに浪だけ白じらと閃かせてゐる。長江の向うには大別山、山の頂には樹が二三本、それから小さい白壁の禹廟、……

僕――鸚鵡洲は？

宇都宮さん――あの左手に見えるのがそうです。尤も今は殺風景な材木置場になつてゐますが。

四　古琴台

前髪を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めてゐる。疎まばらな蘆や蓮はすの向うに黒ぐろと光つた曇天の水を。

五　洞庭湖

洞庭湖は湖とは言ふものの、いつも水のある次第ではない。夏以外は唯泥田の中に川が一すぢあるだけである。――と言ふことを立証するやうに三尺ばかり水面を抜い

た、枯枝の多い一本の黒松。

六　長沙

往来に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鶏さへ僕を脅すやうに「アクタガワサアン！」と鬨をつくる町、……

七　学校

長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰う。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰うと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もここの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起した後ですから」！

八　京漢鉄道

どうもこの寝台車の戸に鍵をかけただけでは不安心だな。トランクも次手に凭せかけて置こう。さあ、これで土匪に遇つても、――待てよ。土匪に遇つた時にはティツプをやらなくつても好いものかしら？

九　鄭州

大きい街頭の柳の枝に辮髪が二すぢぶら下つてゐる。その又辮髪は二すぢとも丁度南京玉を貫いたやうに無数の青蠅を綴つている。腐つて落ちた罪人の首は犬でも食つてしまつたのかも知れない。

十　洛陽

モハメツト教の客桟の窓は古い卍字の窓格子の向うにレモン色の空を覗かせてゐる。夥しい麦ほこりに暮れかかつた空を。

麦ほこりかかる童子の眠りかな

十一　龍門

黒光りに光つた壁の上に未に仏を恭敬してゐる唐朝の男女の端麗さ！

十二　黄河

汽車の黄河を渡る間に僕の受用したものを挙げれば、茶が二椀、棗なつめが六顆、前門牌の巻煙草が三本、カアライルの「仏蘭西革命史」が二頁半、それから――蠅を十一匹殺した！

十三　北京

甍の黄色い紫禁城を繞つた合歓や槐の大森林、――誰だ、この森林を都会だなどと言うのは？

十四　前門

僕――おや、飛行機が飛んでいる。存外君はハイカラだね？

北京――どう致しまして。ちょつとこの前門を御覧下さい。

十五　監獄

京師第二監獄を参観。無期徒刑の囚人が一人、玩具の人力車を拵へてゐた。

十六　万里の長城

居庸関、弾琴峡等を一見せる後、万里の長城へ登り候ところ、乞食童子一人、我等の跡を追いつつ、蒼茫たる山巒を指して、「蒙古！　蒙古！」と申し候。然れどもその偽なるは地図を按ずるまでも無之候。一片の銅銭を得んが為に我等の十八史略的ロマン主義を利用するところ、まことに老大国の乞食たるに愧ぢず、大いに敬服仕り候。但し城壁の間にはエエデル・ワイズの花なども相見え、如何にも寨外へ参りたるらしき心もちだけは致し候。

十七　石仏寺

芸術的エネルギイの洪水の中から石の蓮華が何本も歓喜の声を放つてゐる。その声を聞いてゐるだけでも、――どうもこれは命がけだ。ちょつと一息つかせてくれ給え。

十八　天津

僕――こう言う西洋風の町を歩いてゐると、妙に郷愁を感じますね。

西村さん――お子さんはまだお一人ですか？

僕――いや、日本へぢやありません。北京へ帰りたくなるのですよ。

十九　奉天

丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いてゐるのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に賛成してしまう所だつた。

二十　南満鉄道

高粱の根を葡ふ一匹の百足。

（「雑信一束」　『支那游記』）

上記の「雑信一束」で、長江の旅が最初に描かれていることが注目される。「雑信一束」二〇章のうち、前の七章では、「古琴台」、「洞庭湖」、「天心第一女子師範学校」、「京漢鉄道」等の長江体験が記されている。「雑信一束」が上海体験、江南体験からではなく、長江体験の記述から始まり、それに大きく紙幅を割いたことからは、「自序」に「未成品」と記された「長江」（「長江游記」）の後にこれを置いて、「長江」（「長江游記」）の内容を充実させようとした芥川の狙いが読み取れる。

「雑信一束」には、「長江」（「長江游記」）のみならず、「上海游記」、「江南游記」、「北京日記抄」に連動しようとする動きも見られる。「前髪を垂れた小妓」（四　古琴台「雑信一束」）は、「上海游記」における「額に劉海（前髪）が下っている」「愛春」（十五　南国の美人（上）「上海游記」）等の小妓を彷彿させる。そして、「一片の銅銭を得んが為に我等の十八史略的ロマン主義を利用する」「老大国の乞食」（十六　万里の長城「雑信一束」）は、「銀貨を貰った上にも、また我々の財布の口を開けさせる心算で」「乞食のように手を出している」「花売りの婆さん」（四　第一瞥（下）「上海游記」）を連想させる。同様に、「赤煉瓦の茶館」と「赤煉瓦の写真館」（三　黄鶴楼「雑信一束」）は、第二章で触れた「江南游記」に散見される「煉瓦建」を思わせる。「前門」（十四　前門「雑信一束」）、「京師第二監獄」（十五　監獄「雑信一束」）、「万里の長城」（十六　万里の長城「雑信一束」）等の北京についての描写は、「北京日記抄」に記された北京体験と呼応する記述として受け止めることができる。この他、北京訪問以降の「天津」（十八　天津「雑信一束」）や「奉天」（十九　奉天「雑信一束」）における中国体験も描き出されている。

以上をまとめると、「雑信一束」を、「上海游記」、「江南游記」、「長江」（「長江游記」）、「北京日記抄」に連動させた他、長江体験と北京以降の中国体験をさらに「雑信一束」に取り込もうとした芥川の狙いが確認できるだろう。

それだけでなく、「雑信一束」は、第四章で触れた一九二五年に発生した、五・三〇事件を中心とする中国の社会運動によって、日本で高まった読者の中国への関心に応えようとする改造社の戦略に関わっているように思える。「雑信一束」と五・三〇事件との関連について、秦剛は次（注８）のように指摘する。

（前略）『支那游記』収録の未発表の「雑信一束」が書かれたのは、単行本発行が決定された後の八月前後だったと考えられる。実のところ、「雑信一束」の内容は、同時期の五・三〇運動との間に、ある対応性も見出されるのである。

五・三〇運動は日系紡績企業の労働闘争に発端し、イギリス警察が南京路の惨劇を作ったことで口火が切られたために、民衆運動が「排日」から「排英」へと抗議対象が切り替えられていくような動きがあった。それに対して、「雑信一束」は「英吉利の国旗」が靡く「欧羅巴的漢口」（一）から書き起こされ、「高粱の根を葡ふ一匹の百足」で譬える「南満鉄道」（二十）で締めくくられている。その間に、「女学生は皆排日の

為に鉛筆や何かを使はない」という長沙の学校での見聞（七　学校）や奉天の停車場で見かけた「四五十人」の日本人に対して、「もう少しで黄禍論に賛成してしまふ所だつた」（十九　奉天）という日本人批判が差し挟まれている。南から北に至るまで中国各地の反植民地的な風景を印象的に点描したのは、一九二一年に見た中国各地の状況と、五・三〇事件が起きた現時点の中国の反帝国主義運動との連続性を探ろうとする意識が働いたのではあるまいか。

秦剛の指摘した通り、「雑信一束」において、「南から北に至るまで中国各地の反植民地的な風景を印象的に点描したのは、一九二一年に見た中国各地の状況と、五・三〇事件が起きた現時点の中国の反帝国主義運動との連続性を探ろうとする意識が働いたのでは」と読み取れる。こうした芥川の動きが記された『支那游記』は、第四章で触れた木下杢太郎の『支那南北記』と、まるで一つのわだちから出たようなものである。

第四章で指摘したように、「支那南北記」（『改造』一九二五年八月号）は、木下杢太郎が一九二〇年に中国を訪問した際の見聞をまとめた旅行記である。にもかかわらず、『改造』が木下にこの旅行記の執筆を依頼し、掲載したのは一九二五年八月という時点であった。これは五・三〇事件を中心とする中国の社会運動によって高まった日本読者の中国への関心に応えようとしたからであろう。したがって、「支那南北記」には、中国学生の「排日の感情」や直隷派の軍閥であった「呉佩孚旗下の兵匪」など、中国の時局に関することも描き出されている。そして、「急いでこの稿を作つた」と漏らす木下のこの発言には、「支那南北記」でこの『改造』の狙いに応えようとした姿が浮き彫りとなっていた。さらに、その「支那南北記」をもとにして、翌一九二六年一月に、単行本『支那南北記』が、改造社によって発行された。こうしたことから、当時日本で高まっていた読者の中国への関心に応えようとした改造社の戦略が読み取れよう。

『支那游記』の刊行は、『支那南北記』とよく類似している。『支那游記』が改造社によって発行されるまでの経緯を振り返ってみよう。第四章で述べた通り、芥川の中国体験の関連テクストとして『改造』に発表されたのは、「北京日記抄」（『改造』一九二五年六月号）であった。「北京日記抄」は五・三〇事件を中心とする中国の社会運動と深く関わっている。というのは、「北京日記抄」が発表された一九二五年六月に、改造社の中国の社会運動に対するスタンスはまだ定まっていなかったようだからである。その中で、中国の社会運動を支持する片山潜の「支那旅行雑感」と、負の〈中国〉表象を持つ芥川の「北京日記抄」が同時に誌上に掲載されたことは、『改造』の中国の社会運動に対するスタンスの留保と不明確さを表わしていた。そして、一九二五年七月号と八月号では、『改造』の中国の社会運動に対する好意的姿勢が、明確になってきた。木下杢太郎の中国に対する好意的な「支那南北記」は、まさにこうした改造社のスタンスを受けて、八月号に載せられたのである。

「支那南北記」が収録された『支那南北記』に先んじて、「北京日記抄」が収録された『支那游記』は、一九二五年一〇月に改造社から発行された。『支那游記』の発行に合せて作ら

れたと見られる「雑信一束」では、「排日の為に鉛筆や何かを使はない」中国の「女学生」（「七　学校」）や「京漢鉄道」の「土匪」（「八　京漢鉄道」）の襲撃に対する心配等、当時中国の時局に関することなども描かれていた。それは、秦剛の指摘した「雑信一束」に見られる「一九二一年に見た中国各地の状況と、五・三〇事件が起きた現時点の中国の反帝国主義運動との連続性」だといえるだろう。

しかし一方で、「雑信一束」には、〈中国〉表象をめぐる「北京日記抄」との相違も記されている。負の〈中国〉表象を持つ「北京日記抄」と異なり、「雑信一束」では、明確的に日本の植民地政策を批判していたことを見逃してはならない。「雑信一束」の結末部、すなわち、『支那游記』の結末部に付された、「もう少しで黄禍論に賛成してしまふ所だつた」（十九　奉天）と婉曲に述べられる日本人批判と、「高粱の根を葡ふ一匹の百足」として比喩される「南満鉄道」（二十　南満鉄道）は、いうまでもなく、日本の中国に対する植民地政策を批判していると見なしてもよい。こうした『支那游記』に見られる日本批判は、一九二五年七月、八月以降、中国の社会運動に対する改造社の好意的なスタンスに合せたものと受け取ることができる。

当然「雑信一束」に記されたのは、中国への好意に基づく日本批判ばかりではない。「チフスやマラリアの流行する」長沙（「六　長沙」）、や鄭州で見かけた「腐つて落ちた罪人の首」（「九　鄭州」）など、中国の負のイメージを喚起する表象が描かれている。しかも、こうした中国への負の表象は、前述したように「上海游記」、「江南游記」、「長江」（長江游記）、「北京日記抄」を通じて繰り返して描かれている。「雑信一束」では、「上海游記」、「江南游記」、「長江」（「長江游記」）、「北京日記抄」に見られる中国に対する負の表象を継承しているだけでなく、新たに中国への好意に基づく日本批判も加えている。このことは、一九二五年七月、八月以降、中国の社会運動に対して、改造社の好意的なスタンスが明確になっていったことと関わっているだろう。

第五節　『支那游記』に見られる〈中国〉表象と〈日本〉との関わり

『支那游記』に収載された「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」と新たに添えられた「雑信一束」に見られる〈中国〉表象について、次のようにまとめられる。

「上海游記」では、中国旅行を実現した「私」が異境である中国を舞台に、在中日本人と触れ合ったことによって、日本人としての強いアイデンティティが構築されたことが確認できる。それにしたがって、「上海游記」で主として描かれたのは、負の〈中国〉表象であった。こうした〈中国〉表象の背景には、一九二一年に「上海游記」が発表された当時の、「日本」の利益を偏重」する『大阪毎日新聞』の対中国のスタンスが浮上してくる。

「江南游記」では、「社命」といわれる大阪毎日新聞社の要請に拘束された中で、「私」の中国へのある程度の同情や感傷を漏らした姿が確認できた。ところが、こうした「私」の姿は中国を愛し、日本を批判（反日本帝国主義・反植民地政策）する立場によるものとしては、受け止められない。「江南游記」では、中国に対する同情や感傷が非常に限定的で

あったのに対し、揶揄的な負の〈中国〉表象は「上海游記」以来一貫しているといえる。それは、啓蒙者として「古き支那」を批判し、帝国列強から齎された「新様と新意」に溢れた「新しき支那」を観察してほしいとする大阪毎日新聞社の要請があったことに関係しているだろう。

「長江」の冒頭部では、「長江を懐しがつてゐる」という好意的な〈中国〉表象が描かれている。それは、「文学」を以て「大震大火災の記念日が近づく」「不安と焦燥と恐怖との夏」を救おうとする『女性』の編集方針と関係しているだろう。すなわち、時の経過に伴い、「嫌悪に堪えな」かった長江への思いが好意的になったと提示した「私」の、関東大震災を経験した人々に、同様な「追憶」を以て、大震災の恐怖と不安を乗り越えられるとアピールする姿が浮上してくる。こうして、『女性』の編集方針に応えようとした芥川の狙いが現われるのである。「長江」が「長江游記」として改造社発行の『支那游記』に収載された際、「前置き」の設定によって、冒頭部に見られる好意的な〈中国〉表象が弱められてしまう。それにしたがい、「上海游記」、「江南游記」に見られる揶揄的な負の〈中国〉表象が維持されることになる。もとより、「長江」（「長江游記」）の冒頭部以外の本文に記された中国への「痛烈な批判」（注9）は「上海游記」と「江南游記」で描かれる〈中国〉表象に繋がっている。

「北京日記抄」に見られる中国に対する負の表象は、『支那游記』の刊行と関わっているように思われる。第四章で触れたように、「北京日記抄」を執筆中であった一九二五年四月二九日に、芥川は親友の小穴隆一に書簡を送った。そこには「悪銭少々同封す。支那旅行記の装幀料と思はれたし」（注10）という記述があることから、その時点で、『支那游記』を発表することになっていた事情が窺える。こうした中で、中国に対する負の表象が「北京日記抄」にも描かれた理由としては、「上海游記」、「江南游記」、「長江」（「長江游記」）に示された対〈中国〉表象との一貫性を保つためであっただろうことを推測できる。

『支那游記』に新たに添えられた「雑信一束」には、初めて中国への好意に基づく日本の植民地政策に対する批判が描き出されている。こうした動きは、一九二五年七月、八月以降、五・三〇事件を中心とする中国の社会運動に対する改造社の好意的なスタンスに合せたものと読み取れる。そもそも『支那游記』の刊行は、中国の社会運動によって日本で高まった読者の中国への関心に応えようとする改造社の戦略と深く関わっていた。

以上、本論は芥川の中国訪問の関連テクストにおける〈中国〉表象とその初出メディアとの関わりについて考察した。今後の課題としては、芥川を軸としながら、夏目漱石、徳富蘇峰、横光利一等の近代日本知識人における中国訪問とその関連テクストについて、研究を進めたい。

注

1 鷺只雄編著『年表作家読本芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月　一一八頁）参照。

2 三谷憲正「ジャーナリズム――「西方の人」を中心として」（『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介その知的空間』二〇〇四年一月）　二三〇頁。

3 前掲注2同書　二三三～二三四頁。

4 石割透「ジャアナリズム」（菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』増訂版 明治書院　二〇〇一年七月）　二四〇頁。

5 後藤明生「インタビュウ：後藤明生氏に聞く　イエス＝ジャーナリスト論、その他」（『国文学 解釈と教材の研究』（四一（五））一九九六年四月）　一二頁。

6 秦剛「改造社による中国言説の構築――『支那游記』から『大魯迅全集』の刊行に至るまで」（篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』　恵泉女学園大学平和文化研究所　二〇一五年三月）　五〇頁。

7 『日本国語大辞典』第二版（第一二巻）（小学館　二〇〇一年一二月）三一〇頁。

8 前掲注6同書　五〇～五一頁。

9 施小煒「長江游記」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版　二〇〇〇年六月）　三六五頁。

10 一九二五年四月二九日、芥川の小穴隆一宛の書簡（『芥川龍之介全集』（第二〇巻）（岩波書店　一九九七年八月）　一四〇頁。

参考文献

〈単行本〉

・日高佳紀『谷崎潤一郎のディスクール』（双文社出版　二〇一五年九月）
・篠崎美生子・施小煒編『芥川龍之介と上海』（恵泉女学園和平文化研究所　二〇一五年三月）
・和田博文・徐静波・西村将洋・宮内淳子・和田桂子『上海の日本人社会とメディア』（岩波書店　二〇一四年一〇月）
・陳凌虹『日中演劇交流の諸相』（思文閣出版　二〇一四年八月）
・鈴木暁世『越境する想像力』（大阪大学出版会　二〇一四年二月）
・『杜甫全集校注』（第九巻）（人民文学出版社　二〇一四年一月）
・庄司達也・中沢弥・山岸郁子編『改造社のメディア戦略』（双文社出版　二〇一三年一二月）
・菊池良生『検閲帝国ハプスブルク』（河出書房新社　二〇一三年四月）
・小林洋介『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム』（笠間書院　二〇一三年二月）
・孔月『芥川龍之介中国題材作品と病』（学術出版会　二〇一二年九月）
・井上祐子『日清・日露戦争と写真報道』（吉川弘文館　二〇一二年七月）
・関口安義『芥川龍之介新論』（翰林書房　二〇一二年五月）
・飯塚浩一・堀啓子・辻原登・尾崎真理子・山城むつみ『新聞小説の魅力』（東海大学出版会　二〇一一年一二月）
・厳中平『中国綿紡織史稿』（商務印書館　二〇一一年一二月）
・劉建輝『増補　魔都上海』（筑摩書房　二〇一〇年八月）
・陳祖恩『上海に生きた日本人』（大修館書店　二〇一〇年七月）
・川本皓嗣・上垣外憲一編『一九二〇年代東アジアの文化交流』（思文閣出版　二〇一〇年三月）
・紅野謙介『検閲と文学』（河出書房新社　二〇〇九年一〇月）
・奥野久美子『近代文学研究叢刊（四二）　芥川作品の方法』（和泉書院　二〇〇九年七月）
・瀬崎圭二『流行と虚栄の生成』（世界思想社　二〇〇八年三月）
・『茶大百科』（一）（農山漁村文化協会　二〇〇八年三月）
・関肇『新聞小説の時代』（新曜社　二〇〇七年一二月）
・紅野敏郎・日高昭二編『「改造」直筆原稿の研究』（雄松堂出版　二〇〇七年一〇月）
・関口安義『世界文学としての芥川龍之介』（新日本出版社　二〇〇七年六月）
・張蕾『芥川龍之介と中国――受容と変容の軌跡』（国書刊行会　二〇〇七年四月）
・井上聰『横光利一と中国』（翰林書房　二〇〇六年一〇月）
・井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』（有斐閣　二〇〇五年一二月）
・森時彦編『在華紡と中国社会』（京都大学学術出版会　二〇〇五年一一月）

・三宅昭三文責『薄田泣菫宛　芥川龍之介書簡解読と解説』（薄田泣菫顕彰会　二〇〇五年一一月）
・志保田務・山田忠彦・赤瀬雅子編著『芥川龍之介の読書遍歴』（学芸図書株式会社　二〇〇三年一二月）
・田村修一『芥川龍之介青春の軌跡』（晃洋書房　二〇〇三年一〇月）
・佐々木雅發『芥川龍之介文学空間』（翰林書房　二〇〇三年九月）
・西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（中央公論新社　二〇〇三年七月）
・春原昭彦『日本新聞通史』（新泉社　二〇〇三年五月）
・紅野謙介『投機としての文学』（新曜社　二〇〇三年三月）
・村松梢風『文化人の見たアジア（九）　魔都』（ゆまに書房　二〇〇二年九月）
・志村有弘編『芥川龍之介大事典』（勉誠出版　二〇〇二年七月）
・『岩波講座近代日本文化史（五）　編成されるナショナリズム』（岩波書店　二〇〇二年三月）
・『日本人名大辞典』（講談社　二〇〇一年一二月）
・『講談社日本人名大辞典』（講談社　二〇〇一年一二月）
・上海租界志編纂委員会編『上海租界志』（上海社会科学院出版社　二〇〇一年一一月）
・菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』増訂版（明治書院　二〇〇一年七月）
・翟新『東亜同文会と中国』（慶應義塾大学出版会　二〇〇一年一月）
・山本芳明『文学者はつくられる』（ひつじ書房　二〇〇〇年一二月）
・『日本国語大辞典』第二版（第一巻～別巻）（小学館　二〇〇〇年一二月～二〇〇二年一二月）
・山敷和男『芥川龍之介の芸術論』（現代思潮新社　二〇〇〇年七月）
・関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版　二〇〇〇年六月）
・李相哲『満州における日本人経営新聞の歴史』（凱風社　二〇〇〇年五月）
・松澤信祐『新時代の芥川龍之介』（洋々社　一九九九年一一月）
・『百菓辞典』第四版（東京堂出版　一九九九年八月）
・ハインツ・ゴルヴィツァー著・瀬野文教訳『黄禍論とは何か』（草思社　一九九九年八月）
・山崎甲一『芥川龍之介の言語空間』（笠間書院　一九九九年三月）
・関口安義『芥川龍之介の復活』（洋々社　一九九八年一一月）
・佐藤卓己『現代メディア史』（岩波書店　一九九八年九月）
・津金澤聰廣『現代日本メディア史の研究』（ミネルヴァ書房　一九九八年六月）
・赤祖父哲二『メディアと近代』（星雲社　一九九七年六月）
・セシル・サカイ著・朝比奈弘治訳『日本の大衆文学』（平凡社　一九九七年二月）
・津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』（同文館　一九九六年七月）
・佐々木英昭編『異文化への視線』（名古屋大学出版会　一九九六年三月）

・平岡敏夫『芥川龍之介と現代』（大修館書店　一九九五年七月）
・有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造』（東京出版　一九九五年四月）
・栗田尚弥『上海東亜同文書院』（新人物往来社　一九九三年一二月）
・宮坂覺編『日本文学研究資料新集（一九）　芥川龍之介理智と抒情』（有精堂　一九九三年六月）
・鷺只雄編著『年表作家読本芥川龍之介』（河出書房新社　一九九二年六月）
・伊藤憲一監修『日本のアイデンティティ』（日本国際フォーラム／フォレスト出版　一九九二年二月）
・彌吉三長『書誌書目シリーズ（二六）：未刊史料による日本出版文化（第六巻）　近代文芸社会学』（ゆまに書房　一九九一年一月）
・川本三郎『大正幻影』（新潮社　一九九〇年一〇月）
・『中国歴代人名辞典』増訂本（江西教育出版社　一九八九年三月）
・『園芸植物大事典』（三）（小学館　一九八九年二月）
・岡満男『大阪のジャーナリズム』（大阪書籍　一九八七年六月）
・内川芳美・新井直之編『日本のジャーナリズム』（有斐閣　一九八三年一月）
・前田愛『都市空間のなかの文学』（筑摩書房　一九八二年一二月）
・塩澤実信『雑誌をつくった編集者たち』（廣松書店　一九八二年九月）
・高村直助『近代日本綿業と中国』（東京大学出版会　一九八二年六月）
・小野秀雄『日本新聞発達史』（五月書房　一九八二年二月）
・阿部洋編『日中関係と文化摩擦』（厳南堂書店　一九八二年一月）
・西川博史『日本帝国主義と綿業』（ミネルヴァ書房　一九八一年一月）
・関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進編著『雑誌『改造』の四十年』（光和堂　一九七七年五月）
・吉田精一・武田勝彦・鶴田欣也編著『芥川文学海外の評価』（早稲田大学出版部　一九七二年六月）
・毎日新聞百年史刊行委員会編集『毎日新聞百年史』（毎日新聞社　一九七二年二月）
・山本文雄編著『日本マス・コミュニケーション史』（東海大学出版会　一九七〇年九月）
・栗田確也『出版人の遺文　改造社山本実彦』（栗田書店　一九六八年六月）
・吉田精一『芥川龍之介』（三省堂　一九四二年一二月）
・波多野乾一『支那劇大観』（大東出版社　一九四〇年一〇月）
・小林善八『文学概論』（文芸社　一九二八年九月）
・波多野乾一『支那劇五百番』増訂版（支那問題社　一九二七年八月）
・本間久雄『文学概論』（東京堂書店　一九二六年一一月）
・木下杢太郎『支那南北記』（改造社　一九二六年一月）
・益田道三『文学概論』（聚芳閣　一九二五年一〇月）
・島屋政一『大阪毎日新聞社大観』（大阪出版社　一九二四年一一月）

・中野江漢『北京繁昌記』（第一巻）（支那風物研究会　一九二二年八月）
・横山有策『文学概論』（久野書店　一九二一年九月）
・井上紅梅『支那風俗』（巻下）（日本堂書店　一九二一年五月）
・井上紅梅『支那風俗』（巻中）（日本堂書店　一九二一年四月）
・井上紅梅『支那風俗』（巻上）（日本堂書店　一九二〇年一二月）
・塩谷温『支那文学概論講話』（大日本雄弁会　一九一九年五月）

〈論文・雑誌・新聞記事等〉

・宋武全「芥川龍之介の北京観劇について」（『文化共生学研究』（一六）　二〇一七年三月）
・宋武全「芥川龍之介「北京日記抄」と改造社」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』（四二）　二〇一六年一一月）
・宋武全「「北京日記抄」に見られる〈中国〉表象――書簡、メモ類に示された北京の印象との差異から――」（『芥川龍之介研究』（一〇）　二〇一六年三月）
・王成・小峯和明編『東アジアにおける旅の表象』（『アジア遊学』（一八二）　勉誠出版　二〇一五年四月）
・宋武全「在中日本人と芥川龍之介の上海訪問」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』（三九）　二〇一五年三月）
・顔淑蘭「芥川龍之介『支那游記』と夏丏尊訳「中国遊記」の問題系」（『日本文学』（六三（六）　二〇一四年六月）
・呉佳佳「芥川の中国体験――「支那遊記」を中心に」（『札幌大学総合論叢』（三六）二〇一三年一二月）
・顔淑蘭「「声」の転用――夏丏尊による『支那游記』抄訳の問題系――」（『文学・語学』（二〇六）　二〇一三年七月）
・施小煒「芥川龍之介における「江南」」（『江南文化と日本――資料・人的交流の再発掘――』国際日本文化研究センター　二〇一二年三月）
・西山康一〈講演〉「芥川龍之介の中国体験」（『時代の中の異文化交流』　岡山大学文学部二〇一一年三月）
・姚紅「芥川龍之介と中国の伝統演劇――同時代中国の知識人との比較を通して――」（『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』（一一）　二〇一一年三月）
・小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（下）」（『琉球大学教育学部紀要』（七八）　二〇一一年二月）
・小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（中）」（『琉球大学教育学部紀要』（七七）　二〇一〇年八月）
・姚紅「芥川龍之介と上海における日本語新聞――書簡に収蔵された新聞切り抜きをめぐって」（『文学研究論集』（二八）　二〇一〇年二月）
・魏大海「芥川龍之介の『支那遊記』――章炳麟とのギャップを中心に」（『国際日本学研

究叢書（一一）　異文化としての日本――内外の視点――』（法政大学国際日本学研究センター　二〇一〇年三月）
・徐暁純「日本人作家の見た一九二〇年代の上海――芥川龍之介と村松梢風との比較」（『千里山文学論集』（八二）　二〇〇九年九月）
・小澤保博「芥川龍之介「支那游記」研究（上）」（『琉球大学教育学部紀要』（七五）　二〇〇九年八月）
・武井義和「中国における東亜同文書院研究」（『愛知大学国際問題研究所紀要』（一三二）　二〇〇八年九月）
・秦剛「『支那游記』における「私」――「文芸的」紀行文の成立と記述者の表現意識をめぐって」（『芥川龍之介研究』（二）　二〇〇八年八月）
・関口安義「『支那游記』の再発見――芥川特派員の成果検討」（『芥川龍之介研究』（二）　二〇〇八年八月）
・管美燕「上海の位相――芥川「上海游記」と劉吶鷗の上海」（『国文学　解釈と教材の研究』（五三（三））　二〇〇八年二月）
・『国文学解釈と鑑賞・特集芥川龍之介再発見―没後八〇年』（七二（九））（至文堂　二〇〇七年九月）
・秦剛「『支那游記』――日本へのまなざし」（『国文学　解釈と鑑賞』（七二（九））　二〇〇七年九月）
・秦剛「芥川龍之介が観た一九二一年・郷愁の北京」（『人民中国』（六五一）　二〇〇七年九月）
・秦剛「上海小新聞の一記事から中日文壇交渉を探る――谷崎潤一郎・芥川龍之介の上海体験の一齣」（『日本近代文学』（七五）　二〇〇六年一一月）
・秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象――〈支那趣味〉言説を批判する『支那游記』――」（『国語と国文学』（八三（一一））　二〇〇六年一一月）
・林嵐「芥川『支那游記』における〈英雄〉・〈豪傑〉」（『語学教育研究論叢』（二三）　二〇〇六年二月）
・王書瑋「芥川が中国旅行に求めたもの――「北京日記抄」――」（『千葉大学社会文化科学研究』（一一）　二〇〇五年九月）
・王書瑋「「上海遊記」の「徐家匯」――基督教受容史に芥川の見出した「近代」」（『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』（一二〇）　二〇〇五年三月）
・周徳喜「東亜同文書院始末」（『蘭州大学学報』社会科学版（三二（三））　二〇〇四年五月）
・単援朝「芥川龍之介・癒しの東洋（一）――北京への「郷愁」を中心に――」（『崇城大学研究報告』（二九（一））　二〇〇四年三月）
・陳玫君「谷崎潤一郎と芥川龍之介による「支那」の表象――紀行文を中心に――」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（五二）　二〇〇四年三月）

・関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　その知的空間』至文堂　二〇〇四年一月）
・三谷憲正「ジャーナリズム――「西方の人」を中心として」（『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介その知的空間』　二〇〇四年一月）
・張明傑「底知れぬ京都――芥川龍之介と北京――（続）」（明海大学教養論文集（一五）二〇〇三年一二月）
・張明傑「底知れぬ京都――芥川龍之介と北京――」（明海大学教養論文集（一四）二〇〇二年一二月）
・趙文遠「上海東亜同文書院与近代日本侵華活動」（『史学月刊』（二〇〇二年第九期）
・単援朝「同時代の中国における芥川龍之介『支那游記』」（『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』（六）　二〇〇一年一二月）
・和田博文「芥川の上海体験」（『国文学　解釈と教材の研究』（四六（一一））　二〇〇一年九月）
・単援朝「中国における芥川龍之介――同時代の視点から――」（『崇城大学研究報告』（二六（一））　二〇〇一年三月）
・関口安義編『国文学解釈と鑑賞別冊・芥川龍之介　旅とふるさと』（至文堂　二〇〇一年一月）
・張明傑「芥川龍之介と辜鴻銘」（『明海大学教養論文集』（一二）二〇〇〇年一二月）
・祝振媛「支那遊記」（『国文学解釈と鑑賞』（六〇（一一））　一九九九年一一月）
・村田好哉「横光と芥川――上海を巡って」（『解釈』（四四（五））　一九九八年五月）
・後藤明生「インタビュウ：後藤明生氏に聞く　イエス＝ジャーナリスト論、その他」（『国文学　解釈と教材の研究』（四一（五））一九九六年四月）
・西田禎元「芥川龍之介と上海」（『創大アジア研究』（一七）　一九九六年三月）
・施小煒「芥川龍之介の観た京劇」（『文芸と批評』（七（八））　一九九三年一〇月）
・津金澤聡広「雑誌『女性』と中山太陽堂およびプラトン社について」（『雑誌『女性』』（第四八巻）日本図書センター　一九九三年九月）
・単援朝「芥川龍之介『支那游記』の世界―夢想と現実との間―」（『国語と国文学』（八一二）　一九九一年九月）
・単援朝「芥川龍之介と胡適――北京体験の一側面――」（『言語と文芸』（一〇七）　一九九一年八月）
・青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（畢）」（『関東学園大学紀要』（一八）　一九九一年三月）
・単援朝「上海の芥川龍之介――共産党の代表者李人傑との接触――」（『日本の文学』（八）一九九〇年一二月）
・青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学園大学紀要』（一六）　一九八九年一二月）

・青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説」（『関東学園大学紀要』（一四）　一九八八年一二月）
・青柳達雄「李人傑について――芥川龍之介「支那游記」中の人物」（『言語と文芸』（一〇三）　一九八八年九月）
・戸田民子「芥川龍之介「上海游記」――里見病院のことなど」（『論究日本文学』（四六）一九八三年五月）
・飯倉照平「北京の芥川龍之介――胡適、魯迅とのかかわり」（『文学』（四九）一九八一年七月）
・小野和子「旧中国における『女工哀史』」（『京都大学東方学報』（五〇）　一九七八年二月）
・臼井勝美「五・三〇事件と日本」（『アジア研究』（四（二））一九五七年一月）
・西村貞吉「芥川龍之介より無名の友への手紙」（『文芸春秋』（五（一一））　一九二七年一一月）
・「自殺した芥川氏と北京　中野江漢氏談」（『北京週報』（燕塵社　一九二七年七月三一日）
・木下杢太郎「支那南北記」（『改造』（七（八））一九二五年八月）
・米内山庸夫「国際関係の現状に対する支那人の不平と要求」（『改造』（七（八））一九二五年八月）
・「支那新人の「新支那運動」」（『改造』（七（七））一九二五年七月）
・青木正児「蝴蝶夢解題」（『古典劇大系』（第一六巻支那篇）（春秋社　一九二五年七月）
・片山潜「支那旅行雑感」（『改造』（七（六））一九二五年六月）
・片山潜「日米の関係」（『改造』（六（四））一九二四年四月）
・「新芸術家の眼に映じた支那の印象　芥川龍之介氏談」（『日華公論』（八（八））一九二一年八月）
・「支那印象記　新人の眼に映じた新しき支那　近日紙上より掲載の筈」（『大阪毎日新聞』一九二一年三月三一日）
・成瀬無極「上海印象記」（『改造』（三（二））一九二一年二月）
・ラッセル「支那の第一印象（上）（下）」（『大阪毎日新聞』一九二〇年一二月五日～一九二〇年一二月六日）
・「東亜同文会主意書」（『東亜時論』（一）　一八九八年一二月）

謝辞

本論文は稿者が岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程に在学中、日本語・日本文学研究室で行った四年間の研究をまとめたものです。

本論文の研究を進めるにあたり、終始懇切なるご指導、ご助言を賜りました恩師西山康一先生、田仲洋己先生に心より深く御礼を申し上げます。研究生の時代から今日に至るまで、両先生は研究者・教育者としての基本姿勢など多くのことを教えてくださいました。まことにありがとうございました。

次に、本論文の審査をしていただきました山本秀樹先生、遊佐徹先生に心より深く感謝申し上げます。先生方から貴重なご指導とご助言をいただきましたのみならず、今後の課題を得ることもできました。

また、本論文における日本語チェックをしていただきました岡山大学東アジア国際協力・教育研究センターの土屋洋先生、研究室の後輩玉木なつめ氏に厚く感謝申し上げます。

それから、留学生活においていろいろと応援していただきました師友張敏氏、研究室の友人張照旭氏、羽原卓也氏、高翔氏に感謝申し上げます。

なお、本論文は、中国国家留学基金管理委員会と日本文部科学省が実施した「二〇一三年度日本政府（文部科学省）博士生奨学金留学人員項目」（「録取文号」：留金欧〔二〇一三〕六〇〇八号、「学号」：二〇一二〇八三三〇一九二）の助成を受けました。中日両国の関係者の方々に感謝申し上げます。

最後に、中国で見守りつづけ、様々な協力をしてくださいました両親、心の支えになってくれました妻呉蕾、むすめ宋皆宜に心より謝意を表し、謝辞とさせていただきます。